精神分析

第二卷第五號

昭和九年五月

ドストイエフスキー研究號

——又は、人間性研究號——

——（裏面に續く）——

東京精神分析學研究所出版部

昭和九年五月一日發行

精神分析　第二卷　第五號

ドストイェフスキー研究號

ドストイェフスキー略傳

フョードル・ミハイロヴィッチ・ドストイェフスキー（Fyodor Mihailovitch Dostojevsky）は、一八二一年十月卅日モスクヷの貧民病院の官舍で生れた。彼の父は其病院つきの醫員であり、その家族は窮迫狀態にあつた。十六才の時ドストイェフスキーは土木工兵學校に候補生として入學を許され、一八四三年迄そこに留まつた。一八三七年母親が沒し、二年後父親も亡くなつた。彼はその學校に居る中から文學を以て立つ決心をした。一八四五年に處女作「貧しき人々」を完成したが、之は詩人ネクラーソフと大批評家ベリンスキーの賞讃する所となつた。

一八四九年、ペトラシェフスキーの團員と共に逮捕され、死一等を減ぜられてシベリアへ流刑に處せられた。刑期は一八五四年二月に終つたが、一八五九年迄ペテルスブルグへ歸ることは許されなかつた。その後の數年間に兄と共に始めた雜誌「ウレミヤ」の爲に莫大な負債を引受けることになつた。一八六一年「虐げられたる人々」と「死の家」が出版された。一八六六年中、負債償却のために「罪と罰」を執筆したが、翌年本國を出奔し、流浪と貧困の間に「白痴」と「惡靈」とを書いた。彼が賭博に耽つたのはこの間のことである。一八七二年になつて漸く歸國することが出來て、ペテルスブルグに定住した。間もなく彼は「ある作者の日記」を出し始めた。一八七八年彼は「カラマーゾフ兄弟」を書き始めたが、前篇を完了したゞけであつた。一八八〇年にはプーシキンに關する有名な大演說をした。そして彼は人氣の頂點に立ち、ロシアに於ける最大作家の一人として認められた。

一八八一年一月ドストイェフスキーは肺臟の血管破裂し、一月二十八日に世を去つた。彼の葬式は、ロシア國民の心からの渴仰の現はれであり、その會葬者は二萬人に達したと云はれてゐる。

（岩倉記）

ドストイェフスキーと父殺し（フロイド）

――„Dostojewski und die Vatertötung,“（1930）S. Freud――

大槻憲二譯

ドストイェフスキーのドイツ譯の全集廿三卷はミュンヘンの書肆 R. Piper & Co., から出てゐるが、それの最後に追加增卷として『カラマゾフ兄弟の下書』が出版されてゐる。この卷中には作者がこの創作の考察や、この作に就いて知人に與へた手紙や、その他の資料、斷片が多く記載されてゐる。これ等の材料が分析學者の分析觀察に如何に助けとなるかは、今更申すまでもない。フロイドの以下の論文は、以上の材料に據つてなされたものである。（譯者）

一、ドストイェフスキーの癲癇の心理的意義

ドストイェフスキーの性格は極めて豐富であるが、これを詩人、神經病者、倫理家、罪障者の四つの面に分つことが出來よう。

ドストイェフスキーが詩人であることに就いては何人も異議がない。彼はシェイクスピアに比して敢て見劣りのするものではない。カラマゾフ兄弟は嘗て書かれた最も偉大な物語であり、大審査官の挿話は世界文學最高の精華で、如何なる讃辭も過度ではあり得ない、が併し、遺憾ながら純粹の文藝上の問題に對しては分析も齒が立たない。最も齒が立ち易いのは倫理家としてのドストイェフスキーである。ドストイェフスキーは最も深刻な罪の意識に悩んだ人であるが故に、道德家として最高の域に達したと云ふ理由で、彼を道德家として高く評價しようとするならば

それは少し考へが足りないことになる。内に誘惑を覺えて、それに靡くことなく、これに打克つたものは、これまた既に道徳的である。またしても罪を犯しておいてはあとでそれを悔い、高い道徳的な要求を自分に課するなどゝ云ふのは、あまり呑氣であるとの非難を免れることは出來ない。その人は道徳の本質たる、欲求の放棄を斷行しないのだ。何となれば、道徳生活は人間の實踐的な關心であるからだ。さう云ふ人間は民族移動の野蠻人を――殺しておいては贖罪をしてゐる野蠻人を――想起せしめる。かう云ふ行り方に於いては、贖罪は單に殺人を可能ならしめる一つの技法に過ぎない。恐ろしきイヴンの行り方とても、これと別に變りはない。實は、このやうにして道徳を帳消しにして行くのはロシア人の性格的特徴なのだ。ドストイエフスキーの道徳的苦鬪の結果とても、やはりさう香しいものではない。個人の本能的慾望と人々の社會的要求との間を調和させようとの激しい苦鬪の後に、彼は逆轉して世俗的又は宗教的權威の前に屈し、皇帝やキリスト敎神に對する畏怖のために屈し、或は狹量なるロシアの國民主義の前に屈したのであるが、かゝる境地ならばもつと普通の平凡人と雖も容易に到達してゐるのである。こゝにこの偉大な人格の弱點がある。ドストイエフスキーは人類の敎導者又は解放者となることをせず、人類の典獄の仲間入りをしてゐるのである。人類の文化の將來は、彼に負ふところあまり多くはない。何故さうなつたかと云ふに、それは多分彼が神經症であつたゝめに、さう云ふ破船狀態に陷つたのであらうと思はれる。あれほどの高らかな智力と、あれほどの人間愛の力とを具へてゐた彼のことであるから、もつと何とか別の、使徒的な生き方をしてゐさうなものである。

ドストイエフスキーを罪人又は犯人として見做すことは、激しい反對を招いてゐるが、これは必ずしも俗的な意味の犯罪者として見てかゝるには及ばぬ。人々はやがて現實的の動機を知るやうになる。犯罪者には二つの特徴が本質的である。限りのない我儘勝手と强烈な破壞的傾向とである。兩者は共通的で、これ等が行動となつて表はれるためには、愛情の缺如してゐる（人間的對象を情的に評價しない）ことが豫想されてゐなければならない。然るに、ドストイエフスキーの場合に於いてはこれと正反對であることを、人々は直ちに想起する。彼は他人の愛情を非常に要求するものであると共に、また他人を非常に愛することも出來る人である。そのために彼はあまりにお人よしになり過

き、當然他人を憎んだり復讐したりしてもよいやうな場合――例へば、彼の最初の夫人や彼の愛人等に對する關係の場合――にさへも、他人を愛したり助けたりしないでは居られないやうになるのである。そこで人々は訊ねるであらう、一體ドストイェフスキーを罪人だと云ふのは、何を根據としてゞあるか と……。答へはかうだ。――ドストイェフスキーがその材料として暴力的な、殺人的な、我儘勝手な性格を他の性格よりも好んで描いてゐることは、そのやうな傾向が彼に内具してゐることを意味してゐる。更に日常生活からの二三の事實を擧げるならば、彼の賭博癖と、未成熟の處女を恐らく姦したらしいこと（告白）とである。(註) これは矛盾したことであるが、併しドストイェフスキーの破壞本能は甚だ强烈であつたゝめに、彼は容易に犯罪者となつた筈であるが、實生活に於いてはそれがわが身に、(外への代りに内へ)向けられ、かくてそれはマゾヒスムスと罪惡感となつて表れた。彼の身邊には常に十分なサディスト的な特徴がつき纒つてゐて、それが彼の亢奮し易いこと、苛責好き、不寛容（その愛人に對してさへもの）となつて表はれ、また彼が作者としての讀者の取扱ひ方にもそれが表はれ、かくて小事に於いては外方へのサディストとなり、大事に於いては内方へのサディスト、卽ちマゾヒスト、つまり柔和な、氣のいゝ、非常に親切な人間となつてゐる。

註――これに就いてはステーファン・ツワイグの『知られざるドストイェフスキー』Stefan Zweig „Der unbekannte Dostjewski", 1926 の内の次の一節を見られたし。『彼は市民道德の垣根の前で止まらなかつた。また彼が實生活に於いて法律の限界を如何に深く踏越えるかは、また彼の作中主人公の犯罪的衝動の如何に多くが彼自身に於いて實行されるかは、何人も十分に云ひ得るものはない。』（『三文豪』„Drei Meister" 1920）ドストイェフスキーの創作と、彼自身の體驗との密接關係に就いては、„Dostojewski am Roulette" 1625 の序說に加へたルネ・フェーレップ・ミラー René Fülöp Miller の擧證を見よ。

錯雜した人としてのドストイェフスキーの中から、吾人は三つの素因をとり出して來たのであるが、それ等の内一つは量的なものであり、他は質的なものである。卽ち、彼の感動力の異常な高さと、彼をサド・マゾヒストもしくは犯罪者にまで驅りたてる倒錯的な本能傾向と、分析することの出來ない藝術的天分とである。これ等の全體は、別に

神經症でなくとも、存在し得るであらう。實際、別に神經症ではなくて、完全マゾヒストである者もゐる。本能的慾求と、それ等に對抗する禁制（その上に本能の昇華と云ふことも加はつて）との間の力の鬪係から見ると、ドストイェフスキーはやはり所謂『本能的性格』の一人として分類せらるべきであらう。併しそこに神經症と云ふことが這入つて來るので、折角の本能的性格も腐らざるを得ない。前にも云つた通り、かゝる事情の下では、神經症になるのも尤であつて、自我が支配せねばならない本能の錯雜さが豐富であればあるほど、愈々夙く神經症になるのである。ところで、神經症とはそのやうな綜合がうまく行かず、そのやうな試みに於いて自我の統一が失はれてゐることの證據に外ならぬ。

では一體、嚴格な意味に於いて神經症とは何に依つて證據立てられるのか。ドストイェフスキーは、自分が意識を失ひ、筋肉痙攣を持ち、その後で重い沈鬱に陷る發作があると云ふ根據で、自分を（さうしてこれは他の人の場合にも妥當はするが）癲癇病患者であると云つたが、この所謂癲癇は、彼の神經症の一徴候に過ぎなかつたやうである。これは、從つて、ヒステリー的癲癇として、卽ち重いヒステリーとして分類せられねばならなかつたのだ。が、完全な確證を摑むことは、二つの理由に依つて困難である。何となれば、第一に、ドストイェフスキーの所謂癲癇に關しては、その癲癇中の事の記憶を復活させてそれを知ることが旣に出來ない相談であるし、また第二に、癲癇發作の起きた時に如何なる病態をなすかが、明かになつてをらぬからである。

まづ第二の點から論じやう。今更こゝで癲癇の病理の全體を反覆するにも及ぶまい。この方の病理ではまだ何等決定的なことが分つてゐないが、併し一見したところでは臨床的に一致したところとして、古き『聖病』Morbus sacer が現れる。卽ち、別に誘發したわけでもないのに譯の分らぬ痙攣發作が起きる。性格が一變して亢奮し易く、攻擊的になり、あらゆる精神的な仕事が漸進的に低下するやうになる。氣味の惡い病氣である。かう云ふと判然してゐるが併しながら、これが漸次變化して行つて最後には極めて判然しないものになつて了ふ。癲癇の發作は動物的に起り、舌を嚙んだり、尿を垂流したり、生命を脅すやうな癲癇狀態に達し、重き自己傷害を伴ふが、併しその中斷期間は短

く、單に一時的に過ぎ行く眩暈狀態に止まり、漸時にして復舊することが出來るが、その時期の間に患者は、無意識の支配下にある如く、自分の行つたことを知らないでゐる。普通には純粹に肉體的條件に基き、甚だ不可能な過程に依つて生ずるが、併しその最初の發生は純粹に精神的な影響力（恐怖）に負ふてゐるか、或は精神の亢奮に反應するのである。その發作の大多數に於いては、知力の低下は甚だ特質的であるにしても、併しこの發作の間に知力の働きの最高度が少しも損傷されない、少くとも一つの場合が知られてゐる。（ヘルムホルツ）（同樣の事が云ひ得る他の場合はあまり確かでないか、或はドストイフェスキー自身の場合のやうに判然してゐないか、である。）癲癇に襲はれてゐる人間は、馬鹿か發育の遲れてゐる者と云ふ印象を與へるが（また實際この病苦は白痴や頭腦に大缺陷あるものに屢々起り勝ちではあるが、よしんばこれが、この病狀の必然的構成部分ではないにもせよ）、併しこれ等の發作は、それ等發作のあらゆる變化した形のものを伴つて、さう云ふ低能者以外の者にも（その精神狀態は完全に發達し、否寧ろ、その本能的感動力があまりに大に過ぎ、これを十分に支配することの出來ない程である者にも）起るものである。して見ればこのやうな事情下で人々が、『癲癇』と云ふ病氣の統一性を臨床的に確立し得ないと發見したことも、敢へて不思議ではない。表現せられた症候を外から見て如何に類似性があらうとも、それには機能的な見方が必要であるやうに思はれる。宛も變態的な本能發揮の一つの機制が豫め構成せられてゐて、その機制が全然相異る事情の下に於いて要求せられるのだと云つたやうな見方が――。卽ち、頭腦の働きが重き、錯雜した、中毒的な病氣に依つて障害せられると云ふ事情もあらうし、また心理經濟が十分に統制されないで、心內に働くエネルギーの驅使が危機に瀕すると云ふ事情もあるであらう。これ等二つの區分の背後に人々は、本能發揮の根本に横たはる機制が同一であることを人々は感ずる。同じ機制はまた性的過程（これは根柢に於いて中毒的な原因に基くものである）にも緣がなくはない。既に昔時の醫家が、性交を小癲癇と名付け、かくて、性行爲に於いて癲癇的な亢奮發散の緩和と適應とを認識してゐるのである。

これ等共通的なものを『癲癇的反應』と名付け得るとすれば、かゝる反應はまた疑ひもなく、神經症者の利用する

ところであつて、即ち彼等神經症者は、これを心理的に處理することが出來ないが故に、肉體的(ゾマティシュ)な方途に於いて處理すると云ふのが、彼等の利用の仕方の本質である。癲癇的發作はかくて、ヒステリーの一つの症候となり、ヒステリーに依つて適應せられ、變化せしめられる。それは丁度、常態的な性的發散に依つて適應せられ、變化せしめられるのと同樣である。で、我々は、肉體的な癲癇と『本能感動的』のそれとを區別することが、當然となつて來る。そこでそれの實踐的な意義は如何と云ふに、前者を有するものは腦病者であり、後者を有するものは神經症者であると云ふにある。前者の場合に於いては、心理生活はそれの與り知らぬ外部からの障害を受けることであり、後者の場合に於いては、この障害は心理生活それ自身の表現である。

　そこでドストイェフスキーの癲癇はどうかと云ふに、これは明かに第二類に屬するものであるらしい。それを嚴密に證明することは、我々には出來ないが、そこで我々は發作の最初の擡頭とその後の變化とを彼の精神生活の關係中に配列することが出來なければならないわけであるが、それをするに就いて我々の知つてゐることはあまりに少い。發作それ自身を記述しても我々には何も知られない。發作と體驗との間の關係に就いては、我々の知り得るところは少いし、また屢々相矛盾してゐる。で、どうやら最も間違ないと察せられることは、ドストイェフスキーの發作はどうやら彼の遙かな幼兒時代にまで溯るらしいことである。彼の發作は始めの內はもつと穩かな症候として現れてゐたが、その後十八歲の時に衝撃的な體驗を持つて以來(父が殺されて以來)癲癇と云ふ形をとるやうになつたらしい事である。(*)で、彼がシベリアで懲役に從つてゐた間には彼の發作が完全に收まつてゐたと云ふやうな事がもし證明せらるれば、誠に都合のいゝ事になるであらうが、併しそれにはまた別の問題がそれを妨げてゐるのである。(**)カラマゾフ兄弟に於ける父殺しとドストイェフスキーの父の死との間には明かに關係の存することは多くの傳記者が認めてゐるところであつて、かくて彼等はそこに『或る近代的な心理的傾向』の存することを仄めかすやうになつたのである。精神分析的な見方(を彼等は意味してゐるのであるが)は、この事件に於いて最も重き外傷を、この事件に對するドストイェフスキーの反應に於いて彼の神經症の要點を、認識しようとの誘惑を覺える。

註* これに就いては、ルネ・フュレップ・ミラーの論文『ドストイェフスキーの聖病』(in „Wissen und Leben" 1924, Heft 19/20)を參照ありたい。殊に興味のあるのは、ド氏の幼兒時代に於いて『何か恐ろしい、忘られない、苦しいこと』が起つたと云ふ話である。さうして彼の惱みの最初の徴象はこの事に溯るのである。更にまたオーレスト・ミラーは、その『ド氏自傳文』の中で、かう云つてゐる。『フィオドル・ミカイロキッチの病氣に關しては、或る特別なことが云はれてゐる。その云はれてゐる事は、彼の早期少年時代に關係があり、またその病氣はド氏の兩親の家庭生活に於ける或る悲劇的事實と結びついてゐる。が、この話はフィオドル・ミカイロキッチと非常に關係の近しい或る人から私は聽いたのであるが、併し私は何れの方面からも噂の確證を得てゐるわけではないから、この話をこゝで詳しく十分にお傳へする決心がつかないのである。』傳記者と分析者とはかゝる愼み深さに對しては感謝するわけには行かない。

註** 然るに大低の傳記者の云ふところは(ド氏自身もさう云つてゐるのだが)寧ろこれに反し、彼の病氣は彼のシベリアに於ける服役期間中に始めて確定的な、癲癇な特質をとるやうになつたと云ふのである。併し遺憾ながら我々としては、神經病者の自傳的告白なるものを丸々信用することは、我々には、相當の根據あつて、出來ないのである。彼等の記憶が何故にそれほど誤つてゐるかと云ふに、それは彼等が不快なる原因關係を打破しようとするものであることを、我々は分析實驗に依つて知つてゐる。併し、シベリアの獄中生活はド氏の病狀を非常に變化せしめたと云ふことは、確實であるやうに思はれる。この點に就いては『ド氏の聖病』を參照ありたい。

併し我々がこの見方の根據を精神分析學的に確立しようと企てるならば、精神分析の云ひ表はし方や學說には親熟してゐない總ての人々には分らないやうな事を、云はなければならなくなることを虞れる。

我々の確實な出發點は一つある。ドストイェフスキーの『癲癇』の現れる遙か以前、彼の少年時代に於ける最初の發作の意味を我々は知つてゐる。この發作には死の意味があつた。これは死の不安に依つて導入せられ、昏睡狀態に陷るものであつた。彼がまだ少年の時分に、まづ氣分が突然に、何等根據もなく重苦しくなるのであつた。その感じは(彼が後年にその友ソロギョフに語つたところに依ると)、宛も直ぐに死んで了ふかのやうであつた。さうして實

際また、本當の死とそつくりな狀態に陷るのであつた。……彼の兄弟のアンドレーの報告するところに依ると、フェードルは既に少年の頃から就眠の前に、常に書付けを枕頭に置いてゐた。彼は夜中に假死狀態に陷ることを恐れ、それ故に五日經てからでなければ自分を埋葬しないでくれと依賴してゐるのであつた。（„Dostojewski am Roulette“ Einleitung, Seite LX.）

我々はそのやうな死の發作の無意識的意味と意圖とを知つてゐる。それは死人、實際に死んでゐる人、或はまだ生きてゐるが、人々から死ねばよいと思はれてゐる人間との同一化を意味してゐるのだ。最後の場合が、一層意味深長である。つまり、かゝる發作は懲罰としての價値を持つてゐるのだ。或る人が或る他の人間の死を願望する。ところでその或る人はこの他人であり、さうして自分で死んでゐる。こゝに於いて精神分析學は、この他人が男兒にとつては大抵の場合、父であると主張するのである。ヒステリー的と名付けられるこの發作は、かくて、憎んでゐる父に對して死を願望したことの自己懲罰であるのだ。

父殺しは（人々の既に知つてゐる精神分析的な考へ方に從へば）人類、並びに個人の主要罪惡であり、また原罪でもある。(*) 父殺しは常に、罪障感の主要原因である。唯一の原因であるかどうかは、我々も知らない。我々の研究も未だ、罪惡及び贖罪願望の心理的根源の何であるかを確め得なかつた。併しその根源はたゞ一つに限るには及ばない。這般の心理は錯雜してゐるから、闡明を必要とする。男兒の父親に對する關係は、我々の云ふ如く、相反並存(アンビバレント)的である。父を競爭者と見做し、これをなきものにしようとの憎惡以外に、常に必ず、父に對する或る程度の感傷愛が存在する。二つの心的態度は合一して、父への同一化となる。男兒は父親に感心してゐるが故に、父の代りにならうとする。父をなきものにしようと欲するが故に、父の如き者とならうとする。かゝる心的發展は、今や一つの力強き抵抗に逢着する。或る瞬間に於いて子供は、父を競爭者として凌がうと企てたりすると、父から去勢に依つて罰せられるであらうと理解するやうになる。この去勢不安からして、自分の男性を保持しておかうとの關心からして、子供は母親占領慾を、父親驅除慾を、放棄するやうになる。これ等の慾望が無意識に保存せられてゐる限りは、そこに罪

障感の根柢が殘存するのである。我々はこれまでのところで、常態的な過程を、所謂エディポス・コムプレクスの常態的な成行を、記述して來たと信ずる。なほ一つ重要な補足の言を、我々はこゝに述べなければならない。

註* 『トーテムとタブー』を參照せられよ。

然るにその子供がもし、我々の所謂兩性具有てふ素質的要素を強く持つてゐたならば、更に一層の錯綜が生じて來るのである。その場合には、去勢に依つて男性たることを奪はれさうであると、女性の方向へと廻避しようとの傾向が——寧ろ自ら母の代りとなり、父に對する愛の對象としての母親の代りにならうとの傾向が——强くなつて來る。併し、去勢不安のためにまたこの解決法も、やはり不可能となる。男兒が父親から女の如く愛されようと欲するためには、どうしても去勢を容認しなければならないと云ふことを、彼等は知つてゐる。そこで、父への憎惡も父への惚込みも、兩つながらが抑壓せられて了ふことになる。これを心理學的に區別するならば、大體から云ふことになる。——父への憎惡は外的危險（去勢）に對する不安のために放棄せられるが、併し父への惚込みは本能の內的危險として取扱はれる。が、この危險はやはり根柢に於いては、同じ外的危險に還元せられることになる。

父への憎惡を支持しきれなくさせるものは、父に對する不安である。去勢は、愛の懲罰としても、愛の價としても恐ろしいに違ひない。父への憎惡を抑壓する二つの素因の內、第一の方、卽ち直接的な懲罰不安、並びに去勢不安は常態的素因と名付けらるべきだが、それが病的に强まるのは、他の素因（卽ち、女性的心理態度に對する不安）がそこに加はることに依つて始めて生じ來るもの〻如くに思はれる。であるから、强い兩性的な性向あることは、神經症を强めたりそれの條件の一つとなつたりするのである。さう云ふ性向の一つがドストイェフスキーにはあつたことは確である。現にそれが存在し得べき形（潛在的同性愛）となつて見えてゐるではないか。生涯の間、男性の味方となつたことの意義に見えてゐるではないか。戀愛の競爭者に對する彼の特殊な感傷的態度に、見えてゐるではないか。また彼が或る事情（それはたゞ抑壓せられた同性愛に依つてのみ說明され得る——彼の作中の多くの實例が示す如く——事情）に對して著しい理解を示したことに、見えてゐるではないか。

以上述べて來たやうな、父に對する愛憎の心理、並びにそれ等が去勢脅威のために影響せられて變化すると云ふ說は、精神分析をあまりよく知らない讀者諸君にまで、あまりに唐突で、あてにならないやうに思はれるであらうことを、私は恐れるが、併しそれは如何とも仕樣がない。抑々この去勢コムプレクスなるものは、一般の人々から最も反對されるものであることをさへ、私はよく承知してゐる。併し私としてはたゞから斷言することが出來るのである。——精神分析的研究の結果に依つて、この去勢コムプレクスなるもの丶存することは絕對に疑ふ餘地のないものであり、あらゆる神經症の鍵はそこに存するものであることを認めざるを得ないのである、と。そこで我々はまたこの鍵を、ドストイェフスキーの所謂癲癇に就いても求めなければならないのである。併しながら、我々の無意識心理生活を支配してゐるものは、我々の意識には甚だ思ひがけないものであるのだ。

右に述べて來たところだけで、エディポス・コムプレクスに於ける父憎惡の抑壓の結果は、總て盡されてゐるわけではない。なほそこに遂に新たに這入り込んで來るものは、父への同一化である。この父への同一化は自我の中に受容せられるが、併し特殊な力として自我の他の內容と對立するのである。我々はこれを超自我と名付け、兩親の感化の遺物としてこれが最も重要な機能を果すものであると認めるのである。

父親が苛棘で、强制的で、殘酷であると、自我は父からこれ等の性質を己れに受容れ、自我に對する超自我の關係の中に受身的態度（正に抑壓せらるべかりしこの態度）が再建せられる。超自我は加虐的（サディスティッシュ）となり、自我は被虐的（マゾヒスティッシュ）となる。つまり、根柢に於いて、女性的、受身的となる。そこで自我內に一つの大きな自己懲罰慾が生じ、この慾求は一方に於いてはそれ自身の本性として懲罰を甘受すると共に、他方に於いては超自我に依る虐待（罪惡意識）の中に滿足を見出すのである。一切の懲罰は、實は無意識根柢に於いては、去勢であり、從つて去勢としては、父に對する古き受身的態度の充足である。從つてかゝる充足は結局、後年になつて父を投出してゐるに過ぎない。

良心構成の過程は常態的であるが、こゝに述べて來た變態的過程と似たものでなければならない。併し兩者の限界

を確立することは、我々にはまだ十分に出來てゐない。その他、偶然的素因として重要な意義を帶びて來なければならないことは、萬人に於いて恐れられてゐる父親がやはり現實に於いて暴君的（强制的）であるかどうかと云ふことである。この事はドストイェフスキーに對して的中してゐる。で、我々は彼の異常な罪障感と彼のマゾヒスティッシュな生活仕方とを、彼の本能が特に强く女性的であつた點に歸することになる。で、ドストイェフスキーに就いてはかう云へるであらう。――彼は特に兩性具有的傾向が强かつたから、特に苛酷な父親への依屬に對して特に激しく己れを防禦するやうになるわけである。この兩性具有的性格を我々は、前から分つてゐる彼の本質の成分に附加する。彼の少年時代に起つた『死の發作』の症候はかくて、超自我から懲罰的に認許せられてゐる（自我の父への）同一化として理解せられる。お前は自分で父親になるために、父親を殺さうと思つたのである。今やお前は父となつてゐる。併し死んだ父となつてゐる。これがヒステリー症候の普通の機制である。そこへまた、今や父親はお前を殺すのである。自我にとつては、死の症候は男性的願望の空想滿足であると同時に、被虐的の滿足である。超自我にとつては、懲罰滿足であり、從つて加虐的滿足である。自我と超自我の二者が、父親の役割を果して行くのである。――全體として見ると、本人と對照としての父との間の鬪係は、その內容を持續する內に、自我と超自我との鬪係にまで變化して了つたのである。場景が轉じて第二の舞臺に移つてゐるのである。エディポス・コムプレクスからのそのやうな幼兒的反應は、もし現實がそれ等の反應に何等その後の哺育を供さなかつたならば、解消して了ふかも知れない。併し父親の特質はそのまゝに殘存してゐる。否、その特質は年と共に惡化して來る。ドストイェフスキーの父憎惡は、彼の惡父に對する願望は、やはりそのまゝ存續した。そこでもし現實が、そのやうな抑壓せられてゐる願望を充足させるやうなことがあると、それは危險である。空想が現實となつて來る。一切の防禦方策は今や强められて來る。そこでドストイェフスキーの發作は癲癇的特質をとり、常に懲罰的な意味のある父への同一化となるが、併し父の恐ろしい死の如く、やはり恐ろしいものとなる。ところがその際に、それ等の發作が如何なる（殊に性的な）內容をとつてゐたかは、我々には察知し得べくもない。

こゝに注意すべきことが一つある。——それは痙攣發作の間に最高淨福の瞬間が經驗せられると云ふことである。かゝる瞬間は、恐らく父の死の報に接した際に勝利と解放とを定着的に感ぜしめたのであらうが、これに對してはやがてまたそれだけ殘酷な懲罰がついて廻るのであつた。そのやうな勝利と悲哀、祝祭と痛恨との繼起は、やはり原始族の（父を殺した）兄弟たちの間にもあることを我々は察知し、またトーテム餐の儀式の内にもそれ等が繰返されてゐることを發見してゐるのである。ドストイェフスキーがシベリアに居た間には發作に襲はれなかつたと云ふのが中つてゐるならば、それはたゞ彼の發作が彼の懲罰に過ぎなかつたことを示すものである。併しこれは證明の仕様のないことだ。それよりも寧ろ、彼がこの悲慘と銷沈との幾年を默々として勤め上げたと云ふ事は、ドストイェフスキーの心理經濟に對して、かゝる懲罰が必要であつたゝめであることは明かである。これほどの懲罰は不當であることを彼は知つてゐたに相違ない。併し彼は父なる皇帝のかゝる不當なる懲罰を、現實の父に對する彼の罪障が償すべき懲罰への代償として、甘受したのである。自己懲罰の代りに彼は、父の代理者に依つて彼自身を懲罰せしめたのである。社會の課する懲罰にも、かゝる點から見れば、その心理學的是認の理由が存するわけである。犯罪者の大部分は懲罰を要求してゐると云ふのは眞實である。彼等の超自我はそれを求めてゐる。人から罰を加へて貰へば、自分で處罰するに及ばないからである。

ヒステリー症候の意義の錯雜なる變化を知つてゐる者は誰しも、ドストイェフスキーの發作の意義の根柢が奈邊に存するかを、このやうな始めから定めてかゝるやうな企てはなされないと云ふことを理解するであらう。（*）彼の發作の本來の意義は、その後のあらゆる經驗の堆積があつたに拘らず、そのまゝ相變らずに殘つてゐたと云ふことを假定し得るだけで十分である。ドストイェフスキーは父殺しを意圖したことのための良心の苛責から嘗て遁れたことがない、と云ふことが出來よう。この良心の苛責はまた、父親關係がその基本となつてゐるところの二つの他の方面に於ける彼の態度を決定した。即ち、國家的權威と、神への信仰とに對する彼の態度を決定した。皇帝は實際に於いて嘗て彼と共に殺人の喜劇を演じたことがある。これをやる度に、後で彼に發作が起きる慣はしになつてゐた。こゝで

は贖罪が主要な意味を帶びてゐた。宗教的分野に於いては、彼にはもつと自由があつた。相當確からしく思はれる報道に依ると、彼はその最後の瞬間まで信仰と無信仰との間を動搖せねばならなかつた。彼の偉大な知力を以てして、何等かの思想上の困難（彼の信念が到達すべき）を看過することは、到底出來なかつた。人類の發展を個人的に反覆するに際し、彼はキリストの理想に於いて一つの遁道を、罪の解消を發見しようと希望した。彼の惱みそれ自身をさへ、キリストの役割に於ける必要事として利用しようとした。併し彼がそれを總じて解放することが出來ないで、反動者となつたにしても、一般の人の子の罪（宗教的感情はこれに基くのであるが）が彼に於いて超個人的な强さに達し、彼の偉大な知力を以てしてもこれを克服出來ない次第となつたのである。かう云ふ物の云ひ方をしては、分析學の不偏不黨性がなくなり、ドストイェフスキーの評價――さう云ふことは何等かの黨派の世界觀からのみ是認せられる――を受容することになるとの批難を被ることになる。保守家は大審査官の黨となつて、ドストイェフスキーに對して別の判決を下すであらう。この非難は尤である。この非難を緩和するために、人々の云ひ得ることはたゞ、ドストイェフスキーは彼の神經症の結果として思考力が禁制されてゐたゝめにあのやうな決心をすることになつたらしいと云ふことだけである。

註＊　「トーテムとタブー」を見よ。ド氏は自分の發作の意義と內容とを自分で最もよく報告してゐる。彼がその友ストラコフに語つてゐるところに依ると、彼の癲癇發作後の亢奮し易さと沈欝とは、彼が自ら罪人であると思ひ、自分にもしかと分らぬ罪の重荷を負ふてをり、或る大きな不正行爲のために惱んでゐると感じるためであると。（「ドストイェフスキーの聖病」一一八八頁）そのやうな嘆きの中に精神分析は「心理的現實」の一部を認識し、無意識の罪を意識化せしめるに骨折るのである。

二、世界文學の三大傑作に於ける父殺し

世界文學の三大傑作たる、ソフォクレースの『エディポス王』と、シェイクスピアの『ハムレット』と、ドストイ

エフスキーの『カラマゾフ兄弟』とが、同じ主題を取扱つてゐることは、偶然ではない。三つの何れもに於いて、行爲の動機が女のための性的競爭にあることが露骨である。最も正直に出してゐるのは、ギリシアの傳説に基いてなされてゐる、かの戯曲である。これに於いては、主人公はその行爲をさへなし遂げてゐる。併し苟もそれが詩的作品である以上は、多少の緩和と韜晦とがなくてはかなはない。父殺しへの意圖を赤裸々に了解するは分析の目指すところであるが、これは分析學的の下準備なくては堪えられないことであるやうだ。ギリシアの戯曲に於いては、本當の事情を示すに際し、如何にも優秀な詩的天分を以てこれを不都合に軟化するに、主人公の無意識的意圖を彼の與り知らない運命の强迫として現實的なものゝ中に投出すると云ふ、うまい方法を採つてゐる。主人公は父を殺し母と婚するの行爲をその意志なくして行つたことになつてはゐるが、併し彼が父の象徵（代理）たる怪物スフィンクスに對し父殺しの行爲を繰返して後に、母と婚し得てゐるところを見ると、やはりその意圖あつて行つたものと見做さゞるを得ないのである。彼の罪が發覺し、意識化せられた後に、彼は自分をして罪を犯さしむるの幇助者となつた運命の强迫を指摘することに依つて、自分の責を免れようとはせず、直ちにそれを承認し、宛も完全に意識的な罪惡であるかのやうに服罪してゐる。これは考へて見れば不當な事でなければならないのだが、併し心理的にはそれで正しいのである。（*）

註* 本誌創刊號所載『エディポス王』（松居松翁氏譯）參照。（譯者）

ハムレットに於ける對兩親的感情の表現は、もつと間接的である。主人公は別に自分では父殺しの行爲を遂げてはゐない。主人公でなくその叔父がそれを遂げてゐるが、この人物にとつてはその行爲は父殺しではない。父を女に就いての性的競爭者と見なすと云ふ破廉恥的の動機は、從つてそれほど曖昧にしておくには及ばないのだ。また主人公のエディポス・コムプレクスを我々は、云はゞ、反射光線の中に認めるのだ。現に我々は、叔父の行爲の效果が主人公の上に如何に及んでゐるかを知つてゐるのである。彼は父を殺した叔父に對して復讐をしなければならなかつたのだが、彼にはそれが出來ない。その出來ない樣子が、如何にも意味深長である。彼がその復讐をなさうとして爲し得

ないのは、彼の罪惡感のためであると、我々は知るのである。彼は自分が復讐の任を果し得ないことを知つてゐるために自分の罪惡を感ずるのだと思つてゐるが、これこそ全く神經症者のいつものやり方である。また主人公はこの罪を超個人的のものとして感じてゐる徵象が見える。彼は自分を輕蔑すると同樣に、他人をも輕蔑してゐる。『その功罪に從つて扱ひを受けるとして、打擲を受けぬ自信のあるものが幾人あらう。』この方面に於いては、かのロシア小說は更に一步を進めてゐる。

カラマゾフ兄弟に於いても、人殺しをするのは主人公以外の者である。併しその者が被害者に對する關係は、主人公ドミトリのそれと同じく息子の關係である。ドミトリに於いては性的競爭の動機は公然と告白せられてゐる。つまり下手人とドミトリとは兄弟であつて、この兄弟の一方に對して作者は自分自身の病氣であるところの癲癇を與へてゐるのである。宛も、自分の內なる癲癇病者、神經症者であるところの者が、父殺しであることを告白せんと欲するものゝ如くに……。そこで作者は、法廷に於ける辯護士をして心理に對する有名な嘲罵を——心理は兩頭の棒であるとの嘲罵を——云はしめてゐる。實に偉大な胡麻化しである。何となれば、ドストイフェスキーの考へ方の深意を發見するためには、その胡麻化しの被ひを裏返して見なければならないからである。心理がこの嘲罵に價するのではなくして、法廷の取調方がこれに價するのだ。誰がその行爲を實際に行つたかは、實は、どちらでもよい事なのだ。心理にとつて肝要なのは、誰がその行爲を感情的に欲したか、またそれが起つた時にまアよかつたと思つたのは誰かと云ふ事なのだ。從つて、對比的な人物としてのアリョーシア以外の總ての兄弟は同罪である、衝動的な享樂人も、懷疑的な皮肉も、癲癇的な犯罪者も……。

カラマゾフ兄弟の中に、如何にもドストイェフスキーらしい一場面がある。スタレッツはドミトリと對談してゐる內に、相手に父殺しの下心あることを認識し、さうしてわが身をドミトリの前に投げ出すのであつた。これは決して相手に感心したゝめではないのだ。それは、聖者が殺人者を輕蔑し嫌惡しようとの誘惑を自分から驅逐しようとし、そのために自分の方からへり下つたのだと云ふべきである。犯罪者に對するドストイェフスキーの同情は、實際、無

限であり、それは不幸な犯罪者が當然價すべき同情を遙かに超え、宛も古代人が癲癇者や狂人を神聖な畏怖を以て見た、それを想起せしめるのである。犯罪者は彼にとつては救濟者の如くであつた。もし彼が負ふてくれなかつたら、誰かゞ負はねばならない罪をわが身に引受けてゐる救濟者の如くであつた。彼が旣に人殺しをして了つたのだから、自分等はするに及ばない。併し自分等は彼に感謝しなければならない。彼がやつてゐなければ、自分でやらなければならないからである。それは善良なる同情ばかりではない。それは同樣な殺人的衝動に基く同一化である。本來、少しだけ轉位せられた自己愛である。それ故にとて、かゝる善良さの倫理的價値を否むには當らない。恐らくこれは他人に對して善良なる關與を持つことの一般的機制であらうが、これの極端な場合は、罪惡意識に支配されてゐる文豪に於いて、特に明白に觀取することが出來るのである。その同一化的同情が、ドストイェフスキーをしてその材料選擇を決定せしめることになつたことは、疑ひを容れない。さうして彼の生涯の終りに於いて、原始犯罪者へ、父殺しへと、彼は還元して政治的、宗敎的の犯罪者を、取扱つた。併しながら、彼はまづ普通の（我慾からの）犯罪者を、行つた。さうしてかゝる犯罪者に、彼は自分の詩的告白を寓したのである。

三、ドストイェフスキーの賭博心理

ドストイェフスキーの遺稿、及びその夫人の日記が公刊せられて、彼の生涯の一つの挿話が、彼がドイツに於いて賭博熱に捕はれた時の事が、明白になつた。(„Dostojewski am Roulette“) これは何としても病理的な情熱の發作に外ならないもので、また如何なる方面から見ても、さう評價するより仕方がない。これは注意すべき、著しい、併し誠に困つた行爲であるが、そこに理窟付けがなくはない。罪障感は負債と云ふことに依つて、その具象的な代表を作り出してゐるので、これは神經症者に於いて敢て稀らしからぬことだ。ドストイェフスキーが賭博をしたのは、その利益に依つて負債を償却し、債權者たちに迷惑をかけないで、ロシアへ歸ることが出來るやうにと云ふわけであつた

が、併しこれはほんの口實に過ぎなかつた。ドストイェフスキーはその口實を認識出來ないほど頭は惡くはなかつたし、またそれを告白するだけの正直さを持つてゐた。彼は賭博をやることそれ自身が主要であり、遊びのための遊び(le jeu pour le jeu)であることをよく承知してゐた。(*) 彼の衝動的にあまり考へを廻らさない細々した行動の總てを見ると、この事、並びにその他の事もよく分る。彼は總てを失ふまでは落着かなかつた。賭博遊びも彼にはやはり自己懲罰の一法であつた。彼は幾度となくその若き夫人に、もう賭博はしない、今日はしないと約束をしたり、誓ひを立てたりしたが、夫人の語るところに依ると、いつもそれを破るのであつた。損失に依つて彼自身及び夫人を極端な悲慘に陷れると、彼はそれに依つて第二の、病理的滿足を得るのであつた。彼は夫人の前に自分を卑下し、辱め、夫人から輕蔑せられ、年老いた犯罪者と結婚したことを悔んで貰ひたがつた。かくて彼は良心の重荷が下ろされて、その翌日にはまた賭博に赴くことが出來た。やがて若い夫人もこのやうな循環に馴れつこになつた。何となれば、現實に於いて唯一の救ひとなるべき文藝創作の事は、彼が最後の所有をさへ入質して了つた後に於いてほどうまく行くことはないことを氣付いたからである。彼は勿論、這般の消息を悟りはしなかつた。彼の罪障感が自分で自分に加へる懲罰に依つて滿足させられた時に、彼の仕事への心的障害は取除かれ、仕事が首尾よく行くやうに少しづゝなつて行くのであつた。(**)

註* 『要するに遊びそれ自身が問題なのだ』と彼は或る手紙の中で云つてゐる。『私は貴君に誓ふが、私は勿論何よりも金に困つてゐるが、所有慾のために賭博をするのではない。』

** いつでも彼は總てを失ふまで、完全にすつからかんになるまで、賭博臺の前に頑張つてゐた。たゞこの困つた病癖が滿足せられた時にのみ、遂に惡魔は彼の魂から去つて、創造的天才にその場所を讓るのであつた。(R. Fülöp-Miller, „Dostojewski am Roulette," p. LXXXVI.)

四、賭博心理一般の分析的考察

永く埋もれてゐる幼兒期經驗の如何なる部分が、賭博遊戲への强迫となつて復活し來るかは、比較的年若な一作家の小說を機緣として察知することが困難でない。ステーファン・ツワイグはその論文『三文豪』(„Drei Meister“)の中で、やはりドストイェフスキー研究を試みてゐるが、彼がその三作品を纒めた小說集であるところの『感情の亂れ』„Die Verwirrung der Gefühle“の中に、『或る夫人の生活からの廿四時間』と題する小說を揭げてゐる。この小さい傑作の意圖するところは、女が如何に無責任なもので、思ひがけない生活印象に依つて途方もないことまで仕出かすものだと云ふことだけを示さうとしたものであるらしいが、併しこの小說にはそれ以上の事が云はれてゐる。別にさう云ふ斷り書はないけれども、それとは全然別の事が、一般に人間的なもの、或は寧ろ男性的なものが、(分析眼を以て見ると)表はれてゐる。さうしてそのやうな解釋は、どうしても否むことが出來ないほどに、適確なものである。藝術作品の本性に對して特徵的であるのは、私の知つてゐる文藝家にその作品を分析解釋して聞かせると、それは全く思ひがけないことであり、さう云ふ意圖はない(そのくせそれと感ぜしめる證跡は作品中の細部に編込まれてあるに拘らず)と確言することである。

ツワイグの小說に於いては、或る老貴婦人が作者に自分の二十年以上も前の一つの經驗を物語るのであつた。彼女は夙く寡婦になり、二人の息子の母親であつたが、その息子たちはもう早その母を必要としない年齡に達してゐるのであらゆる人生の期待から離れて了ひ、四十二歲の時にこれと云ふ目的もない旅に出で、モナコのカヂノの賭博室に這入り込み、そこで色々と興味ある印象を受けたが、就中、或る美しい青年の二本の手を瞥見してそれに魅力を覺えた。その手にはその青年の負賭博の痛ましい感情が、如何にも歷々と、激しく表はれてゐるやうに思はれた。作者はその青年の年齡が、その貴婦人の長男のそれと同じくらゐであることを、別に何の意圖もないらしく書いてゐる。で、その青年は何もかもはたいて了つて、深い絕望の內に賭博場を出て行く。希望なき生活を公園で終らうとするのであつた。貴夫人は名狀し難い同情に驅られて、その青年の後を追ひ、何とかして彼を救つてやらうと試みた。青年はその夫人を、さう云ふ場所にはいくらでもゐる五月蠅型(うるさがた)の一人だと思ひ、追拂はうと思つたが、何としても夫人は彼の傍

を離れず、極めて自然なやり方で彼を强ひ、そのホテルの同室に宿り込み、遂には同じ寢臺をまで頒前するやうになつた。この卽興詩的な戀愛の一夜は明けて、夫人は、打見たところ大分落着いて來たらしい青年に、もう再び賭博はしないとの誓ひを非常に嚴かにさせて、國へ歸る旅費を彼に與へ、なほ汽車の出る前に停車場で會はうと云ふ約束をした。けれども彼女には、青年に對して非常に大きな感傷愛が眼覺めて來、總てを犧牲にしても彼を引止めておかうと思ひ、彼とは別れずに、彼と一緒に旅行をしようとの決心をした。ところが偶然的によんどころない障碍が起つて到頭彼女はその汽車には間に合はなかつた。行つて了つた青年を憧憬れる心持ちから、彼女は再び賭博場を訪れて見ると、そこには驚いたことには、彼女の同情を始めに牽いた手が再び見出された。約束を忘れた青年はまたもやそこに來てゐるのであつた。夫人は彼の違約を難じたが、勝負に夢中になつた青年は、遊びの邪魔をするなと夫人を怒鳴りつけ、俺を買つたこの金に未練があるなら持つて行けと、投げ返した。夫人は深く恥ぢて逃げ出さねばならなかつた。さうして後日になつて、夫人は青年がまた負けて自殺して了つたので、自分の配慮が何にもならなかつたことを知つた。

如何にも素晴らしく物語られ、さうして主題に拔目のないこの小說は、それだけでも立派に存在意義はあるが、また讀者に大きな感銘を與へることは確實である。併しながらこれを分析して見ると、この小說の創作が思春期の或る願望空想に根源をおいてゐることが分るのである。その願望空想は多くの人々に於いて、意識的にさへ想起され得るのである。卽ちその空想とは、母が青年を性生活に導き入れることに依り、自慰の恐ろしい弊害から救ふことが出來ると云ふ願望である。救濟の文學なるものが屢々あるが、これまた同じ根源に基くのである。『厄介』な自慰は賭博慾に依つて置換へられてゐる。手が熱情的に活動することが强調せられてゐるが、その事はこのやうな分析解釋の至當であることを仄めかしてゐる。實際、賭博遊戯熱（Spielwut）は昔の自慰的强迫と等しいものであり、幼兒時代に手で性器を弄したことは、『遊び』（Spiel）と云ふ言葉以外の言葉では云ひ表はされない。誘惑の何としても抗し難きこと、神聖であるが、併し決して守られることのない（再びせぬとの）誓ひ、陶醉的な快樂と良心の苛責、己れを破

滅させること（自殺）、これ等の諸點はこの置換に於いて何等の變更なく保存せられてゐる。尤も、ツワイグの小説は、息子に依つてゞなく、母に依つて語られてゐる。自慰のために自分が如何なる危險が瀕してゐるかを母が知つたならば、母は必ずあらゆる感傷愛を彼女自身の肉體を許すことに依つて、彼を危險から救つてくれるであらうと考へることは、息子にとつて氣持のいゝことに相違ない。ツワイグの小説に於いて青年は母と娼婦とを同一視してゐるがかゝる同一視はやはりこの種の空想の一つに屬するのである。この同一視はこの容易に到達し得べからざるものを、到達し得るものとなすのである。かゝる空想に伴ふところの良心の苛責はこの作の悲慘な歸結を齎したのである。こゝにまた興味のあることは、作者がこの小説の正面に於いてそれの分析的意義を隱さうと努めてゐることである。何となれば、この夫人の愛情生活が突然に、謎のやうな衝動に依つて支配せられてゐることは、問題となるべきことであるからだ。これまで戀愛と云ふことからは懸離れた生活をしてゐたこの夫人が、驚くべき態度を示したことを分析して見ると、恐らくそこにこ非常に深い動機を發見するであらう。亡夫の記憶に貞節を誓つて、その亡夫に似たやうな一切の望みには彼女は武裝をしてゐたであらうが、併し——この點に於いては息子の空想は正しいが——息子に對する彼女の全然無意識的な愛情轉嫁に對しては、彼女は何の對策もなかつた。で、この不用意の個所から、彼女は運命に捕へられたのだ。賭博慾は、その惡習を脱せんとして脱し得ず、且つ自己懲罰の機會となり得る點に於いて、自慰强迫の一つの反覆となり得るとすれば、これがドストイェフスキーの生活に於いて非常に大きな場所を占めたと云ふことは、敢て不思議でないであらう。とにかく、凡そ如何なる重症の神經症でも、彼に於いて早期及び思春期に於ける自己色情的滿足がその役割を果してゐない場合は、殆ど發見せられないのである。またこの惡癖を抑制しようとの努力と、父親に對する恐怖との間の關係は、あまりによく人々の知るところであつて、こゝに擧げた一つの場合以上に更に別のものを附加する必要はないであらう。(*)

——完——

註* 以上述べて來た說の多くは又、既に一九二三年に現れたヨラン・ノイフェルドの優れた論文「ドストイェフスキーの分析」の中に含まれてゐる。

アドラーのドストイェフスキー論

長谷川誠也

個人心理學を主張するアドラーは、ドストイェフスキーとその作品とに、自說の具體化を見たと言つても不可なからう。この文豪の作品が强烈な閃火のやうに、睡眠者を覺醒させて、何等かの深義に接觸させる所以は、それに人生の眞實が表示されてゐるからだ。彼の作品と倫理觀と藝術とは、われ〳〵を導いて、人生の奥義を會得せしめるのである。文豪自身は「私は心理學者ではない、現實主義者である」と言つてゐる。もちろん彼は、學究的に、概念的に心理を取扱ふ心理學者ではないが、しかも偉大な、深刻な心理觀察者であり、また、人生の表面に浮動してゐる事柄ではなく、その眞相を指示した現實主義者である。

近代の文學界には、心理解剖に力を注ぎ、現實の人生を描寫するといふ文學者は甚だ多いけれども、ドストイェフスキーほどに優れてゐる人は稀だ。それは、彼が普通の文學者が容易に探檢し得ない點まで、觀察を進めたからである。彼は言つてゐる、人の笑ひを觀察すれば、何によりも能くその人の性質を知了することができると。この一言を聞いただけでも、彼の觀察が、細かい所と重要な點とに向つてゐたことがわかる。さうして彼がつかんだ人生の眞相とは何か。共同生活感は人類社會の基礎であるといふ眞理である。何人も、この感を會得しようとはするが、しかも十分に爲し得ない。彼は自身の苦悶と世相の解剖とに基づいて、遂に共同生活感の堅實な意義を認めるに至つたのである。そこに大きな現實主義者なる面目が發揮されてゐる。

ドストイェフスキーがシベリアに服役中、特に苦しく感じたことの一つは、仲間の囚徒と和合し得ない點であつた。彼は、どんな階級の囚徒とも、進んで親交を結ぶやうに勉めたのだが、彼等は彼を上層階級の人として敬遠したので彼は同胞感を滿足させることができなかつた。彼は絶えずこのために惱まされ、且おのが生涯を反省しつゝ苦慮してゐたが、或日のこと、ふと幼時の出來事を憶念して、これを書いてゐる。それはかうだ。彼は幼少の頃、或日、父の家を遠く離れ、野原を横ぎつてゐると、突然「狼が來た」といふ人の叫びを耳にし、大いに駭き、父の家の隱れ家の方へ向つて馳せ歸る途中、一農夫に遇つたので、泣きながら農夫にしがみついて保護を乞うた。農夫は十字を切つて狼が來ても、咬みつくやうなことはさせないと誓つたと。普通の解釋によれば、この追憶は、彼と農民並びに農民の宗教との結合を表現するものであると言ふのである。全くその通りで、これは彼の一生涯の象徴であると見るべきものであるが、心理學者としては、彼をして逃げ歸らせた「狼」を重要なものと見ることを忘れてはならぬのだ。「狼」は恐怖の象徴に外ならぬが、その恐怖とは、どういふ意味のものか。簡單に言へば、孤獨の勇者の心理におこる不安、戰慄のことである。この意味を明瞭にするためには、まづ彼の作品數種の趣を見なければならぬ。

彼の創作に描かれてゐる數人物の行動を見ると、いづれも自己本位の行動を極度まで進めた後に、急轉直下、溫順な沒自我の人となるのである。ドミトリ・カラマゾフがさうであり、ミシキンは遂に「おれは十五年間、ばかであつた」と悟るに至り、「おれはナポレオンか、しらみか」と熟慮した後に殺人の罪を犯かしたラスコルニコフは、終にキリスト教の愛の教理を體認するに至つたのだ。この他、彼の描いた人物の行動は大體この型にはまるものである。彼等は、その野心、虛榮心、自己愛などを極度に進め、共同生活の理論に基づいて設定された行爲の境界線を踏み越すまでに至るのだが、進み切つたところで、恐怖に襲はれるのだ。彼等は、社會の共同生活といふことを忘れ、全く單獨に、意慾の動くまゝに、優越を誇らうがために、自由に行動するが、やがて「狼」といふ恐怖に襲はれて、共同生活の內に戾づて來て、同胞愛の教理のために盡瘁するのだ。

彼の描いた人物——作中の主要人物の生活には、二つの軸がある。若しこれらの軸に氣付かずに人物の行動を眺めるならば、實に不可解の點が多いのだが、それらを判然と認識すれば、なんの不審もないのだ。一つは無遠慮に行動する獨行の勇者のそれ、他は人類愛の信念である。さうして、この二つの軸に據る行爲が調和されるところに、人物の新らしい、敬虔な生活が始まるのである。なほ、人類愛を軸とする行爲は、他の軸に據るものゝ對照として、作中の下層階級の者の上に現れてゐる。彼が描いた身分の低い者、あるひは詰らない者——例へば平民、賤民、醜業婦、兒童などを見ると、意外にも尊い後光を放つてゐるのがある。こゝに、小さな者、または微賤な者に對する作家の愛が現はれてゐるばかりではなく、それらに不朽の眞理、卽ち博愛の精神の實現されてゐることが會得される。孤獨勇者の行動に對しては、何處からともなく、人類の憤怒、叱責の聲が響き、その時、この者を轉向させて正道につかしめる者は、多くの場合において微賤弱小の人物である。

ドストイェフスキーその人の生涯が、彼の創造した人物のそれと、まさしく同樣である。彼は、自己本位に行けるだけ進んだ後に、キリストに復歸した人である。「私にとつてキリストは、世界史上、最も美しい、優れた人である」といふのが彼の信念であつて、こゝへ到着するまでの彼は、孤獨勇者の軸に據つて行動したと言つて差支へあるまい。彼の考方に據れば、人は眞理を持つてゐると確信して人生の行路に上つてはならぬ。人は幾多の過失錯誤を通じて後、はじめて眞理を摑み得るのであつて、初めから眞理と見なされるものを樹てゝ進めば、却つて誤謬に到達するのであると。要するに、自己本位に、種々の事を試み、無數の過誤を重ね、自己内の矛盾を統一した後でなければ、眞理を誠實に味はふことができないと言ふのだ。蜜蜂や、蟻の生活には公式といふものがあるから、それらは、これに從つて行動さへすれば、その生の意義を表はすことができる。ところが、人間の生活には公式と稱すべきものがないから、われわれ自身が、これを搜索しなければならぬ。さうして最後に發見される生活公式は何か。自己を犧牲にしても、他人のために盡すことを厭はぬといふ生活である。彼は文學者として出發した人であつたから、その眺めてゐた世界は、彼自身が勝手に造り上げた世界であつたに相違なかつたらう。言ひ換へれば、神祕家または夢想家とし

て立ち、現實の世界とは沒交渉に經驗を積んだのがこの作家である。ところが、現實は彼の行動の單獨自由を許さなかつた。彼は任意の經驗に制限を設けなければならなくなり、これを限定するものは「隣人を愛せよ」といふ宗教であると悟つたのだ。彼は幾多の過誤を重ねて、漸くこの生活公式を發見したのである。彼はこの生活公式に據る時に初めて神と共に在る法悅の感をもつのであつたが、奇異なことには、この滿足感と、持病の癲癇發作とを結びつけてゐる。彼はこの病氣のおこつた時ごとに、神人和合の恍惚を感得したらしい。

彼の描いた人物の行動について注意しなければならぬ點がある。彼等は過去の行動、即ち我慾の伸張を軸とする生活を罪惡視するに到ると共に、服從に救ひを求めるのだ。しかも、柔和に服從し、謙讓の生活を送る内に、他人に優れてゐるといふ誇りが潛んでゐるのだ。しかし、彼の人生觀から言へば、服從、謙讓といふことは、決して最後の行爲ではない。これは自己本位の行動に對する背叛であつて、最後の地點に達するまでの「道程」を示すものである。この見方は、彼以前においては稀に見る所であり、また、トルストイも同樣な見解を立てゝその宣傳に努めてゐる。それならば、最後の目標とは何か。人類の共同協力の生活といふことがそれである。さらに彼は說く、人は同胞の罪過をも分擔しなければならぬと。これはカントの「無上命令」說以上のものと見るべきであらう。愛他といふ倫理思想は、無上命令の形をとつて行動を支配するが、それには、個人的といふ不純な分子が混入しがちである。それとは異なつて、各自が他人の罪過をも分擔するといふ思想には、强い責任感が伴なふから、個人主義の安全地帶を造る餘地がない。實にドストイエフスキーは、この深奧な敎理に到達した偉大な藝術家である。

アドラーは言ふ、人がこの世に生れて來て發見するものは何か。祖先の社會的貢獻といふことである。從つて、人の義務は、互に協力し、相愛し、共同生活を送ることであり、また、さやうな生活を營む所に、人生の意義がある。社會の一員として共同、協力の生活を營み得ない者が精神病者であると。この心理學者は、多くの精神病者を研究して得た人生觀が、このロシア文豪と、その描いた人物との生涯に具體的に表現されてゐることを見たのである。(をはり)

ドストイェフスキーの分析（ノイフェルド）

Dostojewski, Skizze zu seiner Psychoanalyse (1923)—Jolan Neufeld.

平塚義角 譯

大戰と革命が專制政治のロシヤを倒壞しなかつたならば、凡ての敎養ある世界の參加の下に、一九二一年ドストイェフスキーの第百回誕生日が、祝はれたことであらう。ボルシェヴィズムのロシアは、勿論かゝる保守的な權威には敬意を表しはしない。故にロシアのこの大詩人を祝はうとする凡ゆる文壇的祝祭が、中止されたばかりでなく、ドストイェフスキー家の未だ生きてゐる人々が、この機會に書いたか、或ひは書かうと思つた詩人の思出も傳記も現はれなかつた。只詩人の娘アイメー・ドストイェフスキーが父の思出を出版してゐるだけである。(Verlag Ernst Reinhardt, München 1920.) この書物は精神分析者には重要ではない。何故なら、アイメー・ドストイェフスキーは父の特質と癖を、彼がリタウェンの一家族の出であり、彼の血管の中にはノルマンの血液が流れてゐると云ふ事情から結論してゐるからである。この牽强附會な結論は永久に滿足を與へぬのみならず、取るに足らぬ說である。然しこの書が詩人の家庭關係に注意を拂つてゐると云ふ事は大きな利益である。ドストイェフスキーの波瀾多い多事な生活を決定したその樣な特色ある諸事情に注意を向ける時、これ等の事件は彼の矛盾だらけの謎の性格から發生してゐる事を思ひつくに違ひない。人は問ふであらう。ドストイェフスキーの樣な忠誠氣質の人間が、皇帝に對する陰謀に關與するなどゝ云ふことがどうして出來たかと。如何して深く宗敎的であり乍ら、同時にまた絕對に非宗敎的となり得たかと。神經纖維の一筋々々を以て鄕土に膠着してゐるこの人間が、數月間否數年間も異國で暮すことが如何して出來たかと。金を絕えず追つかけ廻してゐ乍ら、得れば全く紙

屑の様にそれを窓外に投げ棄てるなど〻云ふ事が何處から起るのかと。ドストイェフスキーの文學も、この生活と同樣に謎の樣である。彼の小說の主人公は謎の如き性格者であり、脫線した破倫者で、我々に謎に謎を懸ける。この謎は一般に意識心理學では解き得ない。然し精神分析の魔法の鍵は、この謎を守つてゐる錠前をこぢあけ、彼の性格と文學の中へ我々の眼を注がせる。この矛盾だらけの謎の如き凡てを、精神分析的洞察はかう說明する。――か〻る生活を生活し、この樣な作品を創作する者は永久のエディポスであつて、彼は自分のエディポス・コムプレクスをば遂に決して處理し得ない人間である。

ドストイェフスキーのやうな家庭關係にあれば、彼自ら證言してる通りの、神經質で、無限に自己愛の强い少年ならば、誰しもエディポスに成らざるを得ないわけである。彼の母は、モスコー生れの小商人の娘である。母は全く從順で、寛大で、忍耐深い獻身的な婦人であつたと、彼は語つてゐる。これ等は人の妻たる者の美德である。だからアイメー・ドストイェフスキーも實際、夫は若き妻を敎育し、妻は尊敬を以て夫を愛したと物語つてゐる。か弱い健康と亢進して行く肺結核とのために、彼女は屢々病床に橫はつた。その爲め彼女は子供達を乳母に養育させねばならなかつた。只例外として、長男のミハイルだけは彼女自ら養ひ、詩人の嫉妬的な記述によると、また一番愛せられてもゐた。けれども詩人は屢々母の病床の側に數時間も坐つて、彼女を看護したり、慰めたり、本を讀んで聞かせたりした。この樣にドストイェフスキーは母の愛を、父と兄の二人のより幸福な競爭者と分たねばならなかつた。彼の父は彼の性格發展の上に無類の大きな影響を及ぼした。父ミハイル・ドストイェフスキーは、精神分析の或る概念で漏すことなく特色づけることが出來る。彼は肛門的な性格者であつた。激越で、激昂的で、不機嫌で、固陋で、小喧しく、同時に病的に貪慾であつた。

妻の早逝後は、彼の酒精中毒は益々增大し、從つて彼の性格のサディスムスの特徵が、益々銳く現はれ出した。彼は娘達を何かと汚らはしく疑つて迫害し、息子達を信用せず、激しく貪慾に責め立てた。また彼はモスコーの聖母病院での醫長の地位を抛擲して、自分の農場ダロヴォーエへ引込み、其處で農奴達を常に手嚴しく扱ひ虐使したので、とう〳〵彼等に復讐された。或日彼は、自分の他の農場チェルマスニヤへ馬車を驅つた。馭者は馬車に乘つて素早く逃げ去つた。あとにこの地主は、田舍道の溝の中に絞殺されてゐた。農奴等は訊問の時、それは復讐行爲であつたと自白した。父の性格がどんなであら

うと兎に角、彼はその息子達、特に上の二人、ミハイルとフョードルとを念入れて教育した。彼が彼等に與へた教育は、随分變つたものであつた。少年等はまづヅヒャルルトの、それからチェルマークの私立學校へ通つた。こゝの教育が嚴格だつたからである。少年等は馬車で家から學校へ往復した。ドストイェフスキーの作品の中に我々は、彼の生れた町の詳しい描寫を只の一つも見出さない。彼は生都を知らなかつたからである。同年輩の子供達との交際や喧しい遊戲は、彼等には嚴禁されてゐた。たゞ少年達は毎夕兩親と連れだつて、近所の聖母の森へ散歩に行くだけであつた。父は其處へ行く角をなした道を利用して、幾何學の角の概念を直感的に教へ、途中に見出される鑛物や植物を鑛物學や植物學の説明の材料とした。毎夕父はカラムズィンのロシア史や聖書や又は澤山のロシアの名僧の生活の物語を讀んで聞かせた。ラテン語も父が自ら教へた。子供達は他の先生の教授中は坐つて聞いても良かつたのに、父の教育は立つたまゝ倚掛りもせずに——小さなのろまの樣にと詩人の弟アンドレイはその思出の中で言つてゐる——受けねばならなかつた。爆發し易い父の怒りは、彼等を怖えさせてゐた。ドストイェフスキーも他の多くの人と同樣に、父を同時に師とするといふ運命を持つた。父の威光は師としての威光に依つて强められ、この父から彼は一生涯離れられないほどの定着を受けた。この少年が母のより惠まれた競爭者である父を、深く憎んでゐた事は後に示す。が、この父が一面ではまた、彼の高い理想でもあつた。彼はこの理想に向つて一生涯努力したのだが、それに到達し得られるやうな望みはなかつた。

　父へのこの定着は無數の特徴から、就中詩人が工學校から父に宛てた書翰で推測される。父ドストイェフスキーは官吏として、息子達凡てを給費生とした。そこでは生徒達は必要品を無料で得たのだが、ロシアでは、ことにポテムキンの領地では、給與が充分とは言へなかつたらしい。ドストイェフスキーは父や兄弟に宛てた絶望的な書翰の中で、工學校の不自由な生活を物語つてゐる。秋の練兵中只一足の長靴しか持つてゐなかつたので、秋雨でずぶ濡れになつても取換へる事が出來ない。彼は寒飢の爲めに病氣になつた。でも、一杯の茶で身體を温める一コペーケの金さへ無かつた。彼は父が金錢的に非常に良い狀態にゐて、二つの農場を持ち、現金も貯蓄してゐる事を確かに知つてはゐたが、從つて非常に憤激してはゐたが、父に宛てた手紙は恭順なばかりでなく、殆んど謙遜と言つても良い程で、自分の無茶な狀態を述べてからかう書いてゐる。『愛するお父さま、貴方は貴方の

息子が金の援助をお願ひしても、それが不必要なお願ひだとはお思ひにならないでせう。が、私は貴方の困窮を思ひますから、一杯のお茶も飲みますまい。』彼があれ程激昂し易い性質であるにも拘らず、父の貪慾がどれ程彼を苦しめても、父に對して彼は一言も非難を浴びせてゐない。

　詩人の父に對する非常な畏敬の念に就いては、アンドレイ・ドストイェフスキーも語つてゐる。嘗て彼がもう相當の高齢に達した詩人と會つて談たま〳〵父に及んだが、詩人は嬉しさに胸の高鳴る時に――それは稀な事だが――いつもする樣にその時にもアンドレイの腕を摑んで叫んだ。『さうだね弟、それは進歩した人だつた。私達は夫としても家長としても決してあんなにはなれないだらう。』息子達を嚴格と貪慾で苦しめ、娘達を汚れた疑ひで、また全家族を不機嫌で激昂的な性質で惱ましたこの父が、たゞ幼兒性を殘してゐた一人の神經病者にだけは、到達し得ぬ理想として、彼の念頭から離れ得なかつた事を考へて御覽なさい。父の家に關する彼の凡ての思出はかうした幼兒的感情によつて正當なものではなくなつてゐる。この事はメレジュコフスキーも『或る作家の日記』中の記錄に就いて氣付いてゐる。

　父の如き家長に成ると云ふ事が、詩人の全生涯を通じての理想であつた。彼は、既に一人の子供を持つた寡婦と初めて結婚した時、『父であると云ふ高い尊嚴を享受し得る』事を非常に喜んだ。兄のミハイルは多數の家族を殘して早逝した。詩人は彼等の凡ての借金を引受け、この未亡人に對して、自分の物質力以上の援助をしてやつた。が、そのかはり彼はこの家族の無限の支配者たらんと欲し、二人の娘の結婚に反對し、少年達の將來と硏學に就いて指圖をし、かうして特殊な父の役割を演じた。

　彼をこの非常な犧牲心に迄動かしたのは、單に寛大や兄弟愛のみでない事は、彼自身の家庭がこの時食ふや食はずであつた事や、それのみならず、甚だしい賭博癖が襲來すると、妻の最後の溫い上衣まで質屋へ運んだ事などに徵しても、推斷出來る。彼は刑務所に於ける同輩等を指圖し、後にはゼミパラティンスクで共に服役した兵士等をも同樣に指圖した。この時彼等に對して父のつもりでゐた。父の理想のこの模倣は、彼が自分の子供を敎育し初めた時、殊に現はれた。子供達は、詩人が少年時に習はされたと同じお祈をさせられた。また詩人は嘗て父がしたと同樣に、彼等に本を讀んで聞かせる時が待ち切れなかつた。彼の娘はその思出の中で、父が十五六歲の彼女や弟等の前で、シルレルの『群盜』を朗讀した事を、滑稽に物語つてゐる。子供達は本能的に、この朗讀

が父には非常に重要なのだと感じて、目を醒ましてゐて、理解するために傾聽しようと痙攣的に試みたが、この大供ドストイェフスキーは遂に、子供達はかゝる實驗には未だ若すぎると云ふ事を悟らねばならなかつた。

アイメー・ドストイェフスキーも詩人の瑣細な二つの性癖を述べて、それを彼の父への定着として認めてゐる。父ドストイェフスキーのフランス語に對する特殊な嗜好を、その息子が讓り受けて、それ故に詩人の小說の主人公が、ロシヤ語を屢々フランス語の美辭と混ぜこぜて話してゐるのだと、彼女は述べてゐる。ロシアの詩人たちに於ては、この癖は當前の事として見られ、何等說明を要しない筈であつて、ツルゲーネフやトルストイの主人公も同樣な言葉を話してゐる。が、これ等二詩人の主人公は國際的な人々であるのだが、ドストイェフスキーにあつては、たゞ父の面影だけがフランス語を話すのだ。例へば『青年』の父や、老カラマーゾフ等々がそれである。

アイメー・ドストイェフスキーの述べてゐるも一つの性癖も、同樣に深い意味を持つてゐる。工學校での嚴格な訓練と、生徒達の無慈悲な取扱ひは、この詩人の如き多感な少年には、絕えざる辛苦の原因をなした。然し他の生徒達がこの取扱ひに反抗して示威運動を起した時、ドストイェフスキー只一人だけがこの運動に參加しなかつた。先生を父と思はせる作用の方が、嚴格な訓練に對する反抗や團結心よりも强かつたのである。

然し父に對する憎惡を擧げれば、その方が遙かに澤山記錄され得る。アイメー・ドストイェフスキーの話によると、彼女の父はその父について話すだけの氣力が無かつた程、彼の父の思出が彼には一生涯苦痛の種だつたさうである。少年ドストイェフスキーの中にこの二つの反對感情が共存してゐた事は、小說『青年』の中に完全に反映してゐる。オレスト・ミルラーとメレジュコフスキーとは、詩人の癲癇を父への反感と結び附けてゐる。ミルラーはドストイェフスキーの傳記の中で、筆を彼の病氣に及ぼして、非常に曖昧に且つ控え目に、かう述べてゐる。『もう一つ非常に興味ある言ひ傳へがある。それは、詩人の纖弱な少年時代に父の家庭內で起つた感銘深い一事件と、詩人の病氣とを結びつけてゐる。これは絕對に信用出來る詩人の近親者から口傳てに告げられたのだが、此處には繰り返すまい。』と。少年ドストイェフスキーが、それに對してあれ程激しく反應した心的外傷の、どんな種類の物であつたかを我々が知り得ないのは、この傳記家の全く要らざる愼みの爲めである。併しオレスト・ミルラーが、ドストイェフスキーの性生活一般を

餘り氣取つて扱ひ過ぎてゐる事、そして我々の社會に於ても、性問題が不作法なもの、談ずべからざるものとして取扱はれてゐる事を思ふと、これと似た事が『敬虔なロシア風の家庭生活』――ドストイェフスキーは自分の父の家庭の事をさう云つてゐる――に於ても言はれると思ふのは、强ち間違つてもゐまい。

次に述べる樣な詩人の幼時及び少年時代のヒステリッシュな二症候も、父への陰性的態度と關係があるだらう。弟アンドレイは、彼の兄がほゞ十歲の時に狼恐怖症に罹つたと述べてゐる。このおど〳〵した少年がチェルマスニャーの農場で父から離れ、義務から釋放され、遊戲や夢想の生活が生活出來たのに、狼が來ると云ふ幻覺を感じたと云ふ事を考へて見ると、この動物恐怖症を直ちに父に對する恐怖だと解釋する事は恐らく間違つてはゐまい。少年が母の慈愛をこの恐ろしい競爭者と分たねばならぬ場合に、狼が來ると云ふ不安の叫びを叫ぶのは、實は、夏季の滯在の牧歌的情詞を破壞しに父が來ると云ふ不安を意味するのだと認められる。チェルマスニャーではこの少年が近親姦の幻想に耽つたと云ふ事は、小說『カラマーゾフ兄弟』を見ても分る。殺戮の日、息子は父の殺戮が自分の不在によつて都合よく行くやうに、チェルマスニャーへ行くのである。

も一つのヒステリッシュな症候は、ドストイェフスキーの思春期中、詳しくは母の死の直後、彼の十六歲の時に起つた。敎會へ馬車で行つた後で、彼は突然口がきけなくなつた。最初は殆んど聲が出なかつたが、段々骨を折つてやつと微かに話せる樣になつた。この症候の說明には、フロイドの婦人患者ドラの嗄聲を引合に出すことが出來る。ドラの樣にこの詩人も、唯一人の愛人に死なれて、も早や彼女と話が出來なくなつたので、この上はもう誰とも口をきゝたくなくなつたのだらう。だがまた、父に對する怨みもこの病氣に役割を演じてゐたかも知れぬ。フロイドが正しくも云つてる樣に、誰でも自己の無意識中に、他人の無意識を理解する鍵を持つてゐるものだ。だからドストイェフスキーの父が、息子の病氣を治さうと努めて、彼を他の家族の者から完全に遠ざけて、幾分功を奏したのを見ると、彼も亦息子の病氣を無意識にではあるが、怨みや反感によると認めた事と思はれる。

この父に過度に定着して、愛憎の間を曳きづり廻はされたこの魂の中に、父の謀死は强い怖ろしい驚きを喚起した。アイメー・ドストイェフスキーは、詩人が最初の癲癇の發作に襲はれたのは、父の悲劇的な死が告げられた瞬間であつたと我々に口傳してゐる。この事が眞實でなく、オレスト・ミルラーの證人の說によつて、最初の

發作は既に最も纖弱だつた少年時代に起つたとしても、詩人がこの報告に、激しい發作を以て反應した事は疑ひの餘地がない。この發作が凶報に依つて受けたショックと關係してゐる事は、詩人の竹馬の友で作家のグリゴローヴィッチが語つてゐる。グリゴローヴィッチは工學校での詩人の學友で、卒業後、詩人と一所に生活した事がある。その話に依れば、彼等が一緒に散歩してゐた時、はからず葬列に出會した。詩人はこの行列を認めるや否や引き返さうとしたが、既にその時彼は特殊な激しい發作に襲はれて、漸くの事で恢復した。父に對する憎惡と復讐の無意識の考へが、この思はざる一瞥によつて、意識に非常に近づいたので、この考への檢閲を拒む事は、たゞ深い失神によつてのみ出來たのであらう。

ドストイェフスキーのこの發作は、癲癇の發作であるか、ヒステリー癲癇の發作であるか、この區別は困難だ。が、孰れにしろ、これに關して注意すべきは、詩人には、同じくエディポス・コムプレクスに根ざした他の多くのヒステリー的な症候が存在した事、——この事はやがて詳細に論及するであらう——また、發作の頻發と强さの度は、生涯非常に變り易く、それは色々な事情に基づいてゐた事、また詩人は彼の癲癇を監獄生活からだと言ひ、青年時代の病氣はヒステリーであつたと言つてゐる事、また詩人に非常に愛されて、屢々その相談相手になつた賢いかゝりつけの醫師ヤノースキー博士が、ドストイェフスキーは青年時代に癲癇に似た病氣に罹つたが、それは癲癇ではなかつたと主張してゐる事、などである。アイメー・ドストイェフスキーも、詩人がその入獄の數年前ヒステリーに罹つてゐたと語つてゐる。

この病氣の最も著しい症候は、一部分は詩人自ら語つてゐるが、また一部分は友人や家族の信ずるに足る報告が物語つてゐる。後者によれば、詩人は生埋めにされると云ふ恐怖に絶えず惱んでゐたさうである。每夕休む時、いつも机上の紙片にかう書きつけておいた。——『今夜、私は昏睡病的な眠に陷るだらう。五日經たぬ中は埋めてくれるな』と。が、精神分析は神經病者のこの生埋めにされると云ふ不思議な不安の謎を、近親姦の幻想だと解いてゐる。この惱ましい不安の外に、詩人は二十歳の時、ヒポコンドリーの發作に罹つた。それに就いては詩人自ら豫審判事に宛てた辯明書の中がかう言つてゐる。——『私の時間の半分は、パンの爲めの勞働で滿たされ、他の一半はヒポコンドリーの發作で滿たされてゐた』と。ヒポコンドリーや、いつまで生きられるかの疑ひなどに惱むのは、近しい人の死を願つて、然もそれが間も無く實現した爲めに神經病に罹つた者だけである。

このヒステリーの症候ばかりでなく、思春期や青年時代の詩人の性生活も、近親姦との聯關を現はしてゐる。詩人の親友や家人等は、彼が完全に沒性的であつたと主張してゐる。例へば彼の娘は、詩人が四十歳まで全く禁慾生活をしてゐたと云ふ家庭での云ひ傳へを我々に供してゐる。彼女はこの事を全く明確に見出してゐる。そしてこの現象の說明の一面の根據として、北方人は大體發育が遲く、癲癇病者は尙更それが徐々としてゐるから、彼女の父はこの年齡に至つて初めて性の完全な成熟に達したのだと語つてゐる。兄ミハイルが詩人に紹介した醫師リーゼンカムフ博士は、レーファルの生れで、長い間詩人と一所に住居した事もある良友で、見受ける所、また或る事柄では立派な觀察者でもあるが、この同じ問題に就いてかう書いてゐる。――『若者は二十歳に成るとと美人の尻を追ひ廻る者だが、詩人にはこの徵候は決して認められなかつた。彼は婦人に關しては無關心で、殆んど彼女等に對しては嫌惡を感じてゐた』と。アイメー・ドストイエフスキーもこの事に關して、詩人が婦人に對して餘りに引込み思案の爲めに、友人から屢々嘲笑された事を報じてゐる。それによると、友人、殊に婦人の寵兒であるツルゲーニェフは、詩人を、若し彼が婦人を抱擁する事があつたら失神して倒れるだらうと言つて、長い間愚弄してゐたさうである。

然し同時に、詩人は當時放縱な、そして破倫な性生活をしたかも知れないと云ふ事を示す二三の暗示がある。一例を言へば、彼は最初の大成功の後、非常に快活な氣分で、二三回兄弟に宛てゝ書いてゐる。日附は無いが、この時の手紙の傍註に、彼はかう書いてゐる。――『ミンヒェンやクレールヒェンやマリアンネン等は皆思ひも及ばぬ程美しくなつた。が、恐ろしく價が高い、ツルゲーニェフとビーリンスキーとは私が放縱な生活をするので、嚴しく叱つた』と。一八四六年二月一日、彼は再び同人に宛てゝ書いてゐる。――『私は以前も澤山金を儲け、瞬く間に三千ルーブル以上も費して了つた程だつた。私は非常に放縱な生活をしてゐる。それは事實だ』。そして更に追伸で、絕望的に附け加へてゐる。『私は非常に放蕩なので、もはや普通の生活は出來ない。私はチブスや熱病に罹りはせぬかと恐れてゐる。私の神經は病んでゐる』と。そして畏敬すべきも幾分見界の狹い傳記家オレスト・ミルラーは、この放蕩や放縱は、金錢上の事だけだと幾度も確言してはゐるが、この見解では、絕望やヒポコンドリーは說明出來ない。

メレジュコフスキーも『鼠の孔の思出』の主人公の告白から、同樣の自責を聞き出してゐる。詩人はその主人

公をしてかう言はせてゐる。――『私は時々背德ではないが、闇黑な唾棄すべき多淫に陷つた。私の汚らはしい情熱は 絕えざる病的な刺戟の爲めに、烈しく燃え上つた。それは、淚と痙攣とを伴ふヒステリーの發作であつた。』（甚だしく激烈なヒステリーの發作をドストイェフスキーはこの時實際持つてゐた）『矛盾や對比をヒステリッシュに渇望すると云ふ深い悲哀に、私は襲はれた。』（激しく押し迫る破倫的な衝動を、生き盡したいと云ふ慾望、また抑壓や昇華を中止したいと云ふ慾望を、我々はこゝに認め得る）『そして私は、最も下品な淫亂に夢中になつた。私は毎夜、自分の陰密な衝動を、燃える羞恥の念を以てこつそり恐る〳〵滿足さした。この羞恥の念は、最も唾棄すべき瞬間に於ても私にこびり着いてゐて、かうした瞬間には、自己呪咀の念を起させた。』と。

これ等の文章は、詩的な形式を取つた詩人自らの告白であり、自責であり、自己批判であるとメレジュコフスキーが主張する時、我々は無條件に贊成する。そこで今や我々は、詩人が親近者によつて、或時は沒性的だと思はれ、或時に淫奔であつたと思はれたといふ謎の前に立つのである。――この兩方とも本當であつたと思はれる。然し精神分析は、青年期や成人時代の禁慾や極端な不能症を、極度に強い性慾と同一であると見る事が出來る。『戀愛心理論』の中でフロイドは、丁度我々の詩人を眼前に置いたかの樣に、かう言つてゐる。近親姦的願望の强い者に於ては、幼兒時代の戀愛對象の牽引力が非常に大きいので、戀愛生活の二つの潮流――肉感的の流れと感傷愛的（幼兒的、精神的）の流れとが――普通の戀愛生活はこの二つが一所になつて完成されるのだが――一所に合流しないで、感傷愛的な潮流が絕えず幼兒時代の戀愛對象の拘束を受けてゐるのであると。かゝる近親姦的傾向者の性行爲は、感傷愛的な流れを避けるに違ひなく、從つて對象選擇に一つの制限が起る。依然能動的である肉感的な方の流れは、嚴禁されてゐる方の近親姦的傾向者の思ひもつかぬ相手を求める。かゝる人間の戀愛生活は、二つの方向に分たれる。藝術はそれを、天國的な愛と地上的な愛として具體化してゐる。彼等は戀愛する時は性的熱望なく、性的熱望の激しい時は、戀愛し得ないのである。

ドストイェフスキーの性的愛情を說明するに、心的不能症に對するこの正統的解說にまさるものはあるまい。詩人の生活の中に或る時期があつて、そして上述の友人等の愚弄は、この時期を指したもので、その間には彼は全然不能であつたかも知れない。母への無意識的定着が非常に強く、近親姦的慾望の抑壓が非常に完全であつた

に違ひなく、爲めに現實への出口は全然見せないで、それが生き埋めにされる恐怖の如きヒステリー症候を構成したのである。後の時期には、クレールヒェン、ミンヒェン、マリアンネンなどの女達が順次に現はれたが、彼は彼女等を性的に熱望するだけで、愛しはしなかつたのだ。この事に關しては然し、我々は、アイメー・ドストイェフスキーや詩人自身の證言を擧げ得るとは言へ、正確には知り難い。が、確實な事が一つある。それは、詩人の文學に於ては、二種類の戀愛が互に一つになつてゐない事だ。彼の知つてゐるのは、全然地上離れのした、純潔な、無限の犧牲心ある愛、利己的な性的刺戟を全く放棄する愛か、さもなくば、彼が『豚』と呼びつけてゐる所の、人間の色情狂的畜生道で、凡ゆる破倫的な、非家庭的な、禽獸的な慾望を持つたものである。前者の例は、『貧しき人々』のヂェヴーシンや、天使のやうなアリョーシャ・カラマーゾフや『白痴』のミシュキン侯等で、後者の例としては、『罪と罰』のスヴィドリガイロフや、フョードル・カラマーゾフ老や、『惡靈』のシュタヴローギン等が擧げられる。彼はこの最も卑しい淫亂と破倫行爲を、餘りに力強く大膽に、餘りに直覺的に描寫してゐるので、精神分析的な見方とは縁遠いメレジュコフスキーさへも疑問を發して、かう言つてゐる。——『彼はこれ等凡てを、單に外的な知覺や他人の觀察だけによつて知つたのか？　勿論、人はこの際、多くの物を、天才の慧眼を考慮に入れて考へねばならぬが、然し、多くの物をと言ふべきで、決して總てをとは言ひ得まい。こゝには藝術の境界を超える或る物がある。それは餘りに生き〳〵してゐる』。メレジュコフスキーは他の場所でも言つてゐる。『また注意すべきは、彼の想像の中にかゝる種類の姿が浮び上り得たと云ふ事實と、また、彼が少女の凌辱や、フョードル・カラマーゾフと惡臭を放つザヴェータとの戀愛冒險やに、興味を持ち得た事である』と。

我々は、この精緻な心理家の考察に、たゞ〳〵贊成出來るばかりだ。さうして彼の餘りに臆病な質問に對して、精神分析的研究結果に準據して、かう答へ得る、詩人は自己の無意識の葛藤を表現するより外に何とも仕方がないのだと。故に、詩人が、主人公の地上離れのした神聖を描いたり、正反對の意味の主人公の歡樂の深い地獄を描いたりする時、彼は我々に、自己の精神生活の不調和を示し、また、素地のまゝの慾望、強い抑壓、巨大な昇華の試み——それは然し乍ら一部分は度々中止させられたのだが——等によつて曳き廻はされる無意識の內部を示してゐるのだと。

母への無意識的な、そして正にその故に完全な定着は、思春期や二十歳そこ〳〵の詩人の性心理生活の特徴である。『貧しき人々』の主人公の沒性慾的性格や『二重人格』のゴルヂャドキン氏の妄想症的色情狂は、戀愛問題に對する詩人の態度に强い光りを投げかけてゐる。然し性慾生活の遂行を邪魔したのは、單に母への近親姦的定着のみではなく、父の權威への固着もあつた。父の權威は、近親姦や最も廣い意味でのあらゆる性的活動一般を鋭く禁止し、性慾(リビドー)一般を成長せしめず、破倫や『淫らな色慾』に至るべき道へと退行せしめた。かやうに、戀愛慾求の生活の遂行を妨げる父の權威は、青年の中に、父に對する既にあつた相反並存的感情の態度を、燃える憎惡にまでたきつけたに違ひない。何故なら、ペトラシェーフスキー事件への關與で爆發したものは、この憎惡であるからで、さう見ずしては、この事件は全く不可解であるだらう。彼の小說の一面しか讀まぬものは、彼を少くとも保守的だと名づけるだらう。宗敎や皇帝や祖國は、彼の崇高な、侵す可からざる理想であつた。彼は感激的なスラヴ贔屓として、如何なる革命をも嫌つた。宗敎に關して輕卒な言辭を吐く者に對しては、彼は抑へ切れぬ憤怒を覺えた。この憤怒は、ロシアの最も著名な批評家で、彼の嘗ての恩人であるビェリンスキーの事に話が及んだ時、幾度か爆發した。彼はビェリンスキーには、最初の文學的成功の恩顧を受けてゐるのだが、單に彼の自由思想の爲めに、彼をロシア社會の最も不名譽な存在だと言つてゐる。彼は唯物思想が大嫌ひであつた。彼の個性は、社會主義に對しては、敵對的に對立してゐた。彼は絕えず奴隷の英雄主義を說いてゐる。彼は、ロシア人の間に神人が出現して、社會主義の爲めに墮落して淚と血を浴びたこの社會を、再び救濟するだらうと豫言してゐる。右頰を打たれてから左を差出し、——彼自身の言ふ樣に——『遂ひに情熱に燃え立つまで』自分自身より寧ろ隣人を愛せよ。彼の人間に要求したものはこれであつて、自助ではなかつたのだ。彼がロシアの最も恐るべき不幸だと思つたのは、帝政の廢止された時であつた。ドストイェフスキーほどの天才ある人が、獨裁政治の廢棄とか、自由、平等、友愛などと云ふ思想——つまりドストイェフスキーの死ぬほど嫌いな思想——を目的とする謀叛の中に、抑々何を求めてゐたのかと云ふ事は、分析的な理解なくしては、全く諒解に苦しむ。たゞ父コムプレクスだけが、彼のこの態度を說明する。何故なら、無意識の中では、父と皇帝とは同一人を意味してゐるからだ。この事は、個々の健康者や神經病者の多くの夢や神話やお伽噺から、良く知られてゐる。詩人が自由の爲

めに除かうと思つた暴君の背後には、息子の近親姦の慾望を妨げ、それ故に除かるべきかの憎むべき父が介在してゐる。父と皇帝とは同一人を意味すると云ふ考へ方は、ドストイェフスキーの考へ方に殊に近かつた。そしてロシア人等が皇帝を『父』と呼んだ時、それはほんの未だ少し前までの事であるが、この暴君は、家長制度に於ける父の絶對權を與へられてゐたのだ。詩人の父は、既に述べた樣に、嚴格なそして絶對權を持つた家長であつた。皇帝の暗殺の計畫はそれ故に、父殺しであつて、それへ詩人を無意識に驅り立てたものは、一面には近親姦的定着であり、他面には父の貪慾が生涯彼に加へた大きな壓迫である。

　彼の最大小說『カラマーゾフ兄弟』の最も恐るべき側面が、この事を充分に證據立て、承認させる。就中材料の選擇が。年とつて、酒好きで、淫亂な父は、貪慾で息子達の生活を不快にし、その上、息子の憎むべき恐るべき戀敵であるので、息子の一人に殺されるのだが、他の三人の息子達も、父の死を望むばかりか、それが起るやうに努力した。卽ちこれは、父の死の報告を受取つた後に詩人が示した狀態と全く一致する。興味ある事は、ドストイェフスキーが三人の兄弟を持つてゐ、『カラマーゾフの兄弟』でも同樣に四人の兄弟が父を殺さうと企てゝゐる。も一つ興味ある證明を形造るものは、詩人が、癲癇の發作後、誰かを殺しはしないかと云ふ譴責によ良心の呵責に、生涯苦しんだと云ふ事である。フョードル・カラマーゾフの眞の殺害者に關して、スメルヂャコフの犯行を決して信じようとしない檢事に、詩人は次の事を言はせてゐる。『偉大な精神病醫の意見によると、ひどい癲癇症者には、絶えざる、勿論、病的な、自己歸罪の傾向がある。彼等は、或る罪を以て魂を苦しめ、理由の無い良心の呵責に屢々惱み、色々な事物に氣を取られ、のみならず、種々の犯罪を考へ出すが、それを決して犯すのではない』と。然し檢事は迷つてゐる。何故ならば、スメルヂャーコフは、その自己歸罪を考へない、彼はだから實際に殺人者と云ふことになる。故に詩人等は、良心の呵責を受ける程、その呵責に價する行爲を、空想したかの樣に見える。詩人の友人である批評家ストラーホフは、この事に關してかう述べてゐる。――『詩人の心の狀態は、癲癇の發作後には、常よりも非常に苦しくて、彼はその悲哀と、或る强い多感性とを征服する事が殆んど出來なかつた。この悲哀の本質は、彼自身の言葉によれば、自己を犯罪者だと感じ、然も己れの氣づかぬ罪や恐しい犯罪が、彼を壓迫してゐると云ふ妄想を振るひ落す事が出來ないと云ふ事だ』と。

これに對して、精神分析はかう主張する、神經病者の良心の呵責は、本來決して根據ないものではない、眞の根據は、意識から退いて無意識の中に在る故に、無根據に見えるだけだと。勿論、多くの場合に、良心のこの呵責は、神經病的良心の擴大鏡によつてのみ觀察される。そして、全く有效な分析のこの法則を、實際の精神に適用して、初めて、その正當が認められるのだ。然し、ドストイェフスキーがその作中の父殺し男に自分も罹つてゐた癲癇を煩はせた事、又彼と同樣に彼の創造した人物も良心の苦痛に惱んだと云ふ事實は、精神分析に取つては、一面では詩人とスメルヂャーコフとの一致を、他面では詩人の發作後の良心の呵責が、無意識の殺人思想から發してゐる事を意味してゐる。

詩人が、癲癇の發作と良心の呵責との間に因果關係を見出さうと思つたのは、多分正しかつた。然し、良心のこの呵責は、癲癇發作後の意識朦朧狀態の間に、無意識が平常より明瞭に現はれて來、檢閱の壓迫がその强度を弱めて、その爲めに、抑壓力としての良心が同樣に常より明瞭に感ぜられるやうになる、と云ふ事と多分關係がある。

父コムプレクスに根ざすこの父殺しの衝動は、たゞ彼の無意識の中にのみ棲息してゐて、癲癇の發作を契機としてのみ活動したのかどうか？誰がこの問に確實に答へ得るだらう？然し興味ある事には、詩人は、イヴァン・カラマーゾフをして法廷で『我々の內で誰が父を殺さうと思はなかつたか』と叫ばしめてゐる。この爾餘一般化を特殊化へと轉ぜしむれば、『私は父を殺さうと思つた』と云ふことになるであらう。

父に對する殺人衝動を承認させるもつと大きい根據を、カラマーゾフの小說は提出してゐる。詩人が、彼の無意識內の相克的な心理を、その想像の作品の中に描いてゐる事は、分析的研究によつて、我々に十分知られてゐる。それ故に、父の死を望む四人の兄弟はドストイェフスキーの性格の片割れである。兄弟ばかりでなく、父親もやはりさうだ。その事はやがて後に示す。また詩人が意識的に、自ら自分を四人の兄弟の中に描いてゐる事は、大體旣知の事で、彼の娘もこれは認めてゐた。

熱狂者で、罪有つて罪無き殺人者ミーチャは、多くの點で詩人に似てゐる。彼は兵士である。丁度、詩人が父の死んだ當時さうであつたと同樣に——。ミーチャは寬大で然も激し易かつたが、それは詩人が自らさうだと認めてゐる特性でもある。彼は父に二つの要求を出すことになる。彼は父に、詩人の場合と同樣に、當然渡さるべくして渡されない金と、唯一の愛人（卽ち無意識の言葉

で言へば、母）を要求する。詩人と作中のこの父殺し男との一致は、既にこれ等の事柄から見て明かである。更にそれ以上共通の特徴は浪費癖である。ミーチャは、金を絶對にためる事の出來ない人間として描かれてゐる。が、この特性は我々の詩人にも擧げられる。アイメー・ドストイェフスキーは、彼女の父が法外に浪費的で、人々は彼を金いぢめだと言つたと語つてゐる。家庭の間や友人間に、彼の浪費癖の逸話が殘されてゐる。ことに詩人の好きだつたのは、食後の食物として珍食を買入れる事で、この場合、彼は巨額の金を支出して、娘を非常に喜ばせはしたが、尚それ以上に夫人を不平がらせた。彼がこの買入れをした商人はプロトニコーフと言つた。ディミートリーが父を殺しに行つて果さず、たゞ老僕を傷けたゞけで、それから愛人の所へ、彼女を父に背かせる爲めに行つたその晩、彼が澤山の珍食を買入れた商人も同じ名前であつた。

イヴァン・カラマーゾフも亦、意識的に又無意識的に詩人の自畫像である。彼は快樂主義と不信仰と物質主義の化身である。が、詩人はそれを、父の死んだ時の自分の特徴であつたと言つてゐる。彼は二十歳の時、イヴァンの描寫に現はれてゐると同じ樣子をしたかつた。少くともさうアイメー・ドストイェフスキーは我々に告げてゐる。イヴァンは父を殺す爲めの匕首を、自ら突差しはしなかつたが、研いだ。又スメルヂャーコフの殺戮が障害なく果せる樣に、詩人がその主人公をその日、チェルマスニャーへ行かせてゐるのも偶然ではない。何故なら、老ミハイル・ドストイェフスキーがその農奴の爲めに殺された農場も、前にも云つた通り、それと同じ名であつたから。それを以て詩人は、から表現したかつたかの樣ではないか？『自ら短刀を突差さなかつたとは言へ、父を嫉妬と利慾の爲めにチェルマスニャーで殺したのは私であつた』と。

チェルマスニャーの森で詩人は、上述の樣に、狼恐怖症に罹つた。此處で、父に對する無意識の殺人思想が、強く彼に働いたに違ひない。アンドレイは、詩人がことに此處で、學習や父の權威のうるさい拘束から解放されて、喜んで暮したと述べてゐる。屢々この十歳の少年は、母の用事を足したり傳へたりする爲に、ダロヴォーエからチェルマスニャーへの道を歩き了せた。實際彼はその當時、既に逞しうしつゝあつたその想像に瞞着されて、何時までも夏の樣で、父が常にゐず（死）たゞ母とだけで、その援助者並びにその保護者（夫）として生活出來たらば、さぞ良いだらうと空想した。

スメルヂャーコフと詩人との一致は、上述の良心の呵

責の外、癲癇もそれを示してゐる。詩人は彼を癲癇に罹らせてゐる。スメルヂャーコフが、詩人の最も卑しい本能、言はゞ無意識を體現してゐるのに、アリョーシャは毅然たる魂の、倫理的、努力を表現してゐる。彼の中に、詩人は、人を救ひ、また人に救はれた人間を描いてゐる。同様に、詩人はこの人物を創造することによつて、恐るべきその無意識からの自己救濟を試みてゐるのだ。にも拘らず、アリョーシも亦カラマーゾフ家の一員で、彼の血液の中にも、歡樂の虫が蠢動してゐて、殊に重要な事には——彼も亦、父殺しの衝動を知つてゐる。

父殺しのこの長篇小説は遂に完結しなかつた。詩人は實は我々に、序論卽ち父コムプレクスそれ自身を與へたゞけで、兄弟がこのコムプレクスを克服することを學ぶ第二部は、我々には示されてゐない。何故なら、彼はこの仕事を、自身でさへもする事が出來なかつたから。ミーチャの性格は永久にそのまゝで變らないだらうか？彼は十字架を自分に負ひ得る程、充分強くなるだらうか？……などと言ふ問題は解決されてゐない。イヴァンも、彼の殺人願望の爲めに惱んで倒れ込んだその病床から起き上つた時、別人に成るべきである。が、詩人は、その變化それ自身を描いてゐない。聖きアリョーシャさへも、賢いゾシマの命のまゝに、尚幾年かこの世に生きねばならない。卽ち、エディプス・コムプレクスを窮極的に征服するまでには、なほそれと鬪爭し續けてゐなければならない。

アイメー・ドストイェフスキーも、詩人の創作と彼の性格との間の、個々の共通な特徴を認めてゐる。たゞ彼女には、その根據が何處に存するかゞ分つてゐない。何故なら、何女は詩的創作の無意識的決定に就いては、何も知らなかつたから。彼女は我々の注意を、就中、詩人の特徴と作中人物たる老フョードル・カラマーゾフの特性との一致に向けてゐる。彼女は、この老人を、ミハイル・ドストイェフスキーのかなり忠實な肖像であることを確言する一方、また彼女の祖父の持たぬ性格の特徴をも示した後、かう言つてゐる。——『私の父が老カラマーゾフに自分の名を貸してゐることも、興味ある事である。』と。あらゆる心的現象に、嚴格な因果關係を認める精神分析は、これも亦確かに偶然ではないと思ふだらう。一人の人間の名前は、何かしら重要な事を意味するものだと言ふ事は、分析家ならずとも知つてゐる樣に。それ故、例へばゲーテは、彼の友人ヘルデルが、彼の名前に餘り趣味の良くない言葉の洒落を加へた時、彼を嚴しく叱責してゐる。だから民間宗敎も、夢遊病者を呼びかけるに、その名を以てしてはいけないと言つてゐる。

野蠻民族が、名前を特別なものだと思つてゐる事も、多數の實例から知られてゐる。それ故に、老カラマーゾフが詩人の名前を持つてゐる。といふ事は——その洗禮名を、ロシヤ習慣に倣つて、四人の息子が皆同樣に持つてゐる——老カラマーゾフが意識的には詩人の父の肖像ではあるが、無意識的には詩人自身でもあることを意味してゐる。フョードル・カラマーゾフの最も著しい特徵、例へば、貪慾や酒好きは、父の性格から取つて來られたと云ふならば、その傳記家は、この詩人の父の淫らな一つの身持に就いては、何も知らないのである。アイメー・ドストイェフスキーも、それに對して、直接にかう認めてゐる。これは決して彼女の祖父の忠實な肖像ではない。何故ならば、彼は良い夫で良い父であつたのだからと。するとフョードル・カラマーゾフのこの奇怪な特徵は、何を意味するか？　この特徵も、あらゆる心的現象と同樣に一つ以上の要素に依つて決定せられてゐる。幼兒性を殘してゐる神經病者は、父の夫婦生活を淫らと解釋するものだと云ふことが出來る。が、もつと重要なことは、詩人が自ら自分に『淫らな色慾』の缺點を負はしてゐる事だ。故に、彼は、かの『フョードル』の中に本來の自分を描いてゐるのだ。然し詩人が、兩親の夫婦關係を實際淫らだと解釋した事は、彼の小說の女主人公の大部分が（明かに母の空想である人々が）、凡て娼婦や醜業婦である事が、示してゐる。例へば、ラスコールニコフのソーニャや『虐げられた人々』のマスターシャや、『貧しき人々』の女主人公や『青年』のアルカーディー・マルカローヴィッチの母がそれである。

カラマーゾフの長篇小說には、詩人は數十年間かゝつてゐる。他の多くの未完結の小說の中にも、彼のこの白鳥の歌の中に織込まれてゐる多くの部分が包含されてゐる。卽ち彼の最後の、長年にわたる異國滯在から書き送つた手紙が這入つてゐるが、この歌にはまたしても正反對のメロディーが響いて來る。卽ち、父に對する殺人衝動は、詩人の無意識と空想から、一生涯離れなかつた。ペトラシェーフスキー事件以前に於ては、彼の無意識の殺人願望を、我々は上述の神經病的徵候から認める。拘留後と十年の刑期の間は、彼の凡ての行爲の中に、また刑期終了後は、彼の書いたあらゆる文章の中に、我々はそれを認めるのである。詩人の全生涯は、この一つの非常に強い衝動との格鬪で、完全に滿たされてゐたかの樣である。

限り無き罪の意識のために、彼は自分の拘留を直ちに慰安と感じた。そして、この事に依つてのみ、今日まで不明であつた詩人のこの時期の態度が、判然して來る。

彼の夫人はその日記の中で、この拘留に依つて保護されたので、彼は狂氣にならないで濟んだのだらうと云ふ彼の述懷を書いてゐる。アイメー・ドストイェフスキーは、彼女の父が、拘留の二三年前にひどいヒステリー症候に罹つたと語つてゐる。彼はどの會合も避け、終日、一人で街をあちこち迷ひ歩き、聲高に一人言を言つて、もはや仕事は出來なかつた。この他の神經病的な徵候、卽ち生埋めに對する恐怖や、ヒポコンドリーや不眠症や、頻繁なヒステリー、癲癇の發作などに就いては、既に述べた。ところで、これ等凡ての徵候は、拘留の瞬間に殆ど一擧にして消え去つた。彼は全く平靜になつた。たゞ痔疾に就いて非常に歎いてゐるだけで、強い、精神の健康な友人等が、却つてひどい精神の混亂に陷つたのに、彼は全く平靜になつた。彼がペーター・パウル要塞の穹窖の未決拘留中に書いた小說『小英雄』では、生活の喜びと日光とが溢れてゐて、それは笑つてゐる五月の日に、綠の芝生に花咲く木々の下で書かれたかのやうで、暑中も光線の透らぬしめつぽい牢獄で書かれたのではないかの樣である。

　彼は、あの樣にお芝居をうたれた死刑の宣告から、生命に對する打擊を受けたさうだが、實際は、『白痴』に於ける二三の反響以外には、それに就いては餘り目に立つものが現はれてゐない。彼は、四年の刑務所生活の後、兄弟にこの恐ろしい時期の經驗を報告した時、かのクリスマスの夜、鎖に繫がれて、それ以來四年間、それを外すことが出來なかつた事に話し及んで、かう書いてゐる。――『私の親愛なるお前は、私たちがどうして別れたか、まだ覺えてゐますか？ クリスマスの夜の丁度眞夜中に、初めて私は鎖に繫がれました。人は普通、新らしき生活の一時期には、特別な活氣と元氣を感じるものだから、私も心の底は全く平靜でした』と。それから彼は、氣持良く橇で走つた事や、途中で非常な食慾を滿たした事を細かに語つてゐる。ドストイェフスキー兄弟の友人で、ミハイル・ドストイェフスキーとこのクリスマスの夜詩人を訪れた男が、詩人の態度に就いて書いてゐる。――『人々はこの人が、目前に迫る懲役を（その毒味を彼は既に、ペーター・パウル要塞の穹窖でしたのだのに）恰も外國への遊山旅行の樣に思つてゐるかの如き印象を受けた』と。上に引用した第一の手紙の中で、彼は兄のミハイルに宛てゝ書いてゐる。――『若しお前が、私が未だヒポコンドリーで、怒り易く、疑ひ深いと思つたら間違ひです。そんな事は、これつぽちも殘つてゐません』と。アイメー・ドストイェフスキーはこの事に就いて、詩人が屢々家庭の間や友人間で、刑務所の勞働を身體を

强壯にする體操と見なしたと、まだ喜んで雪花石膏を碎いたり、樹木を倒したり、材木を持運んだり、煉瓦を曳きずつだりしたと、また、これ等は彼の虚弱な身體には、非常に有益であつたと言つたと幾度か語つてゐる。然し、詩人が、限りない不足と辛苦にも拘らず、要塞の密室監禁の苦惱を、また刑務所の不快な汚穢を、單に辛抱し通したばかりでなく、身心共に强健になつて、この地獄から出て來た時、――他の盛んな人達は、例へば彼と一所に判決された貴族のドゥローフの如きは、蠟燭の様に消えたのに――この事はたゞ次の事によつてしか説明出來ない。彼は刑務所に於て、無意識の殺人思想を、無意識に贖罪した。それ故に、これ等凡ての不足や惱みや辛苦やが、非常な快感を伴なつたのである。

弟のアンドレイ・ドストイエフスキーの話によれば、詩人の家族は、老ミハイル・ドストイエフスキーが、詩人の刑務所行きを豫言した事を知つてゐた。若いドストイエフスキーが、父の家の中を火把（タイマツ）の様にクル〳〵旋回して、然も自由な說を主張した時、父は、こら〳〵フェージャ、氣をつけるが良いぞ、赤帽（シベリヤの懲罰隊の目標である）を被らされないように、と屡々叫んださうである。多くの豫言と同様に、この豫言も恐らく遲ればせなものではあらうが、然し眞實と認められねばならぬ。そして、アンドレイ・ドストイエフスキーの單純な純白な性格によつて、本當らしく見える事だが、この豫言は、息子の贖罪の慾求に對して、尠なからぬ助成を與へたかも知れぬ。同様にこの豫言に關して興味ある事は、この豫言が、懲役を、父に對する反抗と（餘りに自由な革命的な意見）結びつけてゐる事である。

贖罪へのこの大きな慾求は、彼が自分の犯行を自らどう解釋したかでも明かでもある。彼が十年後漸く、ヨーロッパへ歸つて來ることの出來た時、友人間では屡々、この刑の非人間的な嚴格さや、詩人の無罪が話題に上つた。のみならず、彼の友人の一人は、彼の不當な苦しみを詩に書いてゐる。然しドストイエフスキーは、この折から言つた。――『いゝや、形は當然だ。何故なら、私は政府に對して惡い意見を持つてゐたから。』更に彼は、ロシア人達から皇帝を取り去らうとする者は、如何に苛酷な刑を受けても、十分とは言へぬと言つて、自分の上述の意見の正當を言明してゐる。然し彼はこの言によつて、エディポス・コムプレクスに發してゐる彼の罪の意識だけを、說明してゐるにすぎない。そしてまたこの辯明によつて、皇帝に加へる殺害は、父殺しとして評價されねばならぬだらうといふ無意識的の思考順序も、全く判明するのである。詩人は實際、自分を人殺しだと見な

し、本來は決して政治的な犯罪者だとは思つてゐなかつた事は、彼の有名な刑務所小說『死の家の記錄』からも明白である。この小說は私形式で書かれ、主要人物は、既に周知の樣に自畫像である。然し、主人公を刑務所へ陷れる行爲は嫉妬からの殺人で、それを我々は單なる偶然とは決して見ない。然し全小說中で、詩人は自分の事を、時々たゞ殺人者とか犯罪者としてのみ話してゐる。

彼の凡ての感情の變化は、父に對する憎惡感の抑壓と結びついてゐる。それ故、皇帝を殺さうと思つた革命家が、アレキサンダー二世の戴冠式に頌歌を作詩し、あらゆる機會に、皇室に對して彼の愛と服從とを現はすと言ふ事になるので、その際彼の態度は、全く公明正大で、卑屈な痕跡は一つも認められなかつた。然もこの事が、數年の刑務所生活で、幾千の恐ろしい光景を己れの眼で見、又信ずべき傳へによると、それのみならず彼自身懲らされもして、孰れにせよ、皇帝の凡ての恐怖を、身を以て感得した後での事である。だからこの事は、疑ひも無く、たゞエディポス・コムプレクスに根ざしてゐる彼の贖罪願望によつてしか說明されない。然し同時にそれは、彼の苦痛を受授して喜ぶアルゴラニッシュな素質を示してゐる。

不幸な懲役人が、最も瑣細な犯行の爲めに、背中の肉の千切れる程幾同となく笞打たれる事を、彼は物語つてゐるが、その文章の行間にさへ、人は憤激の調子を少しも讀むことが出來ない。動物の樣な長官の恐ろしい殘虐行爲を、彼は、抒事詩的な冗漫さで物語つてゐる。が、人々は寧ろ、讀者がその爲めに病氣になると言ひたい位である。彼はかゝる執行後の一囚人を見た時の、自分の感情を描いてゐる。『私は筆にも盡せぬ興奮を覺えた』と彼は幾度か確言してゐる。さうして我々は、彼がこの所刑者を見て感じたのは、性的興奮であつたと附言せざるを得ない感じがする。彼は時々傷を出させて見て、痛みを尋ねずにはゐられなかつた。苦しがつてゐるこの男が、『燃える〳〵、地獄の火の樣だ』と答へたゞけでは、彼は明かに滿足出來なかつた。彼は笞刑に、言はゞ魅せられてゐた。例へば、かの野獸の樣な長官が囚人の中に初めは刑の免除や、少くも刑の輕減への希望を起させて、それから、甘い希望の天國から突き落された囚人達を、狂氣の樣に笑ひ、そして、もつと無慈悲な打擲へ兵士達をかり立てる樣を彼が物語つてゐる時、そこには、サディスムスとマゾヒスムスとが、混同してゐる事は見逃せない。

感情の細かい詩人ツルゲーニェフも、ドストイェフスキーのサド・マゾヒスムスを認めてゐる。かゝる傾向を

持つ大詩人のみが、『罪と罰』の中で、豫審判事ポルフィーリに、農夫の物語を言はせ得るのだ。この農夫は、高位の長官に刑務所で組みついたが、故意に害を少しも加へない、そしてこの襲撃で彼の目的としたのは、たゞ、自分が苦めてもらへる爲めに、嚴刑に所せられ度い事だけであつた。『何故なら、苦しむ事が快いのだ』と詩人は彼に言はせてゐる。『だから若しそれが、役人から加へられ、然も本人が無罪であるなら、尚更に良いのだ』と。この特殊な論理は、然し再び、精神分析だけが説明し得る。長官、兵士、番人、警官、各種の役人等は皆父の面影である。だからこれ等の人々による所刑を、幼兒性を殘してゐる神經病者は、罪に惱む良心を以て、快く感じ得るのだ。それ故に、詩人のサド・マゾヒスムスもエディポス・コムプレクスに根ざしてゐるとは、直ちに言へぬ。マゾヒスムスが、近親姦に罹つた人の不滅の罪惡感から發してゐる一方、サディスムスは、父の主權と同一物であらう。

『死の家の記錄』の中の數々の挿話は、明かにマゾヒスムスの特徴を持つてゐる。刑務所での復活祭に關する物語などがそれである。囚人達は復活祭の前週、早朝勤行へ行つた。詩人は、早朝薄暗いのに（シベリヤの早春を思へ）早朝勤行へ連れ行かれて、鎖をガチャ〳〵鳴らせ乍ら、極下座に立たねばならなかつた時、嘗ては常に貴人達に伍して、上座を占めた彼ではあつたが、本當に愉快だと、特殊な感動を受ける。多くの人達が好奇的に彼を見て、二三の者は同情し、他の者は嫌惡を以て眼をそむけた。そしてその上、同情した人達が、銅貨を二つ三つ彼に贈つたのを見ても、彼は愉快であつた。『それではこれは、この恥辱の記念としませう』と一人ごちて、その金を取つておいた。この物語は終始、強い罪惡感によつて運ばれてゐる。然し、餘りに強い罪惡感は、エディポス・コムプレクスの中に錮着してゐるものだ。そして、屈辱の中や、自己の弱さと卑しさとを意識することへのかゝる耽溺は、一つの幼兒性感的、色合を持つ。自己を、子供の時の樣に全く弱く賴りなく感じるのは、非常に強い者の力がさせるので、このマゾヒスト的空想は、キリスト敎的恭順の背後に隱れてゐる。時も時、復活祭の日が、マゾヒスムスを醒ました事は、このマゾヒスムスとキリストとの一致が、復活祭の時期にはことに相應しいので、容易に理解出來る。兎に角、この一致は、彼の態度や世界觀の可成りの部分を支配してゐる。神父は彼に取つては、生涯、實父を高めたものである。だから彼は、父に對する彼の同性愛を、神への愛に於て醇化してゐる。然し、彼が己れの人格とキリストとを同一視し

た事も、周知の事である。惱み、屈し、忍ぶことの中に、詩人は人生の意味を見出した。卽ち、自己を惱める神の子と同一視してゐる。『私は不平は言はない。それは私の十字架なのだ』と彼は幾度か刑務所から書いてゐる。彼の小さい長女を生かしてもらふ爲めには、彼は『凡ゆる十字架の苦しみを、喜んで身に引受け』たであらう。かやうに彼は、自己を幾度か惱める神の子と同一化してゐる。キリスト敎神話の相反並存傾向は、他の多くの神經病者に對してと同様に、相反並存する兩感情の間を永久に動搖してゐる彼の魂に對しても、この一致に至る動機をなした。わが子を罪も無いのに十字架上最も苦しく死なせた神、また、この苦痛を彼に許して呉れるようにとのひれ伏す願ひを、耳をふさいで聞かうともしない神は、詩人を不當にひどく惱まし、不自由な思ひをさせた、彼の苛酷な不正當な實父に等しいのである。（未完）

睡眠恐怖症の分析

矢部八重吉

或る精神病醫學者の下に三ヶ月入院治療の結果、不眠を癒やしたと稱する患者が退院二週後、急に不安に襲はれ始めた。眠りと云う事が氣に掛つて、何も手につかない。治療前は五ケ年と云うもの、毎夜二三時間位しか眠れなかつたが、日々の仕事はどうやらやつてゆけた。然るに治療後は七時間は確かに眠れる。にも拘らず、不安と取越苦勞は以前の數倍に增して來た。どうも合點がゆかぬと云ふのが主なる訴へである。患者は四十九歳になる。或地方の織物業者で東京に支店を有してゐる。一ヶ月間滯京、分析を受ける取極めをした。

分析開始當時、患者は飽迄夢を見ない質だと言ひ張つたが、八回目の時間に次の夢を語つた。

夢一——自分は二三の友人と川緣を歩んでゐる。川は非常に高い嶮しい崖下を流れてゐる。狹い橋に達した。自分はそれを渡らうとしたが、友人達は反對した。對岸は美しい景色の野原らしい。(自分等の歩んでをつた側は人家に沿うてゐる)。その光景は旣に親熟の感 Déja Vu がある。

聯想——鄕里の村外れに川がある。それは隣村との境である。小供の時に橋を渡つて對岸に行くのを恐れた。そこには惡い小供がゐて、虐めるからだ。三里ばかり隔つた母の鄕里の村の外れに直徑七八町ばかりの沼がある。そこには菱が澤山生へてゐる。六七歳の頃、同じ年配の友達と菱取りに行つた。舟を非常に怖がつた爲めどうしても乘るまいとしだが、その時は乘らなければならなかつた。記憶に遺つてゐる處では、舟と云ふものに乘つたのは此の時が始めてだつたらう。怖々ながら乘込んで、五六間岸を隔つた時、友達は舟を動かす爲めに差した棹が水底深くくひこんで拔けなくなつたのに氣がついて、一生懸命拔かうとしてゐる內、舟は段々動いて行つ

てとう〳〵棹を放して了つた。此時は二人とも非常に心細くなつてとう〳〵泣き出した。暫くして大人が漕いてきた舟が近よつて、棹を拾つてくれた。

問、舟旅をなさつた事があるか。

答、舟は嫌だから可成避けてゐる。一度どうしても避けられない事があつた。それは満洲へ商用で出かけなければならなかつた事だ。確か五年程前でした。下關から乗船した。同伴者が三人あつたが船が陸地を遠ざかるに從ひ段々心細さと淋しさを强く感じた。

問、その頃不眠に惱まされた事があるか。

答、日本へ歸つて間もなくでした。不眠を感じ始めたのは。

問、船中での感想又は空想の樣なものがあつたら、お話し下さい。

答、さうです、馬鹿々々しい考でしたが、若し天災か何かあつて船が皆毀されてしまうか、又は海上に異變があつて歸れない樣になつたらどうだらうと云ふ樣な事を空想して、をち〳〵眠れなかつた。

患者は十回目の割當時間に來なかつた。翌日やつてきて、次ぎの言ひ譯をした。

『昨日の前夜また不眠で惱んだ。それは一つの問題が就床前に出て來て、どつちとも決し兼ねたからだつた。昨日は前の醫者の所へ行く日だつた。(前の醫師への積極轉嫁が未だ解けてゐない。)が、そこへ行くと、こちらの割當時間に間に合はない。いづれにするかと云ふ事がきまらないので、眠れなかつた。

問、處で昨日はどつちへ行かれましたか。

答、どつちへも行きませんでした。

强迫症狀の一つである。最も一般にある窮境(ディレンマ)、卽ち、義理と云ふ問題に關し『あちら立てればこちらが立たない、こちら立てればあちらが立たない、兩方立てれば身が立たない』と云うのが玆に出てゐる。患者は身を立て樣として兩方の義理を棄てた。が、それは更に第二のディレンマに導いた。身を立てたが爲め罪感を高めたと云ふのは、分析者及醫師(何れも父の名代)の命に背いたからだ。去勢恐怖はこゝに攪き亂された。去勢恐怖は死の恐怖である。睡眠が妨げられたのは、此所に起因してゐる。

問、あなたは、明日の事をはつきりきめないと眠れない質ではないですか。

答、さうです。私はその癖が可成り强い樣です。

問、あなたは遺言書などを書いて置きますか。

答、さうです、自分が死んだ後で、不義理をそのまゝ

遺したり、ごた〳〵があつたりしてはいかないと思ひ、遺言書も書き、家族のものにも日頃能く言ひ聞かせて置きます。

廿一回目の時間に患者は次の夢を持つて來た。

夢二――『自分は死んでゐる樣である。家族親戚の者達が集つて何か相談してゐるらしい、醫者の樣な坊さんの樣な人がゐる。自分はその人に言つた、まだ死にきつてゐないから、もう少し飮ましてくれと。』

聯想――『もう少し飮ましてくれ』前の醫者は不眠の時飮む樣にと頓服藥をくれた。が、此は大して利かないから、もう少し量を增してくれと頼んだら、頓服は成可くやらない方が可いと言つて、頼みを容れなかつた。

問、その後引續いて頓服藥を用ひてゐらつしやるか。

答、もうやめました。利かないばかりでなく、反つて惡い樣ですから。

問、惡いと云ふのは不安が增す事ですか。現に七時間眠れる樣になつて反つて惡くなつた樣に。

答、さうです。

聯想の繼續――『家族、親戚のものたちが集つて、何か相談』してゐるらしい。自分は外の人が皆起きてゐる內に自分丈就床すると、眠りつきが好い。小供の時に、朝、目を醒した時に母や姉が臺所で仕事してゐる、その音を聞きながらうつら〳〵してゐる氣持は實に何とも言はれない心持好さだつた。

問、現在あなたはどういふ風にして、就眠をされるのか。

答、自分は十疊の間の中央に床をのべて、家族の人達を廻りに臥さして寢ると落付いて眠られるので、さうしてゐる。

註釋――患者の無意識は睡眠を恐れてゐる。それは罪惡感の爲めである。罪惡感は贖罪を强ひ、贖罪は死を求むる事で出來る。それに對する防禦反應として不安が示されてゐる。夢一の川は三途の川、橋は冥途の道、それを渡るのを友人は反對した。橋が狹かつたのは、崖下の流れへ墜落の恐怖（意識的には高所恐怖、無意識的には被誘惑願望）であり、對岸にある美しい野原は極樂淨土（胎內憧憬）である。親熟さの感は最初の古鄕、卽ち胎內瞑想に基くからである。被誘惑願望も究極は胎內憧憬に辿り得るであらう。

聯想として出た、川を隔つた隣村の惡い小供は鬼である。鬼に虐められるのが怖い。鬼は地獄にゐる、地獄は罪惡感を示してゐる。舟は三途の川の渡船である。乘るのが怖いのは死の恐怖である。棹を失つて心細い頼りない捨小舟（出產）は遺棄、卽ち分離を表現する。出產は分

離の初型、最初の哀別離苦である。出生して此の世を第二の郷里としたものは（住めば都、都は胎内の象徵）、軈て此の世を辭する時には、第一の郷里を離れた時（出産）と同樣な哀別離苦を感ずる。此れ死の恐怖である。

尙、天災か何かあつて船が皆毀されてしまふか、又は海上に異變があつて歸れない樣になると云ふ空想は、歸らぬ旅に就く事、卽ち死である。

患者は（死を恐れる。それは無意識に强い死の願望（胎內憧憬）を持つからである。が、此の恐怖は睡眠に轉位されてゐる。明日の事をはつきりときめて置かないと眠れない。恰度此れは死んだ後で不義理をそのまゝ遺したくない、ごた〳〵の種を無くして逝き度い、遺言をして置き度いと同じ動機に基く患者の無意識は睡眠を死と同一化してゐる。眠るは死するなり、うつかり眠るとそのまゝになつてしまう。卽ち不眠は死の恐れに對する防禦である。夢二は更に明かに此の同一化を表現してゐる。『自分は死んでゐる樣である』。此の意味は『自分は眠つてゐる樣である』と註釋出來るであらう。家族、親戚に圍まれて臨終の場面を演じてゐるのである。『醫者の樣な、坊さんの樣な人』で示された壓縮作用は眠と死との結合を現はしてゐる。それは醫者は眠りに導く睡眠藥を與へ、坊さんは死に導く引導を授くるからである。此の夢の聯想からして患者は醫者が頓服（睡眠藥）を與へなかつた不滿を訴へてゐる事が解る。

十疊の間の中央に自分の床をべ一家族の者に圍まれて就眠するのは臨終の場面である。此の症候行爲に依り患者は每夜臨終を繰返すのである。

フロイドは性興奮の副產物としての物的堆積（ソマチック）の結果として不安神經症及不眠症を擧げてゐる。物的原因の場合に鎭經劑、睡眠藥が效果があり、又效果を齎らす事は差支へないと思はれるが、精神的原因の場合には藥劑療法は效果に乏しい（頓服は大して利かない）。それは防禦作用が働いてゐるからである。斯樣な不眠狀態に對し、藥物又は他の方法に依る不眠治療は效果がないだけでなく、若し效果ある時は却つて症狀（例へば不安の樣なもの）を高めるに至るであらう。と云ふのは效果は防禦作用を破り、更に第二の防禦作用を導入するからである。

（終り）

犬の心理を創造したウルフ夫人

安藤一郎

本誌の今年二月號で一寸紹介したヴァヂニア・ウルフが、昨秋『フラッシ』“Flush; a Biography” といふ、二百頁に滿たぬ輕い著書を出した。これを讀む人々は恐らく二樣の興味を感ずるであらう――先づフラッシとはブラウニング夫人の愛犬で、現在でも ‘Love is best’ と歌つたヴィクトリア朝の大詩人を好む一群があるからには、この作から何か文學史的魅力を自然に受けることが尠くないと思ふ。もう一つには、ロバァト・ブラウニングよりも作家ヴァヂニア・ウルフに對して深い關心をもち、文學者としての彼女がこれに依つて狙つてゐる意圖、卽ち新しい傳記の形式に注目するであらう。が、いづれにしても『フラッシ』の面白さが減じられる筈はない。併し私などは、言ふまでもなく後者に與する方で、こゝでもそれを中心として觀る積りである。

ウルフ自身、卷末に幾多の參考書目を掲げ、且註釋を附してブラウニング夫妻と彼等の周圍にかゝはる材料――傳記的眞實へ結んでゐるから、それに關する何か特殊な詮索は斯道專門の學者に任せよう。それにしても、結局この書は、物語としての面白さを構成するために、抑揚と省略が施され、賢明に歪曲されてゐるらしいから、さういつた精密な考證は單に衒學的になる以外大して役立たないやうにおもはれる。たとへば、ウルフも斷つてゐる通り、フラッシは實際は三度盜まれたのだが、本文は一度の事件に纒めてゐる。たゞ、この篇がブラウニング夫人の「愛犬フラッシに寄せる」‘To Fluch, my Dog’ 及び「フラッシ、又は牧羊神」‘Flush or Faunus’ 二つの詩作からヒントを得て、多くロバァトとエリザベスの間に交はされた書簡が取り入れられたことを知つておけば充分であらう。

所が、ウルフそのものを眺めるときには、誰でも直ち

にかの「傳記」と銘打つた(事實は一種の諷刺小說だが)奇怪極りなき『オーランドウ』"Orlando"(1928)を想起して、これと比較してみるに相違ない。『オーランドウ』は、假空的人物を創つて、三十年餘りの經驗を三世紀にわたる時代へひき伸ばして、人間一生の旅程と知的文化の歷史を巧妙に交錯せしめたのであるが、そこに著しく表はされた文學趣味といふものは、エリザベス朝への愛好が殊に强調され、ヴィクトリア時代もかなり色附けられてゐた。そこで今度の『フラッシ』はヴィクトリア時代に對するウルフの理解が思ふ存分表はれてゐるとも言へる。かういふ事實から觀察すると、現代にあつて最も急進的な小說家の一人として見られるやうなウルフも、畢竟純イギリス的であり、母國の文學をどんなに熱愛してゐるかゞ窺はれる。しかも彼女は、英國文學の傳統の根柢に摑んできた教養を、鋭敏な知性をもつて批判し、いかにして現代化すべきかといふことを常に心掛けてゐるやうだ。このウルフは聰明すぎる程着想を凝らしてゐる。彼女が偉大な天才は兩性的(バイセクシユアル)であらねばならぬと說いてゐることは有名だが、確かに或る批評家の言へる如く、自分も、「みづからの性の烙印に苦しんだ」ので、結局性の轉身を施されて、男女兩性の經驗を有する『オーランドウ』は、その意義から重要な所產とすべきであらう。けれども彼女の理知はまだこれでも滿足しないものゝやうで、オーランドウといつた幻影を編み出して、二つの性意識を嚴しく對照せしめた後に、愈々痛快なテーマを思ひ當てゝ一層想像の領野を展げたのである――卽ち動物、それも人間に一番親近してゐる犬をもつて、或る時代の或る社會と或る人物を浮き出させようとしたのだ。『フラッシ』は單に『我輩は猫である』『ワンワン物語』といつた行き方を取つたものでないと信じる。若しそれだけなら、何も問題は無いのだが、外廓に傳記的材料を張り廻し、內部に「犬の心理」canine psychology"なる困難な制作を試みてゐる。つまり、これは事實と想像の混和であり、作者が一層視界を新しくした證據ではなからうか。人間と動物の意識交流、それに話題の中心が文學史上あまりに著名なブラウニング夫妻の戀愛事件だ。ウルフの評傳を書いたウィニフレッド・ホルトビーは『波』"The Waves"(1931)以後のウルフを卜して、彼女に二つの傾向――「一つは實用的で、議論好き、且分析的だが、他は創造的で、詩的、そして大膽極まるもの」、これらの兩方が離れたまゝでゆくか、それとも相合してゆくかゞ興味あるところだと言つてゐるが、『フラッシ』は或る意味に於いて兩者が相和したものゝやうにもおもはれる。小說家としてのウルフと批評家として

のウルフを一緒にして考へるとき、吾々はかゝる作品も別段不思議と感じないであらう。そこで內容を少し抄譯して說明してみよう。

元來「フラッシ」といふ犬は、ブラウニング夫人となつたバレット孃の知人で、これも閨秀作家のメァリ・ミットフォドがもつてゐたもの、レディングに近いスリー・マイルズ・クロスに產れ、そこで最初の歲月かを過した。これは多分一八四二年頃のことらしい。フラッシはスパニェル種で、イギリスでは名犬の隨一とされてゐる――いつたいスパニェル'spaniel'といふのはスペインから出たので、太古カルタゴ人がスペインに上陸したとき、兵隊たちは「スパン！ スパン！』と吹鳴つたさうだ。何故といふのに、かの地には野兎が非常に多くて、それがあらゆる籔や叢から跳び出してきた。スパン Span といふのはカルタゴ語で野兎 (rabbit) を指し、この野兎の多い國 Rabbit-land をヒスパニア Hispania と言ひ、この野兎を追うてゐた犬の群はスパニェル (rabbit-dog) と呼ばれるに至つた由。尤もこの傳說はウルフ自身も當てにならないと言つてゐるが、一寸面白い話である。兎に角、フラッシは自由な天地、草木の多い野原を驅け廻ると、彼の意識に潛在するスペインをカルタゴが發見した時代の祖先の荒々しい本能が蘇つてくる、そして「スパン！ スパン！」といつた呼び聲が聞えるのだ・・・

「所が突然に風が吹きつけて、いかなるものよりも銳く烈しい、突き刺すやうな臭ひを散らす――彼(フラッシ)の腦髓を引き裂いて一千もの本能を搔き立て、百萬の記憶を解き放つ臭ひ――野兎の臭ひ、狐の臭ひ。さつと彼は走り去つた、丁度急流にひかれて水中の奧へ奧へとゆく魚のやうに。彼は自分の女主人公を忘れてゐた、人間の凡てを忘れてゐた。彼は黑い男たちが『スパン！ スパン！」と叫ぶのを聞いた。彼は鞭がぴゆつと鳴るのを聞いた。彼は驅けた、突進した。遂に彼は呆然と立ちどまつた、呪文がやんだのだ。內氣に尻尾を振りながら、大變ゆつくりと、彼は野原を橫切つてとことこ戾つてくるのだつた、ミス・ミットフォドが佇んで、『フラッシ！ フラッシ！ フラッシ！」と呼び、日傘を打ち振つてゐるところへ。」(p. 16)

こゝなどは非常に新鮮な感覺で、犬の內面心理を示してゐると思ふ。

やがてフラッシはロンドンのウィンブル・ストリートにある宏莊な邸宅へ住むやうになり、病身でひきこもつてゐるバレット孃の典雅な寢室に始終彼女と共に起居を共にしてゐた。併し彼は時々思ふ存分に走り廻つたスリー・マイルズ・クロスの田舍が懷かしくなつて、幾度か祖

先の聞いた『スパン！スパン！』といふ黑い男だちの叫びが蘇つてくるのだつた。だが、次第にやさしいお孃さんになづくに從ひ、都會の生活にも慣れていつた。バレット孃の馬車に乘つて買物のお伴をする。又リーヂェント・パークあたりまで散步にもゆく。けれども往來の騷々しい雜踏は、靜かな田園に育つた、この感受性が强い犬をひどく驚かして了つた——ペティーコートが彼の頭を掠める、ズボンが橫腹をこする、折々車輛が鼻先から一吋位のところを走る……荷車が通ると、破壞の疾風が彼の耳元に唸り、前脚の長い毛並を煽り立てた。彼は恐怖に飛び立つ許りだつたが、幸ひなことに、頭にはクサリが附いてゐて、それをバレット孃がしつかり抑へて離さない。公園へ行つてみると、草や花々や樹木があつて、彼の神經は震へ、感覺は高らかに歌ひ出し、久し振りに野性の本能が返つてくるのだが、何故か彼は解き放たれず、ぢつと繫がれてゐなければならぬ。そこでフラッシは、公園の入口に掲げてゐる立札、「犬はクサリに繫ぐべし」を讀まないでも、かう考へる——花壇とアスファルトの步道があつて、人々がピカピカした禮帽を被つてゐるところでは、犬共はクサリに繫がれてゐなければならないんだらう、と。それにしてもフラッシにとつてこれまでの自由奔放な世界を全く失ふことは却々辛いのであつた。だが、そのうちに彼は段々とこれを諦めるやうになつていつた、彼は新しい女主人のバレット孃をほんとに好んだし、彼女も亦フラッシを愛した故に。彼女にはフラッシがパンの神であり、自分がアルカディアの暗い森にひそむニンフと感ずるやうなことにもなつて、病床の寂しさが慰められるからだつた。ウルフは、バレット孃の一詩「フラッシ、又は牧羊神」から、彼女と愛犬の間に於ける一種の精神分析學的解釋をかく抽き出して、次に來るフラッシのブラウニングに對する嫉妬へ、テーマを結びつけてゐる。

やがてフラッシとバレット孃の平和な親愛を一つの異變が擾しかけてきた。一八四五年の一月頃最初の或る手紙が屆いてから、バレット孃の樣子が急に活々とし始め食慾も進んで、別人のやうに元氣が出るやうになつた。その隱れたひとからの書簡が次第に規則正しく送られて遂に二人が相會する時機が近附いたらしいことを、フラッシも明かに感じたのであつた。彼は、どんな男が現はれるかと、每日待ち構へてゐた——

「そのまゝ四月が過ぎた、また五月の二旬も。そして五月廿一日に、フラッシはその日が遂に到來したことを知つたのだ。何故なら、木曜日の五月廿一日には、ミス・バレットは姿見をしげしげと覘きこんで、印度肩掛で美

しく裝ひを凝らし、ウィルスン（バレット孃の小間使）に命じて臂掛椅子を近く、併しあまり近過ぎることなく引き寄せ、あれこれと、また他のものにも觸つてみ、それからベッドの中に眞直ぐに坐したからであつた。フラッシは彼女の足元に緊張して蹲つてゐた。彼等は待つてゐた、二人共に。遂にマラバン教會の時計が二つ打つた、二人は待つた。それからマラバン教會の時計が一つだけ打つた、二時半なのだそしてその一打が絶えかゝると、玄關戸にコツコツといふ音が勢ひよく響いた。ミス・バレットは蒼白になつたが、彼女は大變靜かにしてゐた。フラッシもやはり靜かにしてゐた。階上の方へ、恐ろしい、無情な跫音が昇つてきた、階上の方へ、フラッシは知つたのだ、頭巾を破つた、不吉な、深夜の人影が昇つてきたのを――覆ひを附けた者が。いま彼の手がドアにかゝる。把手が廻つた。そこに彼が立つてゐた。

『ブラウニングさまでございます！』と、ウィルスンが言つた。」(p. 53)

「ブラウニングさま」といふ言葉を聞いて、ミス・バレットの兩頰にさつと紅が射し、彼女の瞳は輝いた。ブラウニングはクリーム色の手袋を穿め、眼をしばたゝき、よく身繕ひして、落着いた容姿であつた。部屋に入ると直ぐに彼女と話し始め、夕暮まで時を忘れてゐるかのやうだつた。彼等にフラッシはすつかり無視されて了つた。ミスタ・ブラウニングがやつて來たので、バレット孃も亦彼女の寢室も全く一變した程だつた。その晩、彼女はいつも食べずに愛犬へやつて了ふチキンを骨までしやぶり盡した位で、フラッシは悲しいことに、馬鈴薯だの、鳥の皮だの、ほんの少し戴いたのみだつた。

　そこで彼は、それからも段々度重なつて訪ね來つては例の臂掛椅子に腰を下し、長い間女主人としやべつてゆく男に、激しい憎惡を感じた。つまり、フラッシは嫉妬してゐたのだ。たうとう六月八日に、突然堪へきれなくなつてミスタ・ブラウニングの脛に嚙みついた。この事で、彼はバレット孃にも酷く叱られ、ウィルスンは彼を打擲しもしたが、漸く女主人公を愛する上は、ミスタ・ブラウニングも愛さなくてはならぬと考へ、'love is hatred and hatred is love' などと沈思した揚句、やつとブラウニングへの憎惡を捨てたのであつた。尙、この書の後半では、フラッシが盗まれてバレット孃がその發見に心を切に碎く次第、ブラウニングとバレットの驅落、イタリーの旅行に始終伴隨するフラッシの、犬の嗅覺から探つた異國の街々、又彼等の結婚生活、そしてフラッシの死に至るまでが取り扱はれてゐるが、恐らく、ブラウニング出現のあたりが最も面白いやうに思はれる。『完』

近代的人間の精神問題（ユング）（3）

武田忠哉

いまやわれわれの心理學的關心は、かやうにして精神の後景を形づくる不明の諸現象の方に牽引されるにいたつた。そして、この追求の際に用ひられた熱情は、疑もなくすでに時效に罹つた宗教形式から逆流する精神的エネルギーにほかならない。したがつて、これらの諸研究の成果は内的に一つの眞に宗教的な性質を帶びてゐるのである。假令、それらが外的には、いはば學的に色彩づけられ、そして、シュタイナー氏が彼の人智學を眞の「精神科學」として聲明したにしても、それはかやうな成果の宗教性を覆すものでありえない。むしろ、それらの學的な假面化の試みによつて、すでに宗教一般がいかに不評におちいつてゐるか、その現狀が示されるにすぎないのである。

かやうにして、いまや近代的意識は十九世紀と反對に、それ自身の・最も内的の・最强の期待を抱いて、精神の側への移向——（しかも、何らかの・一般に知られた傳統的告白の意味においてではなしに、グノーシス的意味において）——を示してゐるのである。そして、すべてこれらの運動が一つの學的色彩を持つてゐることは、すでに私がその點について暗示したやうに、一つの怪奇、あるひは、一つの假面化であるだけではない。むしろ、それは、さらにそれらの運動自身が、學、すなはち、認識、を意味してゐることに對する一つの積極的標識とも見なされるのである。しかも、それは西洋的宗教形式の精髓、信仰、に對する嚴しき相反においてであらねばならない。まことに、近代的意識は信仰を回避し、したがつて、同時に、それに基づく從來の諸宗教*に對しても類似の關係に立つのである。ただ宗教の認識内容が、經驗された後景的現象と一致するやうにみえる限りにおいて、その場合のみ近代的意識はその宗教に對して妥當性

を與へるのである。かやうにして、近代的意識は、知ることを、すなはち、原的經驗を持つことを欲するのである。

＊ユングによつて回避されるのは、「從來の諸宗教」(die Religionen) であつて、眞正の「宗教」(die Religion) そのものではない。むしろ、後者を求めるための純一な熱情が必然的に一時前者に對する否定に向はせるのである。さらに、他の側面からみるならば、ユングのやうに藝術的資性の纎細な心理學者が、眞正の宗教に對して深く敬虔でない筈はありえないのである。なほこの場合の、「從來の諸宗教」と「宗教」との原語の概念が學的に區別されねばならないことは、かつてコルビュジエの合理主義においても、「様式」の術語を中心として同じやうに要求された一つの例と相似的に把握され得るのである。「詩・現實」第二輯、板垣鷹穗氏「合理主義思想と歴史的教養」參照。

かつてわれわれは、一つの、發見の時代を持つた――（おそらくそれは、われわれが土地を完全に探究することによつて終つたのであつた）――。そこでは、最早、極北人が一脚であること、あるひは、それに類することが信じられなかつた。むしろ、この時代は、一般に知られた世界の限界の彼岸にあるものを知ることを欲し、またみづからそれを認めえたやうに主張したのであつた。いまや明かにわれわれの時代は、意識の彼岸における心的なものが何であるかに關する探究を開始してゐる。例へば、あらゆる降神說の圈の問題は、「もし靈媒がその意識を失つた場合には何が起るか」であり、そして、あらゆる神智學者の問題は、「一層高い意識段階において、すなはち、私自身の今日の意識の彼岸において私は何を經驗するであらうか」について論じられ、あらゆる星占術者の問題は、「私の意識的企圖の彼岸における私自身の運命の作用力と規定とは何であらうか」によつて代表され、そして、あらゆる精神分析學者の問題は、「神經病の無意識的發條はいかなるものであらうか」に關して集中されてゐるのである。

かやうにして、われわれの時代は精神を要求するのである。この時代は原的經驗を欲し、したがつて、それはすべての假說を拒否するだけでなしに、同時に、すべての現存の假說――例へば、一般に知られた從來の諸宗教・本來の學――を手段のための目的として利用するのである。かつて今日にいたるまで、ヨーロッパ人が通常よりもいくらか深くこのやうな機構を覗ひ入るとき、一つの輕微の惡寒が彼の背筋を滑り下りるのが常であつた。すなはち、そこでは單にいはゆる研究の對象が彼にとつて幽暗に・戰慄的にみえただけでなしに、その方法論も

やはり彼自身の美しい精神的業績に對する一つの批難すべき浪費として彼に映じたのであつた。例へば、今日、三百年以前と比べて少くも一千倍多くのホロスコープ*がトされることに對して専門の天文學者はいかに云ふであらうか。そして、現代の世界が古代と對照して全然何らの迷信をも減少してゐない狀勢に對して、哲學的啓蒙者と教育家はどのやうな見解を持つのであらうか。現に、精神分析學の樹立者フロイドさへ最も誠實な努力を捧げることによつて、精神の後景における汚濁と幽暗と惡をもつとも鋭く明示し、かうして、すべての悦び――（その背後に不潔以外の何らかあるものを探し求めるところの）――が世界から失はれるかもしれない、といふことを豫見したのであつた。しかしながら、彼のこの實驗は成功を收めえずに、むしろ、時にはその脅威が反對の結果を誘導する場合も起らねばならなかつた。すなはち、それは汚濁に對する驚歎であり、この、一つの、本來非合理的な現象は、もしそれの背後に精神の祕かな眩惑が認められないならば、恐らくけつしてノルマールには說明され得ないやうに思はれるのである。

＊ Horoskop. 星占術の用語。主として誕生時の星位を意味し、それによつてその人間の運命がトされるのである。

　恐らくわれわれが、何らの疑ひなしに明言しうるやうに、十九世紀の劈頭――記憶すべきフランス革命時代――から今日にいたるまで、絶えず強化する引力によつて精神的なものが徐々に一般的意識の前景へ移入したのであつた。そして、あの、理性の女神のノートル・ダァムにおける登位の象徴的表情は、西歐の世界にとつて、ヴォータンの栂がクリスト教の傳道者によつて伐り倒された物語といくらか類似の意味を持つやうに思はれる。何故なら、いづれの場合にも、何らの復讎の閃光がそれらの冒瀆者たちを射なかつたからである。

　丁度その時代の、十八世紀の中葉に、ほかならぬ一人のフランス人、アンクティーユ・デュペロンがインドに滯在し、十九世紀の最初に五十種のウパニシャッドの蒐集の飜譯を發表したことは、一つの、世界史における單なる諸譚よりもより多くの價値を持つやうに思はれる。實際、この飜譯によつて、謎にみちた東洋の精神をより深く洞察する道がはじめて西歐の前に開かれたのであつた。もちろん、それは歷史家にとつては、一つの、史的因果關係から遊離した偶然として通用するかもしれない。しかしながら、私の醫師的成心によれば、それはけつして偶然として認められることはできない、何故なら、そこではすべてが心理學的法則――（個人の生活において例外なく妥當するところの）――に準じて進行したか

らであつた。すなはち、それは、「何らか一つの重要な部分が意識の內部において價値を剝奪され沒落する場合には、他の側の、無意識的なものの內部において必ずそれに對する補償が行はれる」といふ法則にほかならない。そして、この補償はエネルギー保有の原則との一致において營まれる、何故なら、われわれの心的經過もやはりエネルギー過程なのであるから。かうして、すべての精神的價値が消去されるとき、それは例外なしに一つの等價物によつて補充され、この推移は、日常の精神療法の實際においてけつして裏切ることのない・必ず證明される發見的原則として通用し得るのである。

一つの國民の精神生活。私自身の醫師的要素の理解するところによれば、この生活は心理學的原則の彼岸にあるやうに考察されることはできない。すなはち、私の內部のかかる要素にとつて、國民の精神は單に一つの個人精神より多少複雜な形象にすぎないものとして理解されるのである。さらに、その逆方向において、しばしば文學者が彼の精神における「諸國民」について語ることはないであらうか。それは私には非常に妥當的なものとして映じる、何故なら、われわれの精神の內部におけるあるものは個別的ではなしに、むしろ、國民、全體、いな、人類によつて規定されてゐるからである。スヴェーデンボルグの云ひ方によれば、何らかある點においてわれわれは一つの單獨の偉大な精神――一つの單獨の最大の人間――の部分を占めてゐるのである。例へば幽暗が個人の私の內部を支配しつつ情深い明朗を挑み求めるやうに、またその過程は國民の精神生活においても同じやうに行はれるのである。あの、ノートル・ダァムへ合流した不明の群衆はアンクティーユ・デュペロンから一つの世界史的な解答を抽出し、その結果、やがて彼の基礎においてショーペンハウワーとニーチェが生みだされ、彼を契機として東洋の精神的影響――（それは當時なほ展望されえなかつた）――が源を發したのであつた。

いまやわれわれの神々として見なされてわれわれの意識世界の偶像と價値はまさにその主位を退かねばならない。かつて古代の神々の名聲を最も烈しく失墜させたのは彼等のスキャンダルであつた。この物語は反覆され、現代の人々はわれわれの輝ける道德とわれわれの無比の理想との疑しい基底を掘り穿ちながら歡聲を擧げるのである。「これこそは君らの神々である。人間の手によつて作られ人間の卑劣によつて汚された一つの妖術。その內部に好餌と不潔の充ちた、一つの、白く塗られた墓。」かうして、そこには古くから知られた一つの譜がひびきはじめ、かつてわれわれが堅信禮のための聖書課におい

て理解しえなかつた言葉が、生々と語り告げられるのである。

私が眞面目に確信するところによれば、これはけつして偶然の類推とはみられ得ないのである。いまやあまりに多くの人々が福音よりもフロイド心理學に對して一層親和的でありそれにもかかはらず、彼等はすべてわれわれの同胞として存在し、われわれ各自の内部には少くも彼等に妥當性を與へる「一つの」聲が潜んでゐる。何故なら、根本的に解すならば、すべての人々と同じやうにわれわれもまた「一つの」精神の部分を形づくつてゐるからである。

この精神方向からどのやうな豫想外の結果がみちびかれるであらうか。すなはち、世界に對して、一つの、從來より醜惡の様相が與へられ、したがつて、もはや何人もこの世界を愛し得ず、最早われわれはわれわれ自身をさへ愛する能力を失ひ、かうして、最早われわれを誘つてわれわれ自身の精神から遊離させうるやうな何物もつひに外界に見いだされない一つの局面が生じるのである。そして、恐らくまた、それは、最も深き意味においてかやうな試みが目的とする結果にならないのである。要するに、神智學がそれ自身のカルマ（業）と再化身との教義によつて唱へるところも、「この假象の世界は未完成な人々のために、一つの、一時的な道徳的療養地にすぎない」、といふことに歸着しないであらうか。この學の場合にも、同じやうに現在の世界の内在的意味が相對化され、そこでは、ただ現在の世界が醜惡にされず、他の・より高い種々の世界が約束されることによつて別の技巧が用ひられてゐるにすぎないのであり、しかしながら、その結果はフロイド心理學の場合と比べて何らの差異を示してゐないのである。

實に、すべてこれらの理念はいまや近代的意識を下部から捕捉しつつあることが認められるのである。アインシュタイン相對性と最近の原子論——（それはすでに起因果的なものと非直觀的なものに境を接する」——、それらがわれわれの思惟の所有に加へられることもやはり一つの類推の偶然としてみられ得るであらうか。さらに、物理學そのものも現にわれわれの物質界を揮發させてゐることが知られねばならない。かやうにして、近代的人間が不可避的に彼の精神的實在へ溯源し、その領域からあの安定——（が世界によつて拒まれるところの）——を期待することにはつひに何らの不思議も成立し得ないのである。

しかしながら、いまや西歐の精神は危機に臨み、もし依然としてわれわれが、われわれ自身の内的な美の幻影

と、より冷酷な眞理との比較において、後者よりも前者を選ぶならず、それだけますます危機が深化されるのである。すなはち、西歐人は、一つの、自己を燻らす濃い霧雲の內部に生活し、それが彼から彼の眞の容貌を蔽ふやうに定められてゐる。しかしながら、他の有色人種にとつてわれわれはいかに映じるであらうか。支那とインドはわれわれについてどのやうな意見を持ち、そして、黑人はわれわれに關して、いかに感じてゐるのであらうか。

私は一人のアメリカ・インド人を知つてゐる。彼はプエブロー人の酋長であるが、かつてわれわれが白人について親しく語り合つたとき彼はつぎのやうに云つた「われわれは白人を理解することができない。彼等はつねに何物かを意慾し、彼等はつねに活動的であり、彼等はつねに何物かを逃求する。果して彼等は何を追求してゐるのであらうか。われわれはそれについて知らず、彼等を理解することができない。彼等はあのやうに鋭い鼻と、あのやうに薄い殘忍な唇と、あのやうな顏面の線を持つてゐる。われわれの信ずるところによれば、すべて彼等は精神錯亂におちいつてゐるのである。」

おそらく私の友人が認めたものは、アリアン人的の肉食鳥、その飽くことなき捕食の慾望――（それによつてこの肉食鳥はそれ自身に何ら交渉のないすべての土地へ出張するのである）――、さらに、われわれの誇大妄想、それらの點に及んでゐたのであつた。この誇大妄想の一例として、われわれは、クリスト敎のみが唯一の眞理であり、白きクリストが唯一の救世主であるかのやうに自負してゐるのである。現にわれわれがわれわれの科學と技術によつて全東洋の相互接觸を達成し、われわれに對する納稅義務を彼等に課したのちに、さらにわれわれは支那へも宣敎師を派遣するにいたつたのである。神意を充たすために一夫多妻（ポリガミー）が根絶された結果として生じた憐れむべきアフリカのクリスト敎喜劇。あの、正に恐しき南洋諸島の受難史、そして、亞片商業の祝福。およそわれわれはいかなる理由からなほこれらの項目について說くことを欲しうるであらうか。

實に、ヨーロッパ人は彼自身の道德的な霧雲の彼岸においてかやうな樣相を示し、その限りにおいて、われわれの精神の發掘が先づ一種の開鑿の計畫を意味することは何等怪しむに足りないのである。ただフロイドのやうな一人の理想主義者のみが、この、かならずしも淸潔でない作業に一つの全きライフ・ワークを捧げ得たのであつた。その香氣を濁らせたのは彼ではなしに、むしろ、われわれすべての所爲なのであり、すなはち、われわれ

はきわめて清潔であり高き品位を持つもののやうにわれわれ自身に映るにもかかはらず、それは、全然なる無知と最も甚しい自欺から由來する幻影にほかならないのである。

かやうにして、われわれの心理學――われわれ自身の精神との相識――は、あらゆる點において、最も不快な終局、すなはち、われわれが知ることを希望しないすべてのものの領域において開始されるのである。

しかしながら、假にわれわれの精神がただ惡しきものと不用なるものからのみ成立してゐるならば、おそらく一人のノルマールな人間は、世界のいかなる力によつてもその内部に何らか魅惑的なあるものを見いだすやうには誘はれ得ないであらう。その結果、一方、神智學において單に悲しむべき知的皮相性を、そして、フロイディズムにおいて單にセンセーションの追求を認めうるにすぎないすべての人々は、また必然的にこれらの運動に對して一つの早急の恥づべき終局を豫言するのである。それにもかかはらず、彼等は一つの事實を看却してゐる。すなはち、「これらの運動の根柢には一つの熱情――精神の眩惑――が横はり、そして、それによつてこれらの表現形式が段階として確保されながら、やがて一層優秀なものによつて克服される時期を待望してゐるのである。」實に、根本的に解するならば、迷信背理とは同一のものであり、それらは、そこからさらに成熟した新しい形式が生みいだされるであらうエンブリオー的性質の過度的形式に他ならないのである。（次號完結）

ヰルヤム・モリス『地上樂園』の研究（三）
――詩聖誕生百年祭記念論文――

大槻憲二

ベラロフォンは王の覺え芽出たく、その宮廷にあつて内政に外戰に、幾多の殊勳を樹てたが、こゝに困つたことが起つた。それは女王シノービア Sthenoboea がベラロフォンに對して道ならぬ愛を持つやうになつたことであつた。大恩あるプリータス王の妃から思はぬ要求を受けてベラロフォンは全く困じ果てるが、折よく戰に行かねばならない事情になつて、彼女を避けることが出來たが、やがて芽出たく凱旋した時には、またその苦しい事情は彼を待ち受けてゐるのであつた。

ベラロフォンが冷淡な態度を示したので、王妃は復讐的にベラロフォンの事を王にあし樣に告げ、彼女に對して野心ある如く讒した。王は『自分の子のやうに思つてゐる』ベラロフォンにそのやうな不德の行ひあることを嘆いたが、信任してゐた彼を殺すに忍びず、王妃の郷里

廿一、アーゴスのベラロフォン

梗概――アーゴスの王プリータス Proetus は家臣と共に山野に獵し、林間で晝食を認めてゐると、そこへ騎馬の人が立現れて來た。彼は非常に疲れてゐるらしく、王の前で下馬し、身の不幸を物語つた。その話に依れば、彼はコリント王の皇子であるが、眠の内に仲のいゝ自分の兄ベラー Beller を殺すと夢み、恐怖のあまりそれを避けようとして林中に逃れ、却つて誤つて兄を殺した。運命の恐ろしさに彼はこゝまで遁れて來たと告白する。プリータス王はこの皇子を愍み、彼を慰め、寺院に伴ふて僧に乞ひ、贖罪の祈禱をして貰ふ。さうして爾來、名を改めてベラロフォン Bellerophon（ベラー殺しの意）と名乘ることゝなつた。

リシアなる王妃の父王の許へ、手紙（多分彼を殺してくれとの意を傳へた）を持たせて舟に乘せて遣した。

一方、王妃は自分のあらぬ讒言のために、自分の身邊から去つて了つたベラロフォンを戀ひ慕ふのあまり、遂に海に身を投じたのであつた。

典據——ベラロフォン傳説に就いては、フィッシャー H. A. Fischer が精細な研究論文（ベルリン、一八五一年）を書いてゐる。またロッシャーの神話辭典にも、勿論、出てゐる。

モリスのこの物語に出て來る部分は、ホーマーの『イリアッド』の VI 155—171 と、アポロドール Biblioth. II 3, 1 とに元は出てゐる。が、モリスは直接これ等の古文獻に溯つたわけではなさゝうだとの事。

プリータス王の妃は、ホーマーに於いてはアンタイア Anteia となつてゐるが、モリスに於てはシノービア（ステノボエア）となつてゐる。彼女はベラロフォンに、二度の機會（一度は妃の庭で偶然會つた時、今一度は自分の部屋に呼んで）に挑み求めるが、ベラロフォンは動かなかつた。彼女の讒言に因り、王はベラロフォンを殺さうと思ふが、ベラロフォンは自分の國土で既に罪を清められたものであるから、その國土内で血を流させることを欲しなかつた。ベラロフォンが去つてからは、彼女は戀慕の惱みに堪え得ず、腰紐で首を釣らうとするが、或る漁夫に見付けられて、海に投じて死んで了つた。

王妃シノービアの死に就いては、ホーマーもアポロドールも何事も語つてゐないが、ユーリピデスの文學中にはこの事が語られてゐる。これに依ると、王妃はベラロフォンがその武勳を樹てた後に、死んでしまつたと云つてゐる。

分析——この物語は分析的に見ると、部分的に興味がある。まづ主人公の前半生に於いて、その不吉の夢が實現して（本人にはその意志なきに拘らずと云ふ形式をとつて）兄を殺したと云ふことは、夢の公式的解釋を適用して、その抑壓せられ願望の無意識實現であると斷ずることが、當然許される。エディポス・コムプレクスに於ける父殺し衝動と同樣、兄弟殺し衝動のカイン・コムプレクスとも云ふべきものを人類の集合的無意識に想定することが分析學上必要であるだらうとさへ、私は考へてゐる。

この物語に於いて、私の興味を持つた第二の點は、主人公が王に伴はれて寺院に行き、白牛を犧牲とし、橄欖の枝を捧げて贖罪を行つた後に、その名をベラロフォン（兄殺し）と改めたことであつた。卽ち、自分自身に自分の罪名を附加することが一つの贖罪の方法となつてゐ

ると云ふことは、無意識心理現象として、興味あることゝ思はれる。

第三の興味ある點は、プリータス王夫妻とベラロフォンとの間に於けるエディポス的三角關係である。王はベラロフォンの事を常々『わが息子』と呼んでゐたに徴しても分る通り、少くとも夫妻は彼に對して息子コムプレクスを持つてゐた。ベラロフォンの方の王夫妻に對するエディポス的感情は、詩人の作に於いて明白でないが、王妃の彼に對するヨカスタ・コムプレクスは甚だ露骨であつた。換言すれば、彼女は彼を若き燕扱ひにしようとしたが、彼はそれを恐れて逃避した。併しこの場合に於けるエディポスは、少くとも詩人の表現に於いては、あまり判然してゐるわけではない。

廿二、ギイナスに與へた指論

梗概——とある海邊に建つてゐた大都市に、或る若者(その名をローレンス Laurence と云ふ)があつた。彼は或る少女と結婚することになつてゐたが、祭りの日に彼は一人、ギイナス女神の眞鍮像の立つてゐるところに行き、その異樣な美しさに見とれて何氣なく、結婚の指輪を女神の指に嵌めてそのまゝ祭りの方に來て了つた。

暫時して、また元のギイナスのところへ來て見るとその指輪は見えなくなつてゐた。彼は困りぬいて、自分の兩親には相談し得ず、花嫁の父親のところへ相談に行つた。父親は彼を、自分と同年輩の友なる僧侶ダン・パラムバスのところへ連れて行つて助力を乞ふた。パラムバスは二人に六日間の斷食祈願を命じ、七日目にこゝへ來い、さうすれば、指輪の行衛が知れるやうになるだらうと云ふ。七日經つて行つて見ると、パラムバスはローレンスに向つて『時は貴君よりも私の方に迫つてゐる。私は間もなく死ぬであらう』と云ひつゝ、『こゝから五哩ばかり行つたところに、船夫どもが聖クレメントの首と呼んでゐる砂の岬がある。そのあたりへ行つて、海の方は見ないで、砂と草原との相合ふあたりに眼を向けてゐると、そこを不思議な連中が通つて行く。最後に偉い王樣が不思議な獸に乘つて來る。その人を呼止めて、この手紙を渡しなさい。すると、王はその手紙を呼んで、貴君の求める幸福が與へられる。罪を得ることはない。その代り私の方がその手紙に依つて死ぬのだと云ふことを貴君は知つてゐて貰ひたい。私はそれを承知の上だ。さうして神に依つて地獄に陷れられる覺悟であることを告げてゐるのだ。』と。

ローレンスは老人の云ふ通りに實行したところ、果してある乙女の手にその搜し求めてゐる指輪が握られてゐ

るのを見た。がその時、老人から受けて來た卷物が帶から地に落ちたので、それを拾ひ上げて祈りを捧げてゐる内にその乙女の姿は見えなくなつて了つた。

やがて王らしい人が追付いて來たので、その人に手紙を渡すと、王は手紙を讀み、『俺に依賴の件は俺には出來る。こゝに待つてゐよ。やがてお前の品は足下に投げ戻されるであらう』と云つて去つた。

ローレンスは希望と不安との間に立ちすくんでゐると、やがて白雲が亡靈の常々歩く人氣なき道を、灰色の沼地を超えて、近付き來るやうに思はれた。と、その白雲の中から聲が聞えて——

『わが身に無用の恥を加へたお前。自分のものは勝手にとつて、さつさと行つて了へ。併しやがて來るべき日にお前の身の周りが悉く老いて了つた時に、こよなき大きな喜びの賜物を、お前はその愚かしい手から投げ棄てねばならぬと覺悟せよ。』と。

東の空が明るくなると、その聲は消えて了つた。と、彼の足許には搜してゐた結婚の指輪が落ちてゐた。

ローレンスが歸つて來ると、パラムバス老人は、大鐘がその日の眞晝を告げ知らさぬうちに安らかに眠つた。ローレンスは老人のために立派な墓を作つてやり、幾度も祈禱を捧げた。

典據と分析——この物語の典據はマームズベリのキルヤム William of Malmesbury で、彼の Gesta Regum Anglorum, Lib. p. 354—57 in Hardy's Edition (London, 18 0) に出て居る。同じ話はまた、Vincentius Bellovacensis, Spec. hist. III 26 にも出てゐると云ふ。モリスの物語は、主要な諸點に於いては、マームズベリのキルヤムのそれと殆ど符合してゐると云ふ。たゞ結婚の夜の出來事を、やゝ抑壓して書いてゐることゝ、パラムバスの恐ろしい死を精しく告げることを避けてゐる點のみである。

マームズベリのキルヤムに於いては、物語の主人公は四つ辻に立ち、何事を目擊しようと言葉を口にせず、遂に無言のまゝ手紙を渡さねばならないことになつてゐるが、モリスに於いては主人公ローレンスは淋しい岬へ行き、氣味の惡い人々の行列が前を通り過ぎても海の方を見ないで、最後の人に物云ひ掛けねばならないことになつてゐる。その點は違つてゐる。氣味の惡い人々の行列は、どうやらモリスのいつものやり方で、亡靈の群であるらしい。

この物語は、分析的解釋をこれに下すに容易でない。ギイナスはこれまでの諸々の物語に於いても惡母として表はれてゐたやうであるが、この場合も若者を誘惑し、

それが指輪の返戻を要求した時に、非常に機嫌を惡くすると云ふところに、そのヴムプ性を示してゐるやうに思はれる、パラムバスの死は如何樣に解釋すべきか。暫く明言を避けておかねばならない。

廿三、リシアに於けるベラロフォン

この物語は第廿一の『アーゴスのベラロフォン』の續編である。

梗概――ベラロフォンはリシアの國に着くと同時に、國王ジョーベーツ Jobates の城内へ、プリータス王からの書翰を手渡しするために、急ぎ赴いた。ジョーベーツ王はベラロフォンを歡迎するに急がしく、プリータス王からの手紙を七日ばかりの間開かずに、そのまゝにしてゐた。が、それを開いて見ると共に、王はベラロフォンの許に來つて、直ちにこの國を去るやうに……と云ひ捨てたまゝ急いで室を出て行つた。どうやらその理由を訊かれることを恐れるものゝ如く……。

然るにこゝにジョーベーツ王の城内には、プリータスの王妃シノービアの妹に當るフィロノーエ Philonoë と呼ぶ美しい姫がゐた。彼女はその姉に非常に似てゐるので、ベラロフォンが始めて彼女を見た時には、シノーピアがこゝまで來たかと思つたほどであつたが、更によく見ると、それは全く別人で、心は全く姉とは違つて優しく親切であつた。

ベラロフォンはこのフィロノーエからも、直ちにリシアの國を去るやうに、でないと危難が御身に振りかゝると告げられた。何故それが分るかと訊くと、彼女は自分の見た夢に依つてそれが判ると答へた。ベラロフォンは直ちにこの國を去らねばならぬと思つたが、併しフィロノーエの美しい姿と心とを思へば、去るに忍びなかつた。何とかこゝに留る術もがなと思ひ、ジョーベーツ王のところに相談に行かうとすると、折よくか折惡しくか、こゝにリシアの國にとつて一つの大きな國難がふり掛つてゐるのであつた。それは近隣の國ソリミ Solymi の暴慢を膺懲に出掛けたリシアの軍が敗れて歸つて來たことであつた。他に適材がないので、ジョーベーツ王は指令の大役を異國の勇士である、ベラロフォンに托するのであつた。ベラロフォンは直ちにその任を果して、無事歸國し、その勇名と人望は愈々高まるのであつた。

第二に襲つて來た國難は、女勇士どもにこの國が襲はれたことであつた。リシアの國民たちは、その國神ダイアナの祭禮に夢中になつてゐる時、この國に攻め寄せて來たのであつた。異國人であるベラロフォンのみは、そ

の祭禮に參加せず、野外に獵してゐて、この異變を逸早く知るのであつた。この恐ろしい女勇士の大軍を擊破した時には、前にソリミを平定した時より以上に、この國の人々はベラロフォンの凱旋を祝福した。

それから數ケ月は別に事なく過ぎたが、或る日、王城の門前に國內の田舍の人々が狂氣のやうになつて轉がり込んで來た。その訴へるところをよく訊いて見ると、それは恐ろしい獅頭、羊身、蛇尾の怪物が人々に危害を加へると云ふのであつた。彼等田舍の人々はやうやく身を以て遁れて來た、何とか直ちに、彼等の危難から國王の力を以て救つて貰ひたいと云ふのであつた。ベラロフォンは當時、ティリン Tyerhene の海賊を平定に出掛けてゐたが、歸來早々、またもや武勇を振つて、美事にこの怪物を退治した。ベラロフォンが怪物を退治して來て凱旋するとの報は、王を半ば喜ばせ、半ば失望させた。何となればコリントの勇士はこの怪物との戰ひに命を失ふであらうことを王は期待してゐたからである。さうしてこの大事に成功したならば、彼には無上の恩賞（フィロノーエ姬を與へること）を約束してあつたからである。

愈々結婚の日は近付いた。その慶びの日の前夜、姫は何となく不安を覺えて、眞夜中ながらミネルヴ神殿へと愛人のために出かけたのであつた。と、怪しい人々の影が神殿の中に忍び込むのを見屆け、姫は木蔭にかくれて様子を伺つてゐると、十人ばかりの者が密議を凝してゐるのを知つた。姫は聽耳を立てゝゐると、それはベラロフォン暗殺の相談であつた。姫は女の身をも忘れ、ひた走りに走つてベラロフォンの休む王城内の象牙の間に驅入り、一瞬の後にはベラロォフンに危害を加へようとする者たちが來るからとて甲冑に身を固めさせた。暗殺者の群は果して近付いた。ベラロフォンは待ち構へて、彼等の先登の者（それは近衛隊長で、同じく姫に思ひを寄せてゐる男であつた）を斬り倒したので、他の者等は氣勢をそがれて蜘蛛の子の如く四方に逃げ去つて了つた。やがて、王の危難の場合でなければ吹鳴らすことのないネプチウンの角笛は吹かれた。人々は王城内に集まつて來た。

やがて夜は明け、ベラロフォンは新王の装ひ凜々しく大廣間の王座の前に立つた。王の行衞は知れなかつた。間もなく、姫は新しい王妃の姿神々しく、ベラロフォンの前に現れて來た。續いてある奴隷が、ジョーベーツ王から托されたとて、一つの箱をベラロフォンの前に捧げた。手にとつて見ると、それは嘗て自分がプリータス王から托せられてジョーベーツ王の許へ屆けた文箱であつた。開いて内なる手紙を見ると、それはこの手紙の持参者を殺してくれと云ふ依賴狀であつた。卽ち、ジョーベーツ王がベラロフォンを數々の危難の地に赴かせたのは自ら手を下さずに彼を亡き者にしようとの魂膽であつたことが分つた。が、それ等の魂膽は悉く失敗に終つたので、王はそれを斷念し、姫を與へて彼を自分の後嗣に直さうとの新たな決心を示すものであることが分つた。

典據――典據に就いては、既に『アーゴスのベラロフォン』の場合に說いた故、こゝには繰返さぬ。たゞ、典據に於けるとモリスに於けると、材料の配置の相違してゐる點に就いては、一言を費しておく必要がある。

フィッシャーの典據に於いては、主人公がまづ怪物を殺し、それからソリミ人を征服し、次に女丈夫軍を平定したことになつてゐるが、モリスに於いては主人公はまづソリミ人を征服し、次に女軍を平げ、最後に怪物を退治することになつてゐる。怪物退治に際しては（モリスに於いては）、大低のかゝる場合には使用せられてゐる翼ある馬（ペガソス）が用ゐられてゐない。その點はホーマーの『イリアッド』第七章と一致してゐるが、フィッシャーと比較研究して見るとその相違が明かになる。

またモリスに於いては、ベラロフォンが怪物を退治する前に、退治に成功した者には姫と國王統治の權とを與へることを約束することになつてゐるが、典據に於いては、始めに同國人中から英雄を選び、何れも失敗したので、遂にベラロフォンを遣したところ、美事に退治して來たので、姫と王位とを與へたと云ふことになつてゐる。その點が違つてゐるが、王がプリータスからの依頼を遂行せんとする意圖があつたものとすれば、モリスのやり方の方が面白いやうに思はれる。

またモリスに於いて、ベラロフォンの成功と結婚とを以て物語りは終つてゐるが、典據に於いては、ベラロフォンがやがてニイベルンゲン物語の英雄ジイグフリイドのやうに、沒落することになつてゐるやうである。

分析——この筋書は丁度、我々に同じこの『地上樂園』中の『王となるべき運命の少年』を聯想させる。王(父)の位置にある者の惡意ある幾多の計畫に拘らず、英雄(子)はそれを遁れて(恐らくは運命の好意に依つて)遂に王の娘とその位置とを奪取すると云ふ點に於いて……。たゞ兩者が違つてゐる點と云ふのは、この方の王に於いては自發的な惡意がなく(隣國王の依囑により已むなくすると云ふ形になつてゐる)、また姫の愛が重要な役割を演じてゐる點(前の物語に於いては、王姫は最後に現れ、たゞ無意圖的に少年を助けるに過ぎない)にあるに過ぎない。併し分析的に見れば、かゝる相違はさして重大ではない。エディポス的願望空想の傳說に於ける顯現として、『桃太郎』、『辨慶と牛若』、『一寸法師』などゝみな同類のものと見なされ得るのである。

廿四、ヸイナスの山

梗概——この物語はタンホイザー傳說の詩化である。主人公はモリスの物語に於いては、ヲオルター Walter と名付けられてゐるが、その主人公が或る王(その名は詩中に擧げてないが、詩人はオットー三世を考へてゐたのであらう)の宮庭に來り、やがて主人公は或る谷間(洞窟)を通つてヸイナスの山に入る、そうしてそこで暫くの間、幸福と歡喜の生活を送つてゐる。遂に併し、彼は清淨ならぬ生活に良心の苛責を覺え、ヸイナス山を拔け出でゝロオマの大都へと出て來る。ロオマ法王に會つて、自分の罪を淨めて貰はうためである。法王はその罪死に當るべきほどのこのやうな大罪人を淨めてやることは出來ないと考へる。寧ろそれよりは、法王の杖が青葉を出し、花を咲かせるやうになるべきだと考へた。主人公は法王に見放されて、失望してヸイナスの山に歸り行く。併しその翌日、杖は青葉を出すのであつた。法王は

復活祭の勤行を終へ、休養のため庭園内を散歩してゐた。その時、彼はヲオルターの事を考へてゐた。と、杖は彼の手を離れた。彼はそれを再び手にとらうとすると、忽ちそこから青葉を出すのであつた。彼は神のこの奇蹟の前に、驚いて死んで了つた。併しその『死の顔には確に嘗て何人も見ないほどな喜びが現れてゐた』と人々は云つた。

典據――この傳説に就ては、グレーセ（Graesse, Der Tannhäuser und der wige Jude, Dresden 1861）と、ベアリング・グッド（Baring-Gould, Curious Myths 209 ff.）とが扱つてゐる。またこの傳説の神話學的解釋に就いては、ハウプトJ. Haupt（Berichte und Mitteilungen des Altertums-Vereins zu Wien X 315 ff.）が試みてゐる。

右の梗概に述べておいた諸點に於いては、大體その典籍と一致してゐるが、その變更してゐる諸點としては、典據の方では主人公が少女マリアの力を藉りてヰイナスの下から遁れ去ることになつてゐるが、モリスに於いては、このやうな少女は出て來ず、良心の苛責と恐怖とに堪え得なくなつた主人公がヰイナスの眠つてゐる間に、彼女の側から逃げ出すと云ふことになつてゐる。典據に於いては、主人公は何れの僧侶にも許されず、自分でロオマ法王の許へ行くことになつてゐるが、モリスに於いては、主人公がヰイナス山から出て來て、世人から排斥せられ、輕侮せられる。彼は自分が咒はれてゐると感ずる。その時、偶々、復活祭のためにロオマへ行く巡禮の群に會し、自分も法王に會つて纎悔をしようと出掛けて行く。

タンホイザーも法王の許しを得ず、空しくヰイナス山に戻つて行くが、その後三日目に法王の杖は芽を吹く。そこであちこちタンホイザーの行衞を尋ねるが、遂に行衞不明になつて了つたと云ふことになつてゐる。ヲオルターも山に戻つてその翌日に、法王の杖は青葉を出すがヲオルターの行衞を尋ねると云ふ事は別になく、たゞ神の奇蹟に驚きつゝも、その廣大な愛に喜んで死した法王の事が叙せられて、そこで詩は終つてゐる。

分析――この物語はエディポス罪惡感とその消滅との實に巧みなる象徴的表現であることは、疑ふまでもない。ヰイナスは、これまでの數々の物語にも出て來たやうに、常に惡母であり、ヴムプ母性である。『谷間（洞窟）』を通つてヰイナス山に入ると云ふ表現は、丁度峽谷を通じて桃源に入ると云ふ東洋の表現と共に、明かに胎内復歸としてのエディポス空想を意味してゐる。エディポス願望の充足が最大の罪惡として人々の指彈すると

ころとなるが、さうして法王さへもこれを許容し得なかつたが、神のみはこれを許容し、枯杖に青葉と花とを生ぜしめたと云ふことは、これまた一つの象徵的表現であらう。が、それが何の象徵であるかは、只今明言することを避けておきたい。たゞ愛・卽・死の詩人が、主人公のギイナス山への復歸を愛・卽・死との一顯現と見なしたとすれば、枝杖の發芽を『復活祭』の翌日の出來事としたことに、重大な意味を認めることには何人も異議のないことであらうと信ずる。

×

以上で、モリスの廿四篇の物語は終つてゐる。最後に『結辭』と『送本の辭』とを附して、この一大詩篇は完結してゐる。以上の各傳説と、分析解釋とを見たゞけでも分るやうに、各々の物語は殆ど總てみな明かに『死』を主題としたもので、モリスは現に、『結辭』の中で

"Since each tale's ending needs must be the same:
And we men call it Death.........."

と云つてゐる。さうして『送本の辭』の中では、流石に作者としてこの大作の運命に就いて案ずる心を披露し、且つ彼がその師表として仰いだ、さうしてその『カンタベリ物語』に倣つて『地上樂園』を作つた『心と舌と共に偉大な』ヂオフリ・チョウサア Geoffrey Chaucer に向つて思慕と感謝とを捧げてゐる。

×

以上の研究は誠に不行屆な點も多々あり、分析も非常に簡單であるが、何しろこれだけの大作を早々の間に、僅々百數十枚の紙面に紹介することは固より困難である。併し何事にせよ、始めから完全を期することは無理である。これだけの土臺を築き上げておいたゞけでも、私又は後學の將來の研究のためには、少なからぬ助けとなるであらうと信じ、僅かに自ら慰むるものである。他日、各作に就いて、徐々に細かい研究と考察とを續けて行きたいと希望してゐる。(完)

一、六九頁の挿畫はバーンジョーンズ筆、モリス刻であることは、先號の挿畫と同じであるが、果して「地上樂園」の「ベラロフォン」の挿畫であるかどうか未だ確實でない。多分さうであらうと思ふ。

一、モリス誕生百年祭文獻繪畫展覽會は日本橋丸善で、四月二十四日から五月三日まで開催。

一、同展覽會目錄「モリス書誌」御希望の方には當研究所にてお取次します。(四十四錢)

時評

時言三題

大槻憲二

一、日本人の超自我

先頃、東京朝日新聞に福田市平氏が、矢吹慶輝氏の監修した『外人の觀たる日本國民性』と題する書物を批評した文中に、次のやうに云つてゐる一節を見出して、我々文化に關與するものはこれに就いて深く反省しなければならない責めを感じた。卽ち曰く『痛いと思はれるのは、この書物に盛られた多くの意見が、日本の世界文明に對する文化的貢獻の貧弱さを難じてゐる點で、これは將來に解決せらるべき宿題であらう』と。

日本文化は勿論、多くの日本主義者が主張するやうに特殊の價値を具へたものではあらう。併し、日本獨自の文化が、世界文化の上にどれだけ貢獻したか、また貢獻し得るかと云ふことを公平に考へて見ると、我々はあまり樂觀してはゐられないと云ふ方が、正直なところであらうと思ふ。私は勿論、日本文化（又は東洋文化）には西洋文化に缺けた長所の有することを認める點に於いて、敢へて人後に落ちない。併しそれ等が比較的鄕土的であつて、世界的でないと、少くとも世界的たらしめようとの努力を缺いでゐたと云ふことは何人も認めなければならないと思ふ。西洋文化はそれに反し、その特色と價値とは何れにもせよ、とにかく常に世界的であつたし、またあらうと努めて來たと云ふことだけは認めねばならないと思ふ。彼等の學問は、常に時空を超えて妥當することを重要な目安においたが、日本又は東洋の文化は當座の用に足ることを目的とした。その意味に於いて、東洋の文化は實用的（プラグマチッシュ）であり、西洋文化は常に理論的である。宗教を比べて見ても、この相違は明瞭であると思ふ。日本の宗教は常に政治と同等又はその下位に立つたが、西洋の宗教は政治の上に立たうとし、また一時は完全に上位に立つてゐた。ローマ法王の前には、皇帝もまた頭を下げねばならなかつた。このやうな事情は、東洋人の全く見知らぬところである。

西洋の宗教精神はゴシック建築に、又はバベルの塔に象徴せられて、常に天上に昇ることを念願とした。東洋の宗教は、寺院の建築（殊に富士の裾野のやうに弧線を描くその屋根）に象徴せられて、地上に安泰たることを念願とした。米國の日本神道研究家メイソン氏は、神道

の精神は『產び』の一語に盡くると云つたさうである。もしこの見解が正しいとすれば、日本の文化は生產、創造、本能力の文化であり、西洋文化は、理性、良心（分析的に云へば、昇華力）の文化であると云ふことが出來る。一は天上の文化であり、他は地上の文化である。昇天すれば、世界を一視同仁することが出來るが、地上にあつてはそれが出來ない。西洋文化が世界的であり（カントの言葉を用ふれば）普遍妥當的であるのは當然であると思ふ。

昇華力の文化であるところの西洋文明の下には反面に於いて神經症患者が比較的多く、本能力の文化であるところの東洋文明の下に、超自我の低い人間の多いことはこれまた已むを得ぬと思ふ。私は平生、日本人の文化關係者——筆者自身をもその內の一人として——を觀察して、つくぐ〵その超自我の低調であることを、痛感してゐる。

頃日、私は外濠電車に乘り、お茶の水附近を通過するとき、美はしい蒼空に高くニコライ會堂の金色の十字架の春日の光に燦々と輝く有樣を打仰いで、何と云ふ壯麗な、高らかな、超自我の象徵であらうと、無限の感慨に打たれたことであつた。併しあんな十字架は、要するに飾り物だ、あゝ云ふ超自我は結局、人間の空想である、不可能を意圖する人類的コムプレクスである、現にどれほどの實績が擧つてゐるかと、云つて了へばそれまでゞある。併し文明批評は擧足とりに終始してはならない。我々は如何なる失敗の結果を招いた理想をも、理想を立てたことそれ自身として評價したいと思ふ。況んや、その結果が、全部的に失敗と云つて了ふことを、我々の公平な心が許さゞる場合に於いてをや、

マルクシズムの國際主義の中にも、私は一種の超自我の變形——それは誠に歪められた形をとつてはゐるが——を認めねばならないと思ふ。私は思想家としてマルクシズムには終始反對の立場をとつて來た。それはその超自我が歪められた形をとつてゐる點を非難したのだ。別言すれば、一方に國際主義をとつてをりながら、他方に階級主義をとつたことだ。この矛盾から、マルクシズムは破船することを、私は早く直觀してゐたからだ。超自我は階級主義のレールの上を御都合よく走る汽車のやうなものではない。それは白雲の如く天の一角に起つたらどこまで擴がるか分つたものではないのだ。

併しマルクシズムに失望した日本文化人は、その階級主義を放棄すると同時に、その國際主義をも、並せ放棄して了つたやうだ。私は日本主義、國家主義には始めから贊成してゐた。今日も、私は或る意味では國家主義者

であり、日本主義者である。併しそれと同時に、私は國際主義に看機するものである。これ等兩者は、固より屢々矛盾するだらう。その矛盾の惱みを惱むことこそ、文化人の任務であり、權利ではないか。かゝる矛盾の惱みを知らざるところに、日本文化人の超自我の低調を感ずる。かゝる低調なる超自我の所有者に、世界文化に寄與し得べき何の事業が完成され得ようぞ。吾人ともに、猛省すべきことでなければならない。

二、官學と私學

『國家の經營する大學の教授たるものは、國家の官吏であることは勿論だ。その官吏が國家の意志に反する言論の自由を主張するなどは、誠に噴飯事ではないか。……一人前の頭のあるものならば、先づ大學を自らおん出てから、自由の言論をなすべし』云々と、筆者はかつて本誌第一卷第二號の後記欄に書いたことがある。あの時は無署名であつたが、あの文の筆者は私であることを、只今公言しておかう。當時、京大問題が天下を騷がせてゐたので、私の言も京大問題を暗示するものゝ如く解した人々もゐたやうだが、筆者はたゞ一般的に、國家と大學との關係を論じたに過ぎない。私は京大問題の細々した特殊相を研究するほどの興味を當時も持たなかつたし、今日も持たない。たゞ、當時も今も、國家の經營する大學の教授が、言論や研究——況んや國體と調和せぬやうな社會思想や學問の研究の——自由を主張することは滑稽であると信じてゐることに變りはない。

國家の經營する大學の教授どころか、私學の教授と雖も、否、民間布衣の學徒と雖も、國家の一員である以上は、言論と研究の完全な自由など、固よりあり得べきものでないと云ふことを、私はよく承知してゐる。只、自由の量に比較的の差違があるだけだ。

併し學問の理想から云へば、完全な自由の下に言論と研究とがなさるべきものであることは勿論である。その意味に於いて、私は京大教授連に同情はした。併し一方官吏としての職業的地位に執着しながら、他方學問の自由を要求することは、結婚しながら色道の豐富にして自由なる鑑賞を主張する我儘御亭主のやうな滑稽を、彼等の態度に認めたことは、今なほ私の正當な感覺であつたと、確信してゐる。

結論へと急がう。研學と言論の完全な自由を要求するものは、殉教者の覺悟を必要とするものだ。死を以てするの覺悟ないものは、まづそのやうな虛榮的言論研學自由論などは、振廻さぬ方が、みつともよろしい。官吏は完全に自己の超分析的術語を以て換言すれば、官吏は完全に自己の超

自我を生かすことが許されないのだ。國家の許す範圍外に、超自我を擴大することは許されないのだ。その意味に於いて、官學は健全なる學問の培養地ではない。私學もしくは民間學徒の間にこそ、この培養はより多く期待される。併し、人間と云ふもの（民衆）は、概して幼兒的であるから、正しく事實を認識する能力を持たない。彼等は常に必ずコムプレクスに依つて、象徴的に事象を認識する。官學は常に父コムプレクスの轉嫁對象であるが故に、そこに學問の最高の府があると思つてゐる。

と云つて、私は必ずしも官學を頭から否認するものではない。官學には超自我の擴大と自由とは極度に制限されてはゐるが、その他の條件、例へば研究費、生活の保證などは、殆ど完全に近いまでに、供せられてゐる。官學派の人々の個人生活と私學派の人々のそれとを比較して見ると、後者が如何にも慘めで、哀れであるかを、常々私はしみ／″＼と感ぜしめられる。私學派の人々は、超自我の自由なる擴大の機會は比較的多く與へられてはゐるのだが、その機會を利用し得べく、あまりに研學の資に乏しく、その生活は不安である。況んや、元來、超自我の持合せなど殆どなき場合の多きに於てをや。結局、その日その日の生活に追はれて、研學そのことさへあやふやになり、ブック・メーキングと雜文稼ぎに急がしいだけで、仕事は何も纒まらず、却つて乙に納まつてゐる官學派の人々に威張られてゐると云ふのが、現實上の結果となつてゐる始末である。

精神分析のやうな、自由な學問は、熾烈なる超自我を以て頑强なる抵抗を打破しなければ成立しない。斯學は恐らく官學の畑では根を下すまい。否、下させまい。その意味に於いて、官學派の人々が、この學問を白眼視してゐるのは、ある意味で、自分の地位を守る上から利巧であるのだ。この學問を官學の畑に入れる人があるとすれば、それは勇氣があるか、或は冒險家であるか、何れかだ。入れたとしても、なるべく技術的なこと（神經病患者の治療の如き）だけに跼蹐してゐる方が安全だらう。それから逸脱しては職業的地位が危險であらう。

官學の畑には結局、技術的學問が、最も適當してゐるのだ。理論的（超自我を必要とする）學問は適當しない。官學派の哲學など、考へて見たゞけでも滑稽ではないか。官學派の社會學や心理學、これ亦然り。日本各地の帝國大學發生以來、その哲學科諸教授の社會的功績――紹介的功績はともかく――は、一石丸梧平に遠く及ばぬと云ふ人があつたとしても、反駁しやうがないのではなからうか。

三、安藤君の新作

本誌寄稿家安藤一郎君が『門』と云ふ雜誌に『ピリォド』と題する小說を寄せてゐる。いさゝか分析的見地を意識したものらしく見受けられる點がある。

主題は身分ある家の靑年が、勤め先の年長の女タイピストと三年間の共同生活を營んで後、別れるために、始めにこのローマンスの書き出しに舞臺面をとつた伊豆方面へと、書き終りの『ピリォド』を打ちに行く、その間の心理を描いたものである。

安藤君に文藝鑑賞のための細緻な感覺のあることは、旣に本誌二月號に英國女流心理派作家の硏究論を試みられた時に、我々は承認したことであつた。今日の創作に於いても、その鑑賞能力は再び發揮せられて、主人公は源實朝の和歌その他を、しみ〴〵と嚙みしめ味つてゐる。併し只今、我々の關心はこの作品の鑑賞又は作者の鑑賞能力の詮議にはない。心理分析的硏究の對象として見ようとするに過ぎない。

主人公たる若い二人の戀愛關係が、母コムプレクスに始まりこれに破綻してゐるものであるけれども、更にもつと現實的なものも含まれてゐる。主人公は、女を一時の具に供して、別れることに別に良心の惱みを覺えてゐないらしいことを、讀者はいさゝか不思議に思ふかも知れぬが、それはその人の超自我の問題でもあらう。この二人の間の心理的關係を始めから終りまで、も少し徹底的に分析し、反省し、批判せられたら、どうであつたらうか。この程度では、讀者はたゞ男主人公のエゴィズムを見せられるに留まつてゐると思ふ。その他、三年前のロマンスの書き出しの舞臺面とは反對のコースをとつて『思ひ出を拾つて行く』心理過程などにも、たゞ『センチメンタル』だけで片付けないで、も少し科學的な見方が施されてもよかつたのではなからうか。この作の題に『ピリォド』と云ふやうな象徵的な名を選んだ君にして、この逆行路遍歷の象徵的意義に興味と理解とを持たないのは不思議である。同君の次作に大いに期待するものである。(完)

分析畫と名付けられたので

小山良修

大槻さん、とうとう負けましたよ。私は醫者としては正當な敎育をうけて來て、どこかに自負心があつたので

す。そしてその自負心は精神分析の道を邪道であると考へさせてゐましたのですが、表面には如何にも面白さうに、又、敬服してゐるような顔をして調子を合せてゐました。なんと子供らしいではありませんか。そして内心はなんとかしてこの精神分析のまことしやかさを裏切つてやらうとして、ひそかに狙つてゐましたよ。精神分析はどうも字の通り分析だけであつて、徒らに、コセ〳〵と現象を分類整理するだけで、所謂藝術的創作をさせて呉れないのではないかと先、思つてゐました。そして何も彼も皆、氷結させてしまふだけで、ゆとりも味もない世の中を造らうとしてゐるのではないかとすら思つて益々不滿でゐました。こんな事から正直な所、誠に、はづかしいのですが精神分析全集すらまだ通讀してゐないのです。（買つてはありますが――。）

　さて今度、大槻さんが先月號で私の作品を分析されてその結果がいかにも圖星をさしてゐるのを讀んでからは最初に述べましたやうに負けた！　と思つてしまつたのです。先づ、分析したその事にすでに感心した上に、何かはつきりは云ひ表はせぬ希望が出て來たので、決して心を氷結萎縮させるのではないと云ふ事をもわかつて、いよいよ、私もこれから勉强せねばならぬと思つて來た次第です。

　そんなわけでここで私の作品（水彩展出品作）をちよつと説明したくなつたのです。しかしもう一つ正直な所を申しますと、今度の發表の前には胸騒ぎがする程勇んでゐたのでしたが、いざ搬入ときめてからは非常に不安と心細さで會場で人々に會ふのが恐ろしい様な氣がして來たと云ふ次第で、結局は甚だ落着かぬ發表でした。さていよ〳〵（それ程大げさでもないのですが）開けて見ると、むしろ意外にも（あまりにも自らを高く買つて期待してゐたのでせう）友達以外は誰も話題に上せてくれず、美術雜誌でも同様全く默殺ですから、少々くさりました。その際に大槻さんの批評が現はれたばかりでなくうまうまと解剖し圖星をさゝれてゐたのには、負けました。（うれしかつたです。）

　特に『行路』を、死の幻覺と判斷？　されたには敬服しました。しかし、少々負け惜しみの様ですが、あれを描く最初の動機は實に不思議ながら何も概念がなく、唯だ繪畫の形式だけの探究から、どうもありきたりのタッチでは繪が面白くないから、一つとげ〳〵した繪を描いてみたい、思ひ切つて目をつぶり、ぶつつけにどんな形になるか、構はずやつて見ろと亂暴に紙へ書きなぐつたのです。そして見てゐるうちに形が面白くなり、色調も整理されして、何となく意味ありげになつて行くのを我な

がら樂しみつゝ描き續けたのです。しかしそれが何とな
し、自分の希望を表はす樣な、又運命の示しの樣な妙な
氣がして、益々愛着して熱心にやつて見ました。

さて展覽會もすみ、作品も出し、室の隅へしまつて忘れかけた頃、知人から偶然に其人の俳句集を賚つて、亦偶然何の氣なしに頁を操つてゐた所、一つの詩が散文中に引用してあつたので、讀んで見たら驚きました。それは荻原井泉水氏の古い詩でしだが、あまりにも私の『行路』と同じ景色ではありませんか。實に偶然とは申せ、既に二十年も前に、人が詩歌に表はしてゐたのではないか、俺は何んて陳腐な事を大きい顏してやつたのだらう。それにしても無意識界は皆共通なものかと考へて來たら少々恐ろしくなりました。

井泉水氏の月光の詩――。

明るい月夜である
私の歩いて行く此路の
先きの先までも
見え透くやうに澄んでゐる
道ははるかに〳〵に
だんだんと細くなつて
そこに砂丘がある
淋しい墓がある
其後ろには
際限もない廣い海が
ばさりばさりと動くばかり
そこで道は盡きてゐるらしく見える
いな、そこに一艘の小舟が
私を永遠の國へ
渡さうとして
靜かに待つてゐるに違ひない
ともかくも
紛れない一本の道である
私はひとり明るい月の光を
信じて歩いて行かう。

友達もそつくりだねと申しました。

『更生』は全く現實の經驗からのものです。病院であらゆる手を盡したが終に他界したひとりの幼兒の死をまざ〳〵と眺めてゐるうちに、構成しました。『波彩』及び『意想』は私の情熱の或るポーズの抽象化でしたが、どうも變なものになつて、ベックリンの繪の樣なグロ味があると言はれたり、檢閲の折、注意をうけたりした程でどうも我ながら苦笑もので詳しい說明は御勘辨下さい、この手はやめます。

『思母』については先月號に挿繪になり、えらい「役行

者の舞臺面を聯想して葳き恐縮ですが、最初手前右下に三人の童顔を描き、これを中心にして周圍を勝手な首やポーズをスケッチブックからより出して附け加へてゐる中に、ボツンと一ツの顏がいやに懷かしいセンチな氣持ちにして呉れましたので、いきなり圓をつけたと云ふ樣な誠に亂暴なかき方のものです。思母と云ふ事柄については實はもつと〳〵先になつて又、御世話になりませう。それまで勉强させて下さい。

『寂在』は名前ばかりはとりすましてゐますが、たゞ書面の美しさのみを狙つた、全くそれだけなものなのです。たゞ『寂在』にしろ『更生』にしろ、私のこの種のもの未發表のものも二、(三あり)に時々湖水の樣な水面がつきまとうてゐるのはこれは分析物と思つてゐます。私自身が申しますより、受身の方がたのしみです。

猶、私の繪に分析畫と銘うたれたのに、勿論、文句がありませんし、所謂、洋畫批評家もまだ手をつけてゐないだけに敬遠される理由には、もつてこいで無理もありませんが、何か新しい繪の世界が開けさうなレッテルになれば面白いと思つてゐます。(完)

――(九四頁から續く)――

つて、今思ひ出して見ても其の時の氣分はかうして走る方が簡單でとりつき易かつたと言ふ感じがして居る。

家に歸つて入るなり「皆逃げて歸つたから私も歸つて來た」と言つた。母と姉とが臺所に居た。母は叱つた。其の時潮の如く胸に湧いて來たのは、皆が先生に敎へられて居るのに自分一人別物にされてかうして家に居るのだ、どうしたら學校に行けるだらうか、自分はもうこれで學校へは入れて呉れないのだらうかと言ふ不安であつた……。

此處迄判然と記憶して居るが、其後は不思議な程記憶にない。母に連れられて行つたか、今度は姉に連れられて行つたのかそれもはつきりしてゐない。勿論、二回目に行つた學校の樣子や先生の事など全然記憶して居ない。この記憶忘却も精神分析のよく說明し得る所であらう。(完)

資料

ドストイェフスキーの惱みの手紙

岩倉具榮譯

ドストイェフスキーの初期の手紙の一つが、最近ロシアで公刊された。それを見ると、彼の文學的活動の最初の數年間に於る彼の精神狀態がまざ〳〵と分る。

一八四五年の春（彼が廿四歳の時）に完成され、一八四六年の一月、ネクラーソフの『ペテルブルグスキー・スボルニク』に公表された彼の『貧しき人々』を以て、ドストイェフスキイは、忽然として、文學的に有名となつた。『貧しき人々』の原稿が、彼の友達によつて、一流の批評家ベリンスキーに渡されたのであつたが、ベリンスキーは大いにそれに熱中して、新しい天才が、ロシア文學に現はれたと宣言し、そしてドストイェフスキーの輝ける未來を豫言した。ベリンスキーはまた、一八四六年に、『オテチェストヴエニヤ・ザピスキー』に、ドストイェフスキーを褒めたゝへた一論文を發表した。

彼は初めがうまく行つたので調子に乘り、又、元來極端になり勝ちの性向であるところから、ドストイェフスキーは自分自身を非常に高く評價し、あまり自信を示し過ぎたために、彼の當時の賞讃者たちもこれには少々あてられ反撥を感ぜずにはゐられなかつた樣に思はれる。彼の『二重人格者』（一八四六年）、『九つの手紙の小說』（一八四七年）、『女地主』（一八四七年）、それから一八四八年の評論に發表された一組の短篇は、もはや、『貧しき人々』ほどの熱狂を呼起さなかつた。反對に批評家達はドストイェフスキーに敵意を持つ樣になり、彼等の豫言は基礎が薄弱であつたと宣言した。ドストイェフスキーは、感情を害し、いらいらした。彼は論爭し、討論し、喧嘩した。彼の當時の賞讃者ベリンスキーまでが彼の反對側となつたので、忽ちドスイトェフスキーは孤獨となり、ペテルスブルグの文壇から見離されることになつた。

如何に痛ましい時を彼がその頃耐へ忍んでゐたかは、詩人にしてドストイェフスキーの生涯の友たりしアポロン・マイコフの母、E・P・マイコフ夫人に宛てた彼の手紙によつて知り得るのである。ゴンチャロフやドローヴィニンを始め、ペテルスブルグの文學者仲間が、いつも日曜日毎に集まることにしてゐたのは、彼女自身作家であつたマイコフ夫人の家に於いてであつた。ドストイェフスキーも亦、之等の場合に、絶えず訪問した人々の一人であつた。こゝに公表された手紙

から、吾々は、その家に於ける之等の集合の一つで、熱烈な論爭が起つたことを察知し得るが、併し乍ら、どんな性質の論爭であつたかについては正確には分らないのである。

セント・ペテルスブルグ、五月十四日、一八四七年

親愛なるユウヂニア・ペトロヴナ、

私は急いで、あなたにお詫びします。私は昨日、あなたに、不作法にもさよならも云はないで、怒りにまかせて貴家を出て行つた事を覺えて居ます。そして、あなたが、私を大きな聲で呼ばれた後でやつとその事を思ひ付いたのでした。さぞ、あなたは私の事を、無作法な（私もさう思ふのですが）粗野な、をかしな人間だと考へてゐられるに違ひないと思つてゐます。私は本能的に逃げ去つたのです。何しろ極端な場合には、どうしても大袈裟に爆發し、或ひは、激發せられる様になつて了ふ私の性質の弱點を知りぬいてゐるからです。どうか私を了解して下さい。私の神經狀態が弱い爲に、曖昧な問題を我慢したり、それに答へたりすることは、さうして熱狂に入らないでゐることは、私に取つて困難なのです。それもたゞ問題が曖昧であるからと云ふだけで困難になるのです。――問題を正し我慢の出來る様にする工夫が出來ないために專ら私自身に對して向ける熱狂です。そして結局、（私は白狀しますが）昨日の様な場合には、私が彼等に向つて振舞つたと丁度同じ偏狹さで私に向つて振舞ふ人々を私の前に見る時には冷靜を保つことが私に取つては六づかしいのです。

果然、騷ぎが起りました。双方から、故意的な、子供らしい大袈裟な騷ぎが、とび出し始めました。そして私は、之等の騷ぎが、なほもつと大きくなつては困ると思つて、本能的に逃出して了つたのです。

そんなわけですから、私の弱點を十分に承知して下さい！　私は、單純に、そして全く謙遜に、お詫びのペンを取上げてゐるのです。だのに、それにも拘らず、私は全く、私のあなたに對する態度は無作法で、失禮で、怒られても仕方のないものであつたことを、承知して居ます。どうぞあなたの御寛恕とお許しとをお願ひいたします。あなは私が辯解を押附けがましく云ふと感じて居られるに違ひないことが私にも分ります。私はあなたの御意見を大變尊重してゐるのです。だから私はそれを失ふことを非常に恐れるのです。多分この手紙は餘計なことで、恐らく、私はいつもの様に誇張してゐるでせうが、あなたは最初の瞬間から私を許し、又私をおとがめにはなつてゐられないのでせう。けれども私はあなたに對す

る過度の恐怖と、臆病とのために（かういふのをお許し願ひたい）いつもあなたに對して感じてゐる子供の様な尊敬の全部をあなたに示しておかうとするのです。

あなたに對する全き獻身を以て、

F. ドストイエフスキー。

一八四九年、四月廿三日に、ドストイエフスキーは、彼がペトラシェフスキーの革命團體と關係した爲に逮捕され、そしてペトロパウフスク要塞に投獄された。彼は死刑の宣告を受けたが一八四九年、十二月十九日に死一等を減ぜられ、シベリアに於る四年間の困難な勞働に服せしめられることゝなり、その時から、彼は凡ての自分權を奪はれ、彼は一私人として兵役に服せしめられた。ドストイエフスキーは、一八五四年二月十五日迄、刑務所で服役した（それは、彼が『死の家の記錄』に記述してゐる。）その後、彼は、セミパラチンスクに駐在したシベリア線の第七大隊に、一平卒として兵役に服した。之等の年月の間に、彼は彼の『死の家の記錄』、『小英雄』、『叔父の夢』及び『ステパンチコボ村』を書いた。一八五九年に、ウラングル男爵とその他の有力な友人の助力のおかげで、ドストイエフスキーは、始めて中央ロシアに歸ることを許され、そして彼は、ドヴェリに落着いた。その年の終りに、彼は、兩首都の何れにでも住むことを許され、從つてペテルスブルグに移つた。間もなくドストイエフスキーは、文壇に於て著名なる位置を占めた。彼は、『死の家の記錄』『虐げられし人々を』公表し、そして一八六一年に彼はその兄弟ミカエルと一緒に彼等の評論『ヴレミア』誌の公刊を始めた。

この頃ドストイエフスキーはヨーロッパ文化の「源泉」にもつと親しく接したいといふ彼の永い間懷いた夢を滿足するために、西ヨーロッパの「聖地」を見に行かうと考へ始めた。次の手紙を見ると彼のこの希望が非常に明白に見えてゐる。

Y・P・ポロンスキー

セント・ペテルスブルグ、七月卅一日、一八六一年、

如何がお暮しですか。そして特に御健康は如何ですか。書いておいでゞすか。私はあなたの手紙をすつかり拜見しましたが、あなたは御自分の事はあまり書かれませんね。時に、何時お歸りですか、そして、オーストリアで、ずつとお過しになるんですか。イタリーは丁度あなたには眼と鼻とのところにあるぢやありませんか。あなたはイタリーを見たくなりませんか。なんとあなたは幸福な人でせう！　どんなに何遍か、私は子供の時からイタリーを見ることを夢みたことでせう。私がラドクリフ夫人の小説を讀んだ八つの時から、凡ゆるイタリー的なものが私の心に刻みつけられました。そしてドン・ペドロス

とドンナ・クララとについては、私は今日に至る迄も夢みつゞけてゐます。それからシェイクスピアの中にヴェロナだとかロミオだとかジュリエットだとかゞ出て來ますね。——あゝ何と魅惑的なんでせう！ イタリーへ！ イタリーへ！ けれどもイタリーの代りに〔數語缺如〕：：：私はセミパラチンスクへ〔シベリアへ〕そしてそれより前に死人の家へ到達しようと工夫しました。實際、私はヨーロッパを見ないで了ふのでせうか。私がなほ自分の中に力と情熱と詩を殘してゐる只今に於いて：：：？ 私はこれから十年間、リウマチと戰ひつゝわが老骨を温く保ち、又わが禿頭を眞晝の太陽の熱に焦がして居なければならないわけでせうか。私は何も見ないで死ぬのでせうか。（完）

隱語の形態と其の分類

小野田幸雄

夢に於て無意識願望が現實に許され得る顯在內容にまで變轉せしめられるのは變裝に依て鋭い檢閲の眼をくらますことに依つてゞあると同樣に、犯罪者等が隱微の間に首尾よく目的を達せんが爲には彼等の合言葉、卽ち隱語を用ひて第三者の警戒の眼を潛らねばならぬ。一は無意識的變裝、他は意識的變裝ではあるが、然し意識的變裝といへども猶其の奧には斯く變裝せしめた動機として無意識心理が潜んでゐることは勿論である。で、此等隱語が如何なる變裝機制をとつてゐるかを一應調べて見るも亦無意義ではあるまいとの考へから敢て此の一篇を草する所以である。もつとも、隱語と云ふも必ずしも犯罪者のみのものとは限らず、遊び人には遊び人の隱語、テキ屋にはテキ屋の隱語、ルンペンにはルンペンの隱語、學生には學生の隱語、有閑マダムには有閑マダムの隱語等がそれぞれ有らうし、又土地に依り風俗に依り異りもしやうが、此處には犯罪隱語辭典等に揭げらしれた、主として關東地方に於ける犯罪隱語の代表的なもののみを分類してみる事とする。

一、比喩に依るもの

隱語の大判は此の形式に依るものであり、特に性的事象への比喩、動物への比喩等が多い。

1. 性的事象への比喩

此の中の或るものは已に本誌第二卷第五號アプフウブ欄に「家と女」の題目の下に川上氏が書かれてゐるので、此處には重複せぬもののみを揭げる。

一、「合鍵を合はす」 男女交合最中の事。
一、「新鉢」 未だ盜難の被害のない家又は土藏。處女の意にも用ふ。
一、「安產」 容易に彼れ易く、忍入るに好都合の土藏。
一、「躄の睪丸」 人ずれのしてゐる事、又はすれつからしの事。躄の睪丸は地上に擦れてゐると云ふ事から由來する。
一、「色白娘」 白壁土藏。（娘師隱語は總て性的象徵に滿ち滿ちてゐる。）
一、「薄化粧」 初冬の霜除り景色。その反對に雪景色は「厚化粧」
一、「緣付ける」 贓品をうまく處分する事。
一、「帶した娘」 土藏の周圍の壁に盜難豫防の裾張りをしたもの。
一、「口說く」 土藏を破る事。
一、「腰卷」 土藏の下部周圍。
一、「小町娘」 錠前を固く下し、周圍を嚴重にし、容易に破る事の出來ぬ土藏。
一、「里の花嫁」 掏摸常習者、詐欺師仲間の隱語。ぽうツとして世事に疎い引掛け易い田舍者。
一、「島田娘」 財產豐富な土藏。
一、「舅」 番犬。犯人にとつては苦手であるから。

一、「十七娘」 貴重品や財寶を多く收めてある土藏。
一、「自由廢業」 刑務所より逃亡する事。
一、「死んだ娘」 鎖鑰の裝置のない土藏、又は內容貧弱な土藏。
一、「持參金」 番犬（舅）に吠え騷がれぬ樣、盜人の用意する餌。
一、「隧道に這入る」 青樓に登り娼妓を相手に遊興に耽る事。（體內空想象徵）
一、「孕み」 品物の多い土藏。
一、「美人」 金貨。
一、「文庫の姉」 比較的規模の大きい土藏。
一、「丸髷」 門戶の鎖錠のない忍び入り易い家又は土藏の事。生娘に對し、丸髷は人妻を意味し既に處女を失つてゐる事より由來す。
一、「水揚」 處女を犯すの意より轉じて土藏を破る事。
一、「娘」 娘師隱語としては土藏の事。囚人隱語としては男色の相手に適しい美少年の新入監者。
一、「嫁さん」 簞笥。簞笥は嫁さんにつきものなる故。

3. 動物への比喩

一、「鼬」 敏捷なる刑事又は巡査。
一、「犬」 刑事、間牒、密偵、犯罪密告者等。

一、「猪」 山林盜伐常習者。又陰部の事。
一、「兎」 鞄の事。又田野の作物、果實を竊取する人。
一、「牛」 ぐつすり眠る事。
一、「蝙蝠」 辯護士。又昏黃頃から目星しい家の模樣を窺ひ、夜忍入る事。
一、「蛙」 蟇口。
一、「鴨」 詐欺賭博犯の目的人物。婦人同伴者。又下駄の事。
一、「烏」 黑靴。冬服の巡査。又闇夜の事。
一、「蜘蛛」 刑事。
一、「鰶(コノシロ)」 看守。
一、「五位鷺」 判檢事。
一、「鷺」 夏服着用の巡査。
一、「白鷺」 白晝の泥棒。
一、「白鼠」 店の品物をチョロマカす店員。
一、「蛸」 坊主。
一、「太刀魚」 制服巡査。
一、「南京蟲」 刑事。又巡査にも用ふ。
一、「鷄」 曉方の事。
一、「猫」 刑事。
一、「鼠」 合鍵。逃走行方不明となる事。
一、「隼」 刑事。
一、「豚」 拾圓紙幣。豚は猪の一種なる故。「豚箱」は留置場。
一、「蛇」 訊問される場所。
一、「蝮」 捕繩。豫審處分。
一、「宮烏」 神官。
一、「椋鳥」 ぽツとしてゐて欺され易い田舍物。

3. 其の他の比喩

一、「洗ふ」 往來で品物を拾ひ、その中味を拔き取つて包表物を投棄する事。
一、「石地藏」 石地藏の如く默々としてゐる事。
一、「一本足」 傘。
一、「臼挽」 雷鳴。
一、「金閣寺」 厠。
一、「金魚の刺身」 綺麗だが食へない奴だの意。
一、「倉」 銀行其他類似の會社。又質屋の義。
一、「黑」 銅貨。
一、「今日の新聞は何か」 囚人隱語。今日の菜は何かの意。
一、「けものへん」 一人眞似をする男。猿と云ふ代りに扁だけとつて云つたもの。
一、「元氣」 牛蒡。牛蒡は精力をつけ元氣を出させる野菜なる故。

一、「拳」 金額五圓の事。
一、「五分」 葱。五分切りにする故。
一、「逆さ袋」 蚊帳。
一、「白鬼」 判事。
一、「神功皇后」 紙幣。
一、「巣」 住宅。（愛の巣）
一、「ステッキ」 一。杖は一本つく故。
一、「炭にする」 放火する。
一、「素麵」 捕繩。轉じて巡査の事。
一、「退院」 出獄。
一、「棚」 質屋。
一、「角」 牛、牛肉。
一、「電氣」 太陽、月、星等天體の光。
一、「湯治に行く」 拘留される。
一、「眠らす」 殺す。
一、「箱」 簞笥。制服巡査。四人差入辨當。停車場。巡査派出所。
一、「パチンコ」 拳銃。
一、「婆涙」 寺院。婆さん等が有難涙をこぼす場所なる故。
一、「腹切り」 雨戸其他締のある部分を切り抜き忍入る事。

一、「緋衣」 油揚豆腐。坊さんは緋衣を着て精進料理の油揚を食べる故。
一、「白衣」 處分の寛大なる事。白衣觀音の慈悲から由來す。
一、「廣め」 新聞社。
一、「風呂」 刑務所。
一、「紅をつける」 放火する。
一、「卷紙」 鰹節。
一、「卷物」 卷鮓。
一、「幕の內」 人の假睡中の事。又握飯。小さいむすび、卽ち小結は相撲の幕の內三役なる故。
一、「耳」 土藏の窓。
一、「目球」 窓。
一、「洋行」 刑務所へ行く事。
一、「蠟燭」 手淫。

二、部分に依る全體の代表

一、「開く」 自白する。
一、「荒仕事」 强盗犯人。
一、「石の下」 漬物。
一、「ウロ〳〵」 贜品の故買者。巡査派出所。
一、「置場」 質屋。
一、「押入り」 始めから强盗の目的で忍込んだ者。

一、「ガサ」警察の捜索、臨檢視察。
一、「ガタ」制服巡査。官服を着した檢事又は判事。
一、「ガチャ」制服巡査。劍のガチャ〳〵する音より由來す。
一、「ザンブリ」入浴する事。
一、「透し」障子。
一、「ズンブリ」板の間を稼ぐ事。又轉じて風呂の意。
一、「テラ」金側時計。照明器具一切。寺錢。
一、「左」酒類。
一、「四つ」四手の略。風呂敷の事。
一、「四目」男女交合。

三、人口に膾炙した諺、歌、物語り、芝居の筋、歴史上の事件等よりの轉化に依るもの。

一、「揚卷」娼妓。揚卷助六より由來す。
一、「安達ケ原三段目」刑務所に收容されてゐる仲間に飲食物を差入れる事。
一、「阿漕」性懲りもなく惡事を重ねて、深入りする事。「逢ふことを阿漕が浦に曳く網のたびかさならば人も知りなむ」の歌より由來す。
一、「浦里」雪の除る日の事。浦里時次郎の雪の場より由來す。
一、「浦島の龜乘（キジャウ）」浦島太郎が龜に乘つて龍宮へ赴いた如く、犯跡をくらます爲め失踪逃亡する事。
一、「お染め」娘師の異名。お染は藏に緣ある故。
一、「お大師さん」賭博。大師の緣日は二十一日、賽の目は合計二十一。
一、「お七」放火。八百屋お七より由來す。
一、「金時」斧。
一、「九太夫」穴師。忠臣藏七段目より由來す。
一、「定九郎」傘。鐵砲。
一、「薩摩守」無賃乘車。薩摩守忠度（只乘り）
一、「眞田」六十錢。眞田家の紋所、六文錢より由來す。
一、「七段目」二階の窓から忍び込む泥棒。
一、「俊寛」無期徴役。
一、「自來也」鞄。蛙の轉化。
一、「白河」熟睡の樣。「夢にだに見ざる名所の話こそ、げにも白河夜船なりける」
一、「信玄」甲斐絹。
一、「甚五郎」猫。左甚五郎「睡猫」より由來す。
一、「豐川」油揚豆腐。豐川稻荷より由來す。
一、「判官」警察官の辭職又は免職の事。
一、「師直」香の物（高師直）。

四、字謎的なもの

一、「王無棒」三。王の字の中央の棒無し。
一、「交無人」六。
一、「勘考場」厠。
一、「眼水（ガンスイ）」涙。
一、「神主」葱（禰宜）。
一、「五二」質（七）屋。
一、「骨子（コツ）」サイ。
一、「三水（ズイ）」酒類。酒の字の扁サンズイより由來す。
一、「十三屋」櫛（九四）屋。
一、「シンコ」新米（シンコメ）巡査。
一、「切無刀」七。
一、「千無點」十。
一、「大無人」一。
一、「天無人」二。
一、「西無一」四。
一、「日本（ヒモト）」東京日本橋。
一、「分無刀」八。
一、「丸無（ナシ）點」九。
一、「六字」死亡する事。六字の妙號より由來す。

五、音の一部が省略されたもの

一、「アイ」兇器。匕首の略語よりの轉。
一、「インコ」男女の交合。淫行の略語よりの轉。
一、「カンガアル」關係があるの略。
一、「ゴマ」一般詐欺行爲。ゴマカシの略。
一、「ゴロ」喧嘩。ゴロツクの略。
一、「サイ」財布の略。
一、「サカ」大阪の略。
一、「サキ」東海道岡崎の略。
一、「シャバ」停車場の略。又浮世の事。
一、「ジュク」東京新宿の略。
一、「ダヨ」祕密の事。「祕密だよ」の略。
一、「ヅク」氣付くの略。
一、「トシ」故買者。盗品を「落し」入れる處の略。
一、「ドシ」强盗盗犯人。オドスの略。
一、「ドス」殺傷用の刀劍、匕首類。此れもオドスの略。
一、「ナゴ」女。をなごの略。
一、「ノキ」玉の井の略。
一、「ハマ」横濱の略。
一、「パラレタ」逮捕引致された。ヒッパラレタの略。
一、「ビキ」萬引の略。又轉じて反物の意。
一、「ミヤ」宇都宮の略。
一、「メイド」龜井戸の略。
一、「モタセ」美局人の略。

一、「ヨウ」 御用となる事。
一、「ランダ」 舶來の反物類。オランダの品の意。
一、「リュウ」 拘留處分。

六、音の逆轉に依るもの

一、「エンコウ」又は略して「エンコ」公園。東京では特に淺草公園の意。
一、「カイニ」二階。
一、「キス」 酒。好きの逆。又通貨の總稱。明巣の略。
一、「クワイギン」 銀貨。
一、「グドウ」 道具。
一、「コハバ」 停車場。ハコ（箱）バの意。
一、「サンタク」 澤山の逆。
一、「ジケイ」 刑事。
一、「ジケン」 檢事。
一、「ジハン」 判事。
一、「ジントウ」 西洋人。唐人の逆。
一、「スタン」 簞笥。
一、「ズポウ」 坊主。
一、「ゼカ」 風。
一、「ダイセン」 仙臺。
一、「ヅミ」 水、川、池、沼等水に緣のあるものゝ總稱。
一、「ドイ」 江戸。
一、「藤四郎」 素人。
一、「ドマ」 窓。
一、「ドヤ」 宿屋（略音でもある）。
一、「ナヲン」女。
一、「ナレハ」 離れ〳〵の意。
一、「ネタ」 贋造通貨。品物、材料。種の逆。
一、「バイショウ」商賣。
一、「馬鬪」 鞄。
一、「バンカ」 鞄。
一、「ヒダ」 足袋。
一、「ビタ」 旅行。又銅貨の意。
一、「ブケイ」警部。
一、「ベコ」 神戸。
一、「ベシャル」 しゃべる。
一、「マカ」 釜、鍋。
一、「マクル」 車。
一、「マナ」 現金。ナマの逆。
一、「マハ」 橫濱。
一、「リュウコ」 拘留處分。
一、「ルヨ」 夜。
一、「レツ」 伴。犯者。連の逆。

最後に逆表現のものとして「眞蹟」を掲げて置く。こ

れは骨董屋仲間の隱語で文字は本物の意であるが實は贋物の事。

わが最幼時の記憶

石井佐太郎

母の入院

私の滿四歳か五歳の時である。心に映つて居る人と言へば、母と遊び仲間の兄弟達で留守勝ちの父は僅か同居人位にしか思はなかつた。此の頃母は腸チブスにかゝつて病院に入院した。勿論此の時の母の病氣が腸チブスだつた事は後年になつて聞かされたので、病院に母が運ばれた日の記憶は無い。何故母が居なくなつたのだらうとの不審も抱かなかつたし、不安も寂しいと言ふ感情の記憶も無い。

或る日、兄と共に母の病氣見舞に行く事になつた。それはよく晴れた暖かい日盛りでお祭りの様に大變人が集つて、香具師や一錢菓子屋や玩具のテント張りの店が澤山兩側に竝んで居る可成り廣い街を通つた。私は兄に玩具つて呉れと强請んだ。兄はブツ〱言ひながら、それでも米搗きの車を買つて呉た。私はこれを手にして大變得意で、長い紐でそれを引張りながら「カタンコトン〱〱」と言ふ車の音を聞きつつ歩くのが得意であつた。兄は步き方が遲いと言つて叱つた。二三回後には兄が怒つて其車の紐を無理にグイと引張つた。其度每に私は駄々を揑ねた。しかし其の後はどう納得したものか、大人しく玩具を胸に抱へて病院に着いた。距離はなんでも大變遠いやうに思はれた。

病院の玄關のスリッパを兄がはいた。一足しか揃へて無かつたけれども「俺にもはかせろ」と言つたが兄に二言三言何か言はれてやめたやうであつた。玄關の横の部屋で兄は見舞客用の白衣を着た。「僕にも着せて呉れ」と强請んだのに對し、二人の看護婦が「今坊ちやんの着る白い着物がありませんし、着なくてもよろしいです」と言つた。しかし私は「兄さんだけ着て僕のが無いなど云ふ事はない。その大人のを着るんだ!」と云つて又駄々を揑ねた。兄が默つて立つてゐる時、看護婦達がその大人用のを着せて呉れた。身長の二倍程もある其白衣が裾の所でどう工夫されたか記憶に無い。歸る時まで看護婦が横について居たから或は裾で折つて彼等の手で支へて居たのかも知れない。手は袖の中に隱れて居た。それでも私は少しも不自然や滑稽味も感ぜず、これで良いの

だと思つて、兄より先に堂々と廊下を歩いて行つた。扉が開かれると母の外に二人知らない人が居た。一瞬間どうして此の二人は母を知つて居るのだらうかと不思議に思つた。私が入つて行くと病室の三人や看護婦達は大笑ひをして、此の笑ひは私が病室を出る迄續いた。私の服裝の事で皆が笑つて居るのだと言ふ確かな意識があつたが、私は極めて大眞面目であつた。笑ふのは少し大きい白衣を着て居るからで、自分に似合ふ白衣がないのがけしからんと思つて居た。

私は堂々と母の枕元に進んだ。母は上半身を起して迎へて吳れた。兄は私の後に立つて居た。始めどんな事を言つたのか全然記憶にない。後になつて「お母さんはいつおうちに歸るか？」と尋ねると、母は指で數を示しながら「もうこれだけ寢たらおうちに歸る」と言つた。私は「其時は屹度土産を持つて歸つて吳れ」と吳々も賴んで病室を出た。其の時の母の上半身を起した姿勢や顏は今でもはつきり記憶にある。

其後家にあつて、毎日母の歸つて來るのが待たれた。度々兄などに「何日お母さんは歸つて來るの？」と尋ねたやうであつた。私は歸つて來る母を待つたのではない、其の持つて歸る玩具を待つたのである、どんな玩具を母が持つて歸るだらうかと只それのみに憧れ、空想をして居た。軈て母は人力車に乘つて大勢の人に見守られながら歸つて來た。家に入るなり、すぐ炬燵に入つた。私は最先に土産の事を尋ねた。母は「忘れて來たから此の次に買つて歸るから」と辯解した。私は大變に怒つて母の肩を突いたり、手を打つたりした、遂々泣き出して「切角今まで待つたのに！ もう一度病院に歸れ！」と言つた。大勢の人は私を宥めた。それでも甚だしく母を罵倒したやうであつた。私は此の時、母がこのやうな狀態でなく、只一人で歸つて來たならば、たとへ私の玩具の願望が充足されなかつたとしても樣子が違つて居ただらうと想像されるのである。衆人の目と云ふ事が母に對して私の自我を強力ならしめた一要素と謂ひ得るで有らう。私は皆が歸つて仕舞つた後、再び玩具の事を母に強請しなかつた。

私がフロイドの「レオナルドの幼兒期記憶」を讀んだのは二十一歲の夏であつた。それ以後にはモナ・リーザの表情と今は故人となつた母の寫眞との間に一脈相通ずるあるものを覺えるのである。

人間の妥協生活

フロイドの謂ふ如く「子供は大人の如く行動し、大人の如く扱はれたいものだ」との心理は、私に於ても明

らかに認められる。

世に「三つ四つの可愛い盛り、五つ六つの憎まれ盛り」と言ふ言葉がある。自我に目覺めて來るのは丁度五歳頃であらう。生を受けて漸く周圍を認識し始めた頃は只他人の言ふ通りになつて滿足して居る。「此處までおいで!」と言はれると只其命令にのみ從ふ。「お手々を擧げて!」と云はれると素直に手を擧げる。然るに五歳頃になるとそんな事では自我は滿足しない。强大となつた自我衝動は凡ゆる外界をして自我の慾望に服從せしめやうとする。「盲蛇に却ぢず」の例の如く、何等修正・壓迫を受けない自我は此の幼年時代に於て見られる。長じて多人數の中に出て、社會を知り、自分と同等の人間を知るに及んで、次第に自我衝動は壓迫を受け、抵抗を作るやうになり、最も强き最もナルチスムス的のものを無意識の中に追ひ込むのである。しかし、實現されざるものとして抵抗を作つても暴君に比すべき自我は無意識の中にあつて隙さへあれば抵抗を破らうとする。抑壓を受けても決して消滅し得るものではない。此の自我衝動と抵抗との妥協を計りつつ步いて居るのが人間の姿である。

幼兒の群衆衝動

私が就學年齢に達して小學校に母に連れられて行つた。大きい玄關で白い丸い柱が高く立つて居た。私達が來る所としてば馬鹿に大きい建物だと呆れて少し恐ろしい氣がした。私達はその玄關の所で待つた。外にも五六人私と同じやうな子供が何れもびつくりしたやうな顏付で默り込んで居た。黑い洋服を着た先生が一人出て來て何か親達に少し言葉をかけて又直ぐ引込んで仕舞つた。一體奥で何をしてゐるのだらうと思つた。母は「すぐ今の先生が出て來て敎室に連れて行つて下さるから何處へも行かないで待つてゐらつしやい」と云つて、私を殘して歸つて行つた。私は少し辛く思つたが辛抱して立つて居ると連れて來た親達は全部歸つて、子供達計りとなつた。默つて待つて居ると一人が走つて門の外へ消えた。又二人程外へ走つて行つた。私は「逃げて歸つたのだなあ」と思つた。「先生が出て來た時、自分は待つて居るから良いが、阿奴等は別物にされるのだ。阿奴等は賢くないのだ」と私は彼等を嘲笑つた。其中私一人になつて恐ろしく、なんだか後から追ひ立てられるやうな氣がした。而して始め思つた如く大きい建物が尙一層、親しみ難く思はれ矢も楯も堪らなくなつて、遂々其玄關を後にして家の方に走り出した。學校を出ると大變氣が輕くな

――(八一頁に續く)――

講座

部分本能いろ〳〵

岩倉具榮

一、妥協

前講に於いても縷述しておいたやうに、人間の心と云ふものは、本能の力とそれを抑壓する禁制の力との間の妥協となつて働くものである。かゝる妥協は特に神經症に特有であるが、普通の健康者にも見出される。之迄に吾々が研究して來た例に於て、二つの相爭ふ願望の兩方が凝縮、又は過度決定となつて現れてゐるのである。妥協のやゝ違つた形のものとしては、次のやうなのがある。卽ち、超自我の中に組織された禁制的傾向が、本能的欲望を完全に抑壓する力を持たないために、多少の苦痛を忍ぶことを交換條件として、或る程度の本能滿足を許容すると云ふ妥協がある。宛も、懲罰に依つて快樂に耽つたことの償ひをするかのやうな風である。ところで、サディスティックな本能、或ひはマゾヒスティックな本能は、特にこの種の妥協に入り込むに適してゐる。何となれば、それ等は懲罰を加へんとするに就いて超自我が採る手段そのものによつて、その滿足を得ることが出來るからである。從つて、サディズムにもマゾヒズムにも特別に道德的な種類のものがあると云つても間違つてゐないことになる。

二、道德的サディズム

道德的サディズムに於ては、衝動は外部に向けられる。そしてある種の禁ぜられた充足を敢へてした他人を罰することによつて滿足を得るのである。吾々の法律及び刑罰制度、並びに吾々自身の社會的制裁の中には、全體としての社會（又はその中のある者達）が、吾々の法律的、社會的、或ひは倫理的規則に反したものを罰すること（大抵の罰は甚だ殘酷である、何となれば、肉體及精神双方の拷問が道德的根據から是認されてゐるからである）によつて、そのサディズムと道德上の公憤とを同時に滿足させてゐる如き實例に滿ち滿ちてゐる。吾々の宗敎的及び敎育的制度についても、同樣なことが、極近に至る迄、云はれ得たのであつた。今日では幸にして、文明人は宗敎の名に於いてする殘忍行爲を廢止するほど大きな進歩を示すことになつた。政治の名に於いてする殘忍行爲は、ある意味で昔の宗敎的殘忍の代理になつてゐ

ゐるのだが、これの廢止はまだまだ難しいやうだ。と同時に、教育の名に於いてする道德的サディズムも、やはり消滅しかゝつてゐる。

三、道德的マゾヒズム

道德的マゾヒズムに於ては、苦痛と刑罰とを要求する衝動は自身に向けられる。そして凡ゆる種類の不愉快、缺亡、懲罰、及び卑下を自分自身に加へるのであるが、それ等の性質と範圍とは精神分析に依つて漸く分り來始めたのである。

之の道德的マゾヒズムの場合に於いては、そこに性的要素のあることは、上つ面だけの研究では一寸分りにくいことがある。併し乍ら、自分自身の苦痛を「享樂」し苦痛のなくなるのを肯んじないやうな種類の人々が存在する事は、誰しも認めるところである。この樣な人々は道德的マゾヒズムの極端な實例を（常態的、健康的の形で）現してゐるのだ。吾々は、この樣な自己刑罰が現れるに特別都合のよい（或ひは、そのやうな自己刑罰に支配されてゐると云ふ方がよいかも知れぬ）ある時代と、ある文明とを擧げることが出來る。卽ち、その禁慾僧的文明を生んだ歐洲中世と、スラブ人の近代文明とがそれである。現に、本誌所載ドストイェフスキーの分析を精讀して御覽なさい。

四、窃視慾

窃視慾 Scoptophilia と露出症とは一對の部分本能として知られてゐるが、この兩者が如何に發展するかを調べて見ると、右に云つて來たことがはつきり分つて來る。窃視的傾向があまり强すぎると、一般的に好奇心が强く他人の生活や秘密を探偵したり嗅ぎ出したりすることが好きになつて來る。轉位の現象がまだ比較的低級な形で現れてゐる場合には、それの性的背景は屢々未だ容易に認められる。現に吾々の多くは非常にゴシップ好きなものであるが、これなどは轉位せられた窃視慾の傾向であつて、そこには吾々が右に論じて來た道德的サディズムが屢々混合してゐるのである。昇華の高級な形となつては、窃視慾は科學的探求となるのが最も重要な役目である樣に思はれる。尤も此の場合には、サディズムが多少協力してゐるにはゐるが……。科學者はその『學的對象』を『愛』しはするが、それにも拘らず彼等がその對象の祕密を『ほじり出し』たり『絞り出し』たりする時にはそこに多少の攻擊的態度が見える。

五、露出慾

露出慾的の本能は本來は裸體を見せやうとするものであるが、個人發達の途中に於ては、それは必然的に（文明人に於て）大なり小なりの程度に、着物を身につける

ことに置換へられ（轉位せられ）るやうになる。併し着物は極めてアムビバレントなものである。それは肉體をおほひかくて、吾々が『お行儀』と呼ぶ禁制傾向に役立つと同時に、新しい標準で露出慾を滿足せしめる極めて有效な新手段である。極めてうまく行く妥協の形式として、着物は、個人神經症の多くの形と平行する社會的神經症の興味ある實例を提示するのである。英國の分析學者フリウゲルは『衣裳心理學』（一九三〇）と云ふ書を書いてゐるのは、かゝる興味からだ。

露出慾は、それがまだ單純な形で出てゐる場合に於ては未だ裸體を見せると云ふ形をとつてゐるが、併し露出慾は屢々皮膚と筋肉の性感によつて强められる。そして之等の三者が結合されて、スポーツ及び今日の裸體運動に於て、共に大なる役目を演ずるのである。吾々が吾々の幼年時代から無意識に保留して來た所のこの裸體に對する慾望が、如何に强くして根本的であるかは、夢の最も一般的な、典型的なものゝ一つが、群衆の面前で我々が裸體でゐたり、下着だけでゐたりして困つてゐる所であることを考へれば、思ひ半ばに過ぐるものがある。その更に昇華された形に於ては、窃視慾は舞臺、銀幕、酒場及演壇の如き晴やかな公開的な場所で一役を演ずる事を意味する職業に就くことになることもある。併しその病理的の樣相としては、それはある種の皮膚病と關係を持つ樣に思はれる。が、現在ではこの關係はまだよく了解されてゐない。

六、性器的部分本能

最後に、性器そのものに關係する部分本能に就いて考へて見よう。轉位せられた生殖的リビドーに多少の根源を負ふてゐない人生の諸活動は、その數極めて少く、まづ殆どないと云つてもよささうである。現に、殆どあらゆる事物や人間のするあらゆる仕事が性的（殊に男根的）象徴となつてゐるに徴しても分ることである。

併し乍ら人類の偉大なる文化的業績であるところの、火を作ることと、農業の發見及び發達は、やはりその必要なるエネルギーをこの性的根源から得てゐるやうに思はれるのである。火や熱が如何に性慾と密接の關係あるものであるかに就いては、既に本誌昨年十月號本欄に田内長太郎氏が詳しく講述せられた通りである。農業が如何に性的象徴となるかに就いては、『耕す』と云ふ言葉が、多くの國語に於て性的行爲を示すに用ゐられ、又『種（胤）』とか『畑』とか、『實る』とか『實らぬ』とかいふ言葉は、農作物と人間との兩方にかけて適用されるといふことを考へて見れば分ることである。農業の儀式に性的の祭りと性的の底拔騷ぎとの伴ふのが世界的な傾向

であるが、この事は實に精神分析學の發見を人類學が確證するものであるのだ。

性的昇華の實例をもう二つあげて見るならば、その內の一つの方は多分他の方よりもつと根本的でさへあるのだが、それは性的象徵の一番普通のものである道具を使用することである。然るにある有名な言語學者は、言葉の發達は、性的精力をこの方面に曲げてくることによることが多いと考へてゐる。そしてその關係については、精神分析學が立替つて、相當の確證をもたらしたのである。

七、去勢コムプレクス

性器本能に關して今一つの重要なな現象がある。それは影響するところが廣大であるし、且つ重要であるから注意しておく必要がある。之は（右に述べて來た他の場合に於ける如く）慾望の轉位（置換）ではなくして、性器とその機能とが障害されたり妨げられたりしない樣にとの心配の形を取る反動形成である。先づ第一にこの現象は、性的の考へや行爲が罪惡と見做されてゐるので、それに對する刑罰を恐怖するものゝ樣に見えるのが常である。この心配は多くの人々の無意識の心に大きな影響を及ぼし、そして普通に『去勢コムプレクス』と呼ばれてゐるものを形成する。その典型的のものに於ては、それは男性の現象である。そして初めは男根喪失の恐怖となつて現れる。併し、それはまた婦人にも起り、その場合にはそれは男根が失はれたといふ信念（從つて根强い劣等感）を惹起すやうになる。實際、兩性間の解剖學的相違は屢々コムプレクスの起源に於て重要な役目を演ずる。併し常態としては、赤兒を生む能力は女性心理に於いては、男性の男根所有と同價なものである如く思はれる。之は多分、次の樣な事實に關聯するらしい。卽ち、本來の去勢コムプレクス（性器をとられるとの不安）は依て以て滿足を得べき手段を失ふと云ふ一般的恐怖の特別な現象に過ぎない樣に思はれる。この恐怖は屢々、初期の『外傷的』――卽ち大きな心的打擊を與へる如き――事件の數々と關係がある。それ等の事件の內には、母親の子宮から放り出されること（出產）、乳離れ、及び糞便排出（喪失）などが、みなつ一の役目を演ずるのである。之等最後に述べた諸事情が如何なる意義を帶びてゐるか、その詳しいことは未だ十分に解されないが、這般の事情の存在してゐることについては、疑ふべき理由はないのである。最後に吾々は次のやうに云はう、卽ち去勢コムプレクスは男根象徵の發達に關係する所多く、從つて巧妙な象徵的重要さを持つものを使用すること、（『不幸』から我身を守るためのお守りとか、『病み目』

への豫防の如きものとなつて、これ等は屢々合理化されてゐる）は、價値ある機關（男根）を喪失することの恐怖に對して安心を供するのである。

精神分析語彙（十一）

一、胎内空想——「住居は母胎の代償である。母胎としては最初の、而もその後もなほ常に憧憬せられてゐるらしい居所であつて、そこに於いて人間は安泰であり、また幸福を感じたのであつた。」（フロイド「文明論」）人類に普遍なる極樂の空想は、その心理的起源を、この胎内生活の經驗におくと假定せられる。地獄はこの空想と憧憬のアムビファレント的反面としての恐怖の影像であるとされる。

一、多形倒錯——幼兒は部分本能が各個別に發達し、未だ性器の統裁が各部分本能の上に及んでゐないから、必然的に多形的變態倒錯の樣相を示すのである。

一、タブウ——「Tabu はポリネシア語である。この語が表すやうな概念を、我々は何も持つてゐないので、飜譯することは難事である。……タブウの意味は、我々には二つの相反する方向に考へられる。一方は神聖と云ふ意味で、他方は氣味惡い、危險なる、禁ぜられたる、不滿なる、と云ふ意味である。タブウの反對語は、ポリネシア人に於いて noa と云つて、普通とか一般とか云ふ語に近似した意味である。タブゥは差控へ（レゼルベ）とも云ふべき概念が含まれて居る。即ちタブゥは本質的には亦、禁止や制限と云ふ事で現はされる。我々の複合語なる Heilige Scheu（神聖なる畏怖）は、屢々タブウの意味と一致する。タブウの制限は宗教的、或は道德的禁制とは幾分違ふ。それは神の掟に基いたりものではなく、自分自身から起る禁慾である。道德的禁慾と區別される所以は、タブウは一般にその必要のための禁慾であつて、その必要を基礎づける制度化の缺けてゐることである。タブウの禁制は如何なる根據も不要である。その由來も不明である。我々にとつては不可解であるが、その支配下にある者等にとつては、自明の事と見做されてゐる。ヴントは、タブウは最古の不文の法典と稱してゐる。タブウは神よりも古くあり、各宗敎の發生以前に溯るものである事は、一般に認められてゐる。」（フロイド「トーテムとタブー」）

一、第三性——男性でもなく、女性でもなく、性的中間級に屬するものゝ意。性的中間級の條參照。

一、代償——リビドーを滿足せしめ得べき一定の對象が禁斷せられてある時、その代理として、假の滿足を得べき、間に合はせの空想的對象。但し代償形成はリビドー滿足の禁制の場合にのみ生ずるとは限らず、アムビヷレンツの葛藤を避けるためにも用ゐられる。（未完）

ソヴェト・ロシアの分析教育

十年ほど以前からロシアには、兒童に對して社會的教育を施さうとの議が起り、そのために精神分析學に興味と同情とを有する人々相集り『子供の家』なるものを設立した。それは一方兒童の科學的研究の機會を得んとするものであつたが、他方に於いては精神分析的認識を土臺として教育のために新たな道を發見し得るであらうことを豫期したものであつた。そのために民間教育調査會が出資して、或る別莊を買入れ、『兒童の家研究所』を開始したのが、一九二一年八月十九日であつた。これはモスコウ精神神經病學會に附屬するものである。研究所長はエルマコフ教授で、ロシアに於ける分析運動の大立物である。當時モスコウに於いては、教授身邊の人々を助けて仕事をする人があまり多くなかつた。精神分析の理論だけでも心得てゐる人さへ稀有であつた。そこで、研究所關係の人々は、そのための教師を養成してかゝらねばならなかつた。

研究所ではまづ三十名の兒童を預り、それを次の三群に分けた。

第一群――一、二歳の幼兒六名。

第二群――二、三歳の幼兒九名。

第三群――四、五歳の幼兒十五名。

幼兒等の親は種々の階級に屬し、農民、勞働者、知識階級などであつた。研究所の事業は着々として進捗してゐたが、三ヶ月もすると奇妙な噂がモスコウの市中に傳はつた。それは、研究所では幼兒を精神分析研究の犧牲にして、早期に性慾を亢奮させてゐると云つたやうな事であつた。それは如何にもありさうな事で、わが國でさう云ふ仕事を始めてもそれくらゐの事は云はれさうである。

その後、いろ〳〵經緯があつたが、一九二二年には國立の精神分析學會が創設せられて、『兒童の家研究所』はその附屬となつた。同年の秋と冬とに、同學會から監督官が視察に來所したが、その科學的、及び教育的活動に就いての報告は非常に賞讃的であつた。

一九二三年には、必要な諸機關を存續せしめるための資金がないと云ふので、政府當局の方から、果してそれほどの費用を拂つて『兒童の家研究所』を存續せしむるの價値ありやと云ふことが問題にされ、五名の委員を選擇して更に同年の秋の間にその成績を調査せしめると云ふことになり、從つて同研究所の存續は不確定のものとなつたが、その後、如何なる運命を辿つてゐるか、筆者の手許にその調査資料がないので明言いたし兼ねる。併し何れにもせよ、ロシアの有識者一般が精神分析の教育的價値を認めてゐることだけは、動かぬところである。

最近國內事實

☆ 先頃、改造社が『英雄講演會』なるものを催した時、賀川豐彦氏は『英雄の社會的精神分析』なる題下に講演を試みた由、新聞廣告に見えたが、その内容に就いては筆者、傳聞するところなし。

☆ 本誌本年二月『女性心理研究號』講座欄所載、大槻憲二氏稿『女心の分析』は、『人生創造』五月號に轉載。

☆ 『フロイドのマクベス研究』大槻憲二氏稿（『藝術殿』四月號。

☆ 『初戀以後の初戀』同氏稿（『人生創造』四月號。）

☆ 『精神分析から見た有閑夫人問題』同氏稿。（『新青年』五月號。』

☆ 『高坂元三君の藝術』同氏稿。（『現代美術』五月創刊號。）

☆ 本誌先月號内容に關しては、本號卷末廣告を參照ありたし。

本研究所研究會四月例會

例に依り神田驛前アメリカン・ベーカリにて、十六日、午後五時半より開く。

食後、大槻氏立つて、まづ當夜初出席の大久保眞太郎、立川玄一郎兩氏を紹介した。兩氏は遞信省官吏であるが、教育に興味を持たれ、今後その方面に力を注がれる筈であると云ふ。大久保氏は先般當研究所の公開講習會に出席せられた人である。

小山良修氏、次に立つて、本誌本號所載『分析書と名付けられたので』を朗讀し、それに就いて種々の解説を試みられた。

霜田靜志氏は『夜尿症癖にいて』醫學的説明を小山氏に求められ、それに就いてニイルの説の紹介など霜田氏自身語られ、更に長崎氏は快樂原則解釋の必要を主張せられたので、大槻氏は嘗ての夜尿症患者の取扱ひの經驗から分析的には長崎氏の説には一考すべきものあることを述べられた。

最後に、高橋鐵氏、大槻氏の本誌先號所載『愛染』分析評に就いて、二三の質問を大槻氏に試み、長谷川氏代つてそれに答辯を與へられた。高橋氏は大槻氏の『愛染』評に、非常に『感激』せられたさうである。出席者は右言及諸氏の他、小杉長平、岩倉具榮、小松德、大槻岐美の諸氏であつた。

近來は、長谷川氏も早稻田大學に於ける新講座の準備のために多忙であり、大槻氏も日本橋丸善階上に於けるモリス文獻展及び『モリス書誌』編纂のために繁劇を極めてゐられたので、本夕は兩氏の研究談を聽くことが出來なかつたが、來月にはまた何か纒つた話を承ることが出來るであらう。

小山氏の提案に依り、來月度例會からは、研究談に入る前一時間位づゝ、講座を開くことになつた。出席者は本誌當月號及び當分相成るべくはフロイド『戀愛心理論』（大槻氏譯、春陽堂版）を教科書として持參せられむことを希ふ。

相　談

父の家を去りかねて

問――私は本年廿五歳の未婚の女ですが、十七歳の時五人の弟を殘され母に死別致しました。以來父は私達がいとしい許りに後妻も貰はず參りましたが、私も懸命に弟達の母代りになつて働いて參りました。尤もこれ迄私にもかなり縁談もありましたが、家の事情の爲つい お斷りとして今日に至りました。然るに父は最近ひくど私の縁談を心配しだし、今迄家の爲に働いて呉れた丈で充分だから、婚期を失はない中にぜひ結婚して呉れと申す樣になりました。

然し私は弟がまだ廿三歳ではあり、結婚するに二三年も間があると思ひますので、せめてもう少し家の爲に働きたいのです。父の心は感謝してもしきれないのですが、これほど子を思ふ父に私が嫁いだが爲に少しでも不自由をかけては濟まないし、父の恩を思へば婚期など遲れて悔いる事はありません。家の爲に盡すのは子たり姉たる者の務めと存じます。然し父は父で結婚を勸めますし、又今迄縁談をお世話下さる方々に唯氣が進まないとお斷りしてありますので、餘り度々の事故先樣の感情を惡くしてはと心配ですが、どうしたらよいでせうか。（滋子）

答――貴方のおやさしいお心持ちには、記者も、うれしくなりました。さうして、記者が普通の人間なら、さう云ふ方をこそ妻に貰ひたい、父に優しい位の人だから夫にもやさしからうとかう思ふのですが、私はさう單純に考へられないのです。

貴女の場合は典型的なエディポス・コムプレクスのやうですね。貴女は『母代りになつて働いて參りました』と云つてゐられますが、それは單に家政の事ばかりでなく、もつと深い心持ちまで『母代り』になつてゐられることをお氣付きにならなければなりません。貴女の父君も貴女を妻代りにして來られたのですが、その心持ちに父君は近頃、ある種の危險を感じて來られたのではないでせうか。その危險を避けるには、貴女を早く片付けるより外はないと考へ始められたのではないでせうか。

いやらしい事を云ふと、貴女はお考へになることでせう。然し人間を（自分と自身の近親を）あまり神樣のやうに考へることはお愼みにならないと、神樣から忽ち野獸に轉落することがあります。さう云ふ實例を貴女は少しも御存知ない。併し私たちは知り過ぎてゐる。實の父娘の間でさへも、否、間であるからこそ……ですよ。父君に對する貴女の心持を冷淡に淸算しておしまひなさい。それは分析に依るより外に途はないでせう。それから結婚をなさい。でないと貴女は結婚しても、結婚は失敗に終りますよ。今のまゝの貴女の生活が、結局行づまりであることを考へたら只今々しせまつた第一の問題は、貴女の父君に對する心を洗ひ流して了ふにあることになります。（記者）

編輯後記

ドストイエフスキー研究號を、こゝに分析學界に送る。本號はなるべく、斯學先哲の研究を紹介するに留めておいた。他日また我等獨自の研究を徐々に發表する機會があるであらう。ドストイエフスキーは、フロイドの云つてゐるやうに、實に典型的なロシア魂であるが、そこにその深さに於いて『人間性一般』に共通するものがある。本號の小見出しはそれに因る。

併しド氏には慥に神經症的なものが多分に含まれてゐる。我々は、彼の病理的心理をよく批評し得なければならないと共に、また反面に於けるその眞劍さと正直さとに大きな敎へを受けねばならない

×

ノイフェルドのドストイエフスキー論は非常に分りよくて面白い。フロイドのは理論的でやゝ難解であらうが、後者は恐らく前者を讀んで、それに刺戟を受けて書かれたものであらうと思はれる。讀者はまづノイフェルドのを讀んでから、フロイドのを讀まれるやうお勸めする。その方が分りよくていゝと思ふ。

なほ、ライクのフロイドのド氏論に對する説も、なるべく次號に紹介したいと思つてゐる。

×

本號には、始めて新執筆者がない。みな讀者諸氏には、馴染みの方々ばかり。たゞ小山氏は創刊號に書かれて以來、今度が二三度目。石井氏は本年一月號に書かれて今度が二度目。小野田氏は、昨年十一月號の「X考」以來である。

×

新特別誌友を御紹介いたします。

大連市盤城町四二　伊藤梅吉氏
牛込區赤城下町四三　辻　修氏
杉並區阿佐ケ谷五ノ九　内田弘之氏
奈良縣生駒郡富雄村　茨木基忠氏

讀者諸氏はなるべく特別誌友となつて本誌に研究や感想を發表せられむことを望みます。

昭和九年四月二十五日印刷
昭和九年五月一日發行　第二卷第五號

定價五十錢（郵税一錢）

編輯及發行　東京市本郷區駒込動坂町三二七　大槻憲二
印刷所　東京市牛込區改代町廿四　理想社印刷所

定價一部　五拾錢（郵税一錢）
半年分　參圓（送料共）
一年分　六圓（送料共）

御注文規定

●本誌の御注文は一切前金に御願ひ致します。
●御送金はなるべく安全至便なる振替を御利用下され度く、振替口座東京七八八一七番へ御拂込み下さい。
●郵券代用の場合は一割増に願ひます。
●本誌廣告に關しては、御照會次第本部員を伺はせます。

發行所　東京市本郷區駒込動坂町三二七　東京精神分析學研究所　振替口座東京七八八一七番

大賣捌所　東京堂・東海堂　大東館・北隆館

來月號豫告

戀愛心理研究號

戀愛心理の研究は精神分析學の最も得意とする分野であり、この方面はまた斯學發生の畑でもあります。二月號に於いて女性心理を研究して、讀者諸氏から盛んな反響を得た本誌は六月號に於いてこの方面に研究の鋒先を向けることに致しました。

戀愛及び性教育に於ける兩親の失敗……大槻憲二

アドラーの戀愛心理研究……長谷川誠也

ダンテ及びルソーに於ける偉大なる戀愛……高木力太郎

ドストイェフスキーの戀愛……岩倉具榮

マンスフィールド小説……同氏

フロイドのド氏論について（ライク）……大槻憲二

月刊雜誌
定價五十錢
送料ナシ

半年　二圓九十錢
一年　五圓八十錢
送料ナシ

昭和九年四月　文學研究號　第二卷第四號

東京精神分析學研究所出版部
本郷區動坂町三二七
振替・東京七八八一七七番

坪内逍遙博士會號執筆

五月號（第四卷第五號）　要目

編輯　財團法人國劇向上會　東京市淀橋區戸塚一丁目　振替東京二〇二九〇番
發行　梓（あづさ）書房　東京市神田區駿河臺町一ノ八　振替東京七八六四四番
一部　定價五十錢（送料一錢五厘）

精神分析學診療所

田園調布驛東口際

診療科目

諸種疾病ノ診斷及治療
性格素質ノ審査及矯正
精神衞生ノ相談及指導

診療ハ特ニ
神經衰弱、ヒポコンデリー、不安性神經症、性障礙、ヒステリー、强迫觀念症、恐怖症、不眠症、心臟神經症、憂鬱症、偏執病、輕度早發性癡呆症、性格異常等。

醫學博士　古川平作

東京市世田谷區東玉川町三五八七
田園調布驛東口下車
電話田園調布一〇三二番

診察時間
午前七時――正午（主トシテ外來）
午後一時――五時（主トシテ往診）
但シ日曜ハ午前中、祭日ハ休業

昭和八年七月七日第三種郵便物認可
昭和九年四月廿五日

II. Jahrgang, Heft 5, Mai, 1934. Erscheint monatlich.

ZEITSCHRIFT FÜR PSYCHOANALYSE

Herausgegeben vom „Tokio Institut für Psychoanalyse.“

(Sonderheft für Dostojewski-Studien)

Inhalt

Preis des Einzelheftes 50 Sen.

Tokio Psychoanalytischer Verlag,
327, Dozakacho, Hongo-ku, Tokio Nippon.